とある忍者の奮闘記

レフィス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある忍者の奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ５９９９Ｐ

【作者名】
レフィス

【あらすじ】
前世の記憶を持った一般人がＮＡＲＵＴＯの世界に転生する話。
原作の流れを変えないように頑張る忍者の奮闘記です。
注意　この話にはオリ主、オリキャラ、独自解釈が存在します。そのことを踏まえてご覧ください。

プロローグ

「もう夕方だしそろそろ帰ろうぜ、リー」
「待ってください。後、百回腕立て伏せをしたら帰ります」
小さな森の中で沈んでいく太陽を眺めながら俺はため息をついた。
さっき聞いた時は七十回だったのが増えている。
またかと思いながら俺は木に凭れ掛かる。

「何もしないのならムスビもやりませんか？」
「今日は遠慮しとく」
リーは少し残念そうな顔をするが、直ぐに腕立て伏せに戻る。

俺の名前は海苔巻ムスビ。
多分オニギリから取られたのだろう。安易なネーミングだと思う。

俺には何故だか分からないが前世の記憶がある。
前世では別に何か悪い事をしたでもなく、死んだわけでもない。
気付いたら体が小さくなっていてベッドの上で寝かされていた。
その時、既に俺は前世での自分の名前を覚えていなかった。
其れだけではなく、自分に関わっていたはずの人の名前や顔が全く頭に出てこない。
最初は何事か分からず、また赤ん坊だった為がすぐぐずってしまっていた。
その度に母さんがあやしてくれるので、毎回申し訳ない気持ちで一杯だった。
頑張って思い出そうとしたものの、全然頭に浮かばなかった。
まぁ、もし覚えていたら精神的に不安定だったからそれでよかっ

たかも知れない。
一ヶ月程して、ようやく自分が俗にいう転生というものをしてしまっているのに気付いた。
しかし、その時はまだ『ＮＡＲＵＴＯ』の世界に来ているとは思っても見なかったが。

「ムスビ、終わりましたよ」
「ああ、そろそろ帰るか」

そして、一緒に居るのはロック・リー。
『ＮＡＲＵＴＯ』の主要人物の一人である。
彼と出会ったのは幼少の頃、なんと家が隣だったのである。
この時は、かなり驚いた。脈絡もなく原作キャラに出会ってしまったからだ。
その後は、隣同士で同学年という事もありよく遊ぶようになった。
リーは小さい頃から忍びを目指していたようで、度々修行につき合わされている。
それは、アカデミーに通った現在でも変わりは無い。
アカデミーでは何人かの主要人物にも出会っている。
同学年では日向ネジ、テンテン。
下の学年にはうずまきナルト、うちはサスケ、春野サクラなど、今後活躍していくであろう人物がいる。

「今日は、俺の家で飯食っていけよ。父さんと母さんも喜ぶし」
「本当ですか！　ありがとうございます！」

因みに俺は原作キャラで友達と呼べるのはこのリーだけである。
何故かと言うと原作を壊したくなかったからである。
俺という異分子が介入する事で物語が歪むのを避けたかったのだ。
リーとはもうどうしようもなく深い関係だったのでそのまま付き

合っているが。

「ただいま」
「お邪魔します！」

家に帰ると玄関の方に母さんがやってくる。
母さんの名前は海苔巻梅。
息子の俺から見ても若い。
現在は引退しているが、元々忍者であり中忍だったらしい。
一見優しいが、怒ると容赦が無い。

「お帰りなさい。あら、リー君いらっしゃい」
「母さん、リーも一緒に夕食食べてもいいよね」
「もちろんいいわよ。腕によりをかけて作るわ」

リーは敬礼のポーズで「ありがとうございます！」と何度も言っている。なんというか様式化されて風景である。

「そういえば父さんは？」
「ああ、綱さんならいつも通り裏庭にいるわよ」
「ありがとう。リー行こうぜ」

父さんの名前は海苔巻綱。
母さんと同じく忍者であり上忍。
母さんが言うには土遁が得意な優秀な忍びらしい。
かなり温和な性格で近所の人達からも慕われている。
四十代になった今でも毎日裏庭で修行に励んでいて、俺も尊敬している。

「ただいま、父さん」

「お邪魔しています！」
「おお、おかえりムスビ。いらっしゃい、リー君。二人が来たという事はまた忍術を見せて欲しいのかな？」
「いや、今回は俺が見せたい」

リーと父さんはこちらを見る。
俺はニヤリと笑い二人と距離をとる。

「良く見ててくれよ！」

俺はチャクラを練り印を結ぶ。

「土遁・土流壁の術！」

俺は口から土を吐き、目の前に１m程度の大きさの土の壁を作る。

「まだまだ不完全みたいだな」
「ん～今回は上手く行くと思ったんだけど」
「精進あるのみです！」

俺が得意なタイプは父さんと同じく土遁。
小さい頃父親に頼み込んで感応紙を使わせてもらい、その後修行法を教えてくれとお願いした。
無謀なお願いだったのだが、何と了承してくれたのだ。
そして、コツコツ頑張り今では何とか発動できるようになっているがまだまだ甘いようだ。

「来年にはアカデミーの卒業試験もあるし土遁の術の一つぐらいはマスターしたいな」
「卒業試験ですか……僕は受かるのでしょうか」

「大丈夫だよ。リー君の体術のレベルは今の木の葉の下忍でも滅多に見ないからね。それに僕は君のような人をしっているよ」

卒業試験という言葉にリーは少し落ち込むも父さんが上手くフォローする。

多分知っている人とはガイ先生だと思う。

昔聞いたら全身緑色のタイツの様な修行着を着ているって言ってたし。

しかし、数年後にはリーもそれを身に纏う事になるのか……何か涙が出てきた。

毎日アカデミーで勉強。

アカデミーが終わるとリーと一緒に修行。

そして父さん、母さん時にはリーと一緒に夕食を食べる。

こんな風に、原作が始まるまで俺は過ごしていた。

第一話

「ちょ！　手加減しろって！」
「修行は本気でやら無いと意味がありません！」

何時もの森の中でリーと模擬戦をしている。
ルールは忍具以外なら何をしてもありだ。
何度も戦ってはいるがあまり勝てていない。
此方が忍術を使う隙が無いのだ。
父親にチャクラ吸着による木登り修行を教わるまでは結構勝てていたのだが。
それを教わった日からリーと俺は木登り修行に没頭した。
お互いにチャクラコントロールが上手くなったものの、何故かリーの方が素早くなってしまったのである。
どうやら、俺との修行が終わった後も隠れて修行をしていたそうだ。流石は努力の天才である。
その為忍術を使う隙が無く、何時もなし崩しに体術での戦いとなり、最後には競り負けてしまう。

「逃がしませんよ！」
「その程度！」

リーの放つ回し蹴りを両手で受け止めると、思いっきり放り投げる。
リーは空中で回転しながら受身を取り、木に着地する。
そして、その勢いを利用して突っ込んでくる。
そこで、俺はチャクラを練り印を結ぶ。

「土遁・土流壁（どとん・どりゅうへき）！」

すかさず自分の目の前に土の壁を作り出す。
今回は１ｍ５０ｃｍ程度の壁を生み出すのに成功する。
リーはその壁に向かって勢いのついたとび蹴りを行う。
しかし、その攻撃は土の壁により防がれた。
そして、隙の出来たリーに向かって右拳で思いっきりぶん殴った。
拳はリーの顔面に当たり、そのままリーを殴り飛ばした。
少しやりすぎたかな？　と思ったが、少ししてリーも起き上がったため安心した。

「今日は僕の負けですね……しかし、ムスビは凄く成長してますね！　凄いです！」
「何とか土が身長を超えるようにはなってきたかな」

因みに身長は１ｍ４０ｃｍ台。リーも大体同じであり、原作開始時には１ｍ５０ｃｍ台だろうと予測される。

「でも、まだまだ実践では使えないな。父さんの土遁・土流城壁ぐらいは欲しいな」
「あれですか……確かにアレぐらいの大きさなら大体の攻撃は完封できると思います」

因みに大きさはヤマトがナルトの修行の為に用意したものと同程度である。
土を生み出すだけの簡単な術に見えるが、使用用途は様々である。
土を増量する事でチャクラの使用を抑えられ、土壁の形状は術者により平坦な壁から針山まで様々である。
攻撃・防御両方において使える優秀な術だと思う。
しかし、戦闘において使われた描写はない。

「今日はどうしますか？」
「俺は忍術の修行するわ。下忍になるまでには完成させたいから」
「わかりました。今日は別々の修行ですね！」

そういうとリーは大きな木に向かって正拳突きを始めた。
一発、一発事に木が揺れる。
俺もリーの後に続くように土遁の修行を開始した。

アカデミーでは色々ときになった事があった。
まずは、男性と女性が別々のクラスなのか？　という事である。
原作ではくの一クラスというものが存在していたものの、アニメではそんな描写は無く男女共同だったりす。
結果は原作順守なようで、男と女で分かれていた。

「聞きましたか、ムスビ。今日は一つ下の学年と合同授業のようですよ」
「合同授業？　何をするんだ？」

確かに前世でも学校では上級生と下級生の交流はあった。
しかし、少し悩むこれで接点が出来たらどうしようと。
まぁ、これぐらいで接点は出来ないとは思うけど……
原作でもナルトの同学年は一期上の俺たちを知らなかったようだし。

「何でも上級生が下級生を指導するらしいですが。どうしましょう！　僕は忍術が使えませんよ！」
「なら体術でも見せてやれば。まぁチャクラ吸着の事は内緒にしてさ」

「しかし……それは少しずるいような」
「大丈夫だって！　どうせ何時かは皆知るだろうし」

リーは何故かとてもやる気である。
周りを良く観察すると、結構皆はしゃいでいる。
いつもどおりなのは、後方の席に座っているネジだけか。
その後、担任の中忍の指示に従い校庭に移動した。
そこには既に下級生が集っていた。ナルト達やイルカ先生の姿が見える。
ナルトはニヤニヤと笑っており、サスケは逆につまらなさそうな顔をしている。
全員が揃ったのを確認してイルカ先生が喋り始めた。

「今日は上級生と下級生との合同訓練を行う。上級生は下級生の良い手本に、下級生は上級生の良い手本を見て学ぶように」
「具体的には何をすればいいんですか？」

上級生の一人が手を上げて質問する。
確かにもっともだ。

「そうだな……危険な事以外なら何をやってくれてもいいぞ。でも、外に出て行くとかそういうのは止めてくれよ」

こうして、合同訓練が始まった。

合同訓練が開始された訳だが、今俺は一人でボーっとしている。

何故かと言うと、やる気があるものと無いものに分かれたからだ。
上級生は俺以外はしっかりと教えているが――いや、俺も最初はしっかり教えようとしたんだ。
下級生が何人かやる気が無く、俺は人数的に省かれてしまったのだ。
まずサスケは全く参加しようとせず、シカマルは面倒臭いのか木に凭れ掛かって動こうとしない。
チョウジはシカマルの隣でお菓子を食べている。
少しして、肩を叩かれ振り向くとそこにはゴーグルをした金髪のツンツン頭の少年――ナルトがいた。
どうして此処に？　と思ったが多分他の皆から省かれたんだろう。
リーはそんな事しないだろうが、アイツは今体術を披露してるしな。

「あのさ！　あのさ！　分身の術教えてくれない？」
「ああ、いいよ。じゃあ一度やってみてくれ」

このくらいならまぁいいかと思い簡単に了承する。
すると、ナルトが驚いたような顔をした。
多分、また嫌だとでも言われると思ったのだろう。それを見て俺は悲しくなった。
ナルトは直ぐにチャクラを練り始め、印を結ぶ。
しかし、出てきたのは卒業試験のときのようなヘロヘロな分身だった。

「ん～力みすぎだな。いいかい？　チャクラって言うのは精神エネルギーと肉体エネルギーで構成されているスタミナというエネルギーを体内でチャクラに変換するんだ。ここまではいいね？」
「だ、大丈夫だってばよ！」

本当に大丈夫か心配だが説明を続ける。

「だからこの二つを上手く練り合わせないといけない。それが上手くできないとさっきの君の分身のように上手く機能しないんだ」

「な、なるほどー」

「一度口で説明しながらやってみるね」

それだけ言うと目を閉じ集中する。

「もう今の時点でチャクラは練れている。ここからチャクラを術に変える為に印を結ぶよ」

印を素早く結ぶと、俺の両隣には見事に分身が出来ていた。

「凄いってばよ！」

「ありがとう。そういってもらえると嬉しいよ」

今の言葉は俺の本心である。

誰でも褒められるのは嬉しいものである。

「なぁ、なぁ、もう少し見ててくれないかな？」

「ああ、いいよ」

その為か安請け合いしてしまった。

その後俺はナルトの修行をみっちりと見ることになった。

その甲斐あってかは知らないが、合同訓練終了時には、ヘロヘロな分身が三人できるようになっていた。

「毎日ちゃんと練習しろよ。苦手だからってほっといたら駄目だぞ」

「分かったってばよ！　今日はありがとー！」

手を振ってナルト達下級生は帰っていった。
俺もリー達の所に行こうとするとイルカ先生に呼び止められる。

「確か……ムスビ君だったかな。今日はナルトの面倒を見てくれてありがとう」
「自分も楽しかったですから。素直で良い子でしたし、噂に聞いていた問題児像とは違ってましたよ」

今回分身の術を教えている時のナルトは凄く素直だのだ。
きちんと説明は聞くし、分からない所は質問もする。
前知識が無ければ問題児とは到底思えなかった。

「それは……多分君が普通に接してくれたからだと思う。本当に今日はありがとう」

それだけ言うとイルカ先生もナルト達を追いかけていった。
今回のようにナルト達に触れ合ってしまうと決心が鈍ってしまう。
介入はしないと決めているが、仕方が無い時は出来る限り影響が無いように頑張ろう。

上級生達の方に行くと、何故かリーが疲れ果てて倒れていた。
俺は直ぐに傍に駆け寄る。

「どうした？　リー」
「下級生の皆さんに体術を披露したら何度もせがまれてしまいまして……」
「それで何度も披露したのか？」
「はい……流石にもう動けません」

その後はリーをおぶってかえる事となった。
ガイ先生やカカシ先生みたいに気持ち悪くは無い……と思う。

第二話

アカデミーでの日々も過ぎていき、遂に卒業試験の日を迎える事となった。
今は、緊張しているリーと教室で待機している。

「試験は一体なんでしょうか……分身の術じゃなければいいのですが」
「試験って言っても色々あるからな～まぁ、そんな力むなよ」

少しして、担当の先生がやってきて卒業試験の説明を始めた。

「今回の卒業試験は演習場の森でこの合格札のついたクナイを見つけ出すことだ。制限時間は今日の正午まで、アカデミーで培った技術を用いて見つけ出してくれ。因みに今回の試験はくの一クラスとも合同で行う！」

正午か……現在が九時前だから大体三時間ぐらいか。
リーはかなりやる気を見せている。確かにこれならリーは確実に合格するだろう。
くの一クラスとも合同か……まぁ、この学年のくの一で知ってるのはテンテンだけだし、それに演習場の森はかなり広いから会う可能性は低いだろう。
説明が終わると先生に促されて演習場にある森に向かった。
演習場の森に着くと、既にくの一クラスは集っていた。
くの一クラスもあわせると全体で大体四十人程度。
確か、ナルト達の代の合格人数は三十人以下だったから、何人かは落ちる。
その後、さらに下忍と認めてもらうための演習もあるし、忍びは

やっぱり狭き門であるようだ。

「いいか、合格札のついたクナイを見つけたらここに戻ってくるんだ。基本的には何をしてくれても構わないが人を傷つけるような行為をすると、反則で即失格だ！　先生たちは何時もお前達を監視してるからな！」

何をしてもありということは、徒党を組んでもいいという事か。

リーと組みたい所だが、アイツは自分の力で合格したいだろうしな。

取り合えずクナイを一つは見つけないとな。

「それでは、アカデミー卒業試験開始！」

試験が開始して直ぐに俺はチャクラ吸着を用いて辺りを観察しつつ素早く森の奥にむかった。

すると、この短時間で三本のクナイを発見、回収しウェストポーチに仕舞った。

三本にはしっかりと合格札が貼られている。

「なんというか……こんなに簡単に見つけていいのか？」

原作でもアカデミーの卒業試験は分身の術三体と案外緩かったが。

因みに俺は五体程度なら簡単に出来るが、影分身はともかく実体の無い分身はそんなに増やしてもあんまり意味がなかったりする。

少し黄昏ていたが、誰かの気配に気付き近くの茂みに身を潜めた。

すると、そこにやって来たのは日向ネジだった。

しかし、あまり不思議ではない。
こんな短期間で此処までこれるのは、この学年ではリーとネジぐらいのものだろう。

「そこにいる奴、出て来い。隠れても無駄だ」

俺はため息を突きながら両手を挙げて茂みから出てくる。

「急に人が来たから咄嗟に隠れてただけだ。敵意はない」
「分かっている。白眼で確認していたからな」

どうやらネジの方にも敵意は無いらしい。

「お前はもうクナイを見つけたのか――聞くまでもないか。百眼あるしな」
「当然だ。お前もどうやら見つけたようだな」

そういうとネジは俺に一本のクナイをみせる。
流石はネジ、既に合格を決めているようだ。
それにしても血継限界――中でも瞳術系等は凄い。
写輪眼・白眼・輪廻眼など高性能……いや、チートと呼ぶべきか。

「しかし、そんなに集めてどうするんだ？」
「まぁ……色々ときになる事があってね。その辺に再配置するよ」

そういいつつ二本のクナイを取り出し、別々の木々に投げつけた。
「気になる事だと？」
「ああ、何で先生はわざわざ『合格札のついたクナイ』って言ったのかってね。これだと別の札がついたクナイもありそうじゃない？」

その通り、二本は合格札がついていたが、もう一本は『否』とかかれた札がついていた。

「そういうことか、確かに数個はダミーが混ざっていたようだな」

どうやらネジはしっかり本物を見つけているようである。

流石は日向家始まっての天才である。

「じゃあ、俺は先生のところに戻るよ。それじゃあ」

「ああ……」

今のネジは一緒に戻ろうといっても駄目だろう。そこまで関わる気も無いし。

まだ日向の宗家の事を憎んでいるだろうし、俺ではナルトのように彼を闇から救いだす事は出来ないだろう。

それはさておき、これで卒業試験は合格だ。

俺は急いで元の場所に急いだ。

「ムスビか、速かったな。じゃあ、合格札のついたクナイを見せてくれ」

元の場所で待っていた先生に合格札のついたクナイを渡す。

「よくやった。これでお前は試験合格だ。教室で待機しててくれ」

「分かりました。そういえば、俺以外にも誰か合格した人はいますか？」

「リーが始まって直ぐ見つけてきたんだが、合格札がついて無くてな。あわてて戻っていったよ」

リー……気合い入りすぎてたんだな。

まぁ、アイツなら心配しなくても合格するだろう。

俺はさっさと教室に戻っていった。

教室にはまだ誰も居いない、どうやってリーが戻ってくるまで時間を潰すか……

印の練習でもしようかな。

印には基本的に十二支になぞらえられた十二の印がある。

火遁なら寅の印のようによく使うものがあるように、土遁では未(ひつじ)の印を良く使う。

俺は早速土遁の印の練習を開始しようとしたが、ネジが入ってきた為に中断した。

ネジは此方のほうを見るも、直ぐに興味が失せたのか自分の席に座る。

なんというか、かなり気まずい状況である。

その後は息を切らしながら帰ってきたリーと雑談しているとすぐに正午になった。

聞いた所によると合格者は三十名丁度という事だった。

その後先生からの説明があり、三日後に下忍についての説明会があるため、それまでに忍者登録のための写真を撮るため火影の屋敷に行くようにと言われた。

……しかし下忍認定試験に落ちたらその写真はどうなるんだろう？

第二話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
今回は少し独自設定が存在します。
土遁の術でよく使うのが未の印というものです。
原作ではカカシが寅の印を結ぶサスケをみて火遁と見抜く通り、熟練した忍びなら印で何の術であるか大体わかるそうです。
その為には良く使う印が無いと流石に分からないかなと思いこの設定をいれました。
ご了承ください。

第三話

アカデミー卒業試験から三日がたち、下忍の説明会のためアカデミーの教室にいた。
周りは、下忍になれると思っているためか皆浮かれている。
リーもそうである為かなりやる気である。
俺はというと、色々と悩んでいた。
何故かと言うとそれは昨日の下人登録写真の時に三代目火影の顔を見てしまった時からである。

何を悩んでいるかというと、このままでいいのかどうかである。
このまま行けば、多分原作と変わりなく進むはずだ。
ただ、リーの友人として俺が存在するだけだろう。
しかし、そうなると俺は多くの人を犠牲にする事になる。
三代目火影も木の葉崩しにより命を落とす。
あらかじめ起こる事を知っているのに――助けられる人がいるかもしれないのに自分の勝手で目を瞑るのだ。
その事に俺の良心は痛んだ。
しかし木の葉崩しは必要なものであるとも自覚している。
これがあった事で、木の葉の里の絆は深まり、砂の同盟も磐石なものとなった。
ナルト達もこの事があったから成長できた。それを無くせば少なからず成長の機会が失われる。
その所為でペインが襲撃してきた時にナルトが仙術を会得しなかったりすれば……言うまでもないだろう。

それ以外にも俺は忍者になってよかったのかと今更ながら思うことがある。
最初は父さんと母さんも忍者だし、おもしろそうだという理由で

アカデミー入学を決めてしまった。
下忍の間はまだマシかもしれない。しかし、中忍になれば忍者同士の戦いにも赴かなければならない。
精神修行はアカデミーでも家でもしっかりと行っている。
だが、もし誰か人を殺さなければいけない時が来たら俺は出来るのだろうか……

そんな事を考えていると先生がやって来た。
今は、自分の班のメンバーと担当上忍が誰になるかを聞こう。

「まずは試験合格おめでとう。君達は今日から下忍だ。そうなると君達は里から任務が与えられるようになる」

周りはガヤガヤしながら聞いている。
原作のイルカ先生のように忍者認定試験には触れない。

「その為、任務を遂行しやすくする為三人一組（スリーマンセル）に担当の上人の先生がつく。三人一組（スリーマンセル）の編成はもう済ませてあるから、今から発表するぞ」

リー達が何班になるのかは知らないが、あの三人が一緒になれば取りあえずは大丈夫だ。
どんどんと三人一組（スリーマンセル）と担当上忍が呼ばれる。
上忍の名前は仕方無いが全然わからない。

「次！　テンテン！　ロック・リー！　日向ネジ！　担当上人はマイト・ガイ先生だ」

それを聞いて俺は内心ホッとしていた。

リーも隣の席でかなりやる気になっている。
ネジは遠巻きに見ると興味が無さそう。
テンテンはこの時初めて見たが、既にチャイナ服をきていて原作とかわってはいなかった。
彼女は担任が誰なのか気になっている様子である。

「次！　秋山モミジ！　三石コンブ！　海苔巻ムスビ！　担当上忍は深瀬カツオ先生だ」

何というか、最初の女の子っぽい子以外はオニギリの具でありそうだな……
まぁ、木の葉の里の人の名前は大体物から取られてるから変じゃないけどさ。
コンブの方は知っているが、モミジという女の子は知らないな……くの一とあんまり関わってないからだけど。

「それでは、担当上忍が来るまで待機だ。みんな。これから大変だろうががんばれよ！」

最後の言葉は下忍認定試験の方を指してるのか？
先生が出て行くとリーが隣の席で話しかけてくる。

「違う班になってしまいましたね……残念です」
「でも良かったな。あの、日向ネジと一緒で。毎日勝負を挑めるぞ」
「はい！　絶対に勝ってみてます！」

そういった瞬間ドアを蹴破り誰かが入ってくる。
周りの皆は驚いていたが俺は誰がはいってきたか分かった。
教卓の前には全身緑色のタイツの様な修行着に木ノ葉の忍者ベストを纏った男――マイト・ガイが立っていた。

「青春してるかぁ～～！　お前ら！」

隣でリーが「凄い……ナウいです」と言っていたのは聞かなかった事にした。

「ちょっとガイさん！　普通に入ってくださいよ！」

次にそういって入ってきたのは黒髪のボサボサ頭をした優しそうな風貌をした男だった。

この人は原作で見たこと無いな。

男は文句をいいつつも扉を直す。

「ハッハッハ！　何時もすまんな！」

「すまんじゃないですよ……もうあきらめてますが」

「まぁ、それはさておき……日向ネジ！　ロック・リー！　テンテン！　俺がお前達を受け持つマイト・ガイだ！　早速やることがあるから場所を変える。ついてきてくれ」

リーはやる気満々そうに、ネジは軽くため息をつき、テンテンは落ち込んでいた。

因みに関係ないが、今日がリーの跳ね髪姿を見る最後の日となってしまった。

「全く……おっとごめんね。僕の名前は深瀬カツオ担当する下忍は……海苔巻ムスビ君、三石コンブ君、秋山モミジさんだね。僕もこれから話さないといけないことがあるからついてきて」

カツオ上忍の指示に従い俺は教室を出て行った。

第四話

カツオ上忍に促され俺たちは中庭に移動した。
周りはまだ授業中なのか誰も居ない。

「え～と……あのベンチがあいてるね。皆座ってくれ」

カツオ上忍の指示に従い、大き目のベンチに腰を下ろす。
すると、カツオ上忍はメモ帳とペンを取り出した。

「カツオ先生、今から何をするんだ？」
「まずは、班員達の事を知る為に自己紹介をね。それじゃあ……ムスビ君からしてくれるかな？」

なるほど、自己紹介は何処でもするんだな。
おっと、ちゃんと自己紹介しないとな。ここで間違えると馴染み難くなるし。

「俺の名前は海苔巻ムスビ。気軽にムスビって呼んで欲しい」

海苔巻のはあんまり呼ばれなれてないしな。
カツオ上忍はメモを取り始める。
俺達のプロフィールを書いているのだろうか。

「好きなモノはオニギリ、嫌いなモノはサンドイッチ。夢は父のような立派な忍者になることかな？」
「お父さんという事は海苔巻綱さんの事だね。うん、綱さんを目標に頑張るのはとてもいいことだと思う。頑張ってね」

因みにこの夢は本当である。
父は里の緊急時には良く呼び出され、迅速に解決する。
その為上層部からの信頼も厚い、この世界でであった人の中では一番尊敬している。

「じゃあ、次はモミジさん。よろしくね」
「は、はい！　私の名前は秋山モミジです。好きなモノは栗ご飯、嫌いなものはナマコです。趣味は読書かな？　将来の夢はスズメ先生な立派なくの一になることです！」
「アカデミーの教師か。教師は大変だろうけどがんばってね」

次は秋山モミジが自己紹介を行う。
どうやらサクラと違って、確りと自分の夢を持っているようである。

「次は、コンブ君。よろしくね」
「……名前は三石コンブ。好きなモノは乾物、嫌いなモノは……特に無い」

最後に三石コンブが自己紹介をする。
嫌いなモノで詰まったという事は、嫌いなモノはあるんだな……

「趣味は手裏剣術の修行。将来の夢は……里の為に何かをしたいとおもってる」
「うん、ありがとう。里の為にこれから頑張ろうね。じゃあ、最後に僕が自己紹介をしようかな」

そういうと、カツオ上忍はペンをしまった。

「僕の名前は深瀬カツオ。好きなモノは刺身、嫌いなモノは特に無

いかな」

おお……カカシと違って真面目に自己紹介をしている・何というか、原作の上忍は色物揃いだからこの人は苦労しそうだな……

「趣味は釣りで、火遁とか水遁の術が得意かな」

攻撃特化の火に補助的効果の高い水か……

「さて、今からが本題。明日は早速重要な演習を行う」

「重要な演習？　どうしてですか？」

「まぁまぁ、落ち着いてモミジさん今から話すから」

すると、カツオ上忍はそこで一呼吸おいた。

まぁ、もう忍びだと思ったら認定試験に通らないと駄目っていわれたら落ち込むよね……

「合格者三十人の内、下忍と正式に任命されるのはたったの九名。サバイバル演習を行う！」

「九名って……半分以上の確率で落ちるってことですか！」

「まぁ、そうなるね。あ、忍び道具とかの準備は万全にしておくように。明日は演習場に朝七時集合するように、そこでやる事を話すから。それじゃあ、解散！」

そういうと、カツオ上忍は煙のように消えてしまった。

瞬身の術だろう。

「ど、どうしょう！　このままじゃ、またアカデミーに戻っちゃう！」

「まぁまぁ、落ち着いて。何をするかも分かってないし、今焦っても駄目だよ」
「ムスビの言うとおりだ。とにかく、準備をしっかりしておくしかないと思う……」
中々、コンブは落ち着いた印象を受ける。
逆にモミジの方は、落ち着きがなさそうである。
仲良く出来そうでよかった。
「そうね……二人とも！　今から作戦会議よ！　この試験を絶対クリアしてやるわ！」
やる気になっているモミジを尻目に俺とコンブは顔を見合わせた。
「別に、俺たち三人同じ試験を受けるとは限らないんじゃ……」
「その時はその時よ！　さっさと作戦会議できる場所に行くわよ！」
コンブの意見もモミジは動じない。
どうやらこの世界は女性の方が力が上らしい。
俺とコンブはため息をつきつつモミジの後を追っていった。
「まずは、情報交換をしましょう。どんな術を使えるとか何が得意がとかね」
モミジに連れられるまま、俺たち三人はアカデミー近くの定食屋にやってきていた。
早速と言わんばかりにモミジが発言していく。
「私はアカデミーで習った術なら一通り使えるわ。チャクラコント

ロールは得意かな？　でもあんまり、体術は得意じゃないかな」

アカデミーで習った術って事は……分身の術とか変わり身の術か。

「俺はあんまり術は得意じゃない。けど手裏剣術と体術に関しては少しは自信がある」

そういえば、趣味は手裏剣術の修行って言ってたしな。

「俺はアカデミーの術と……少しは土遁の術を使える。基本的に苦手なモノはないと思う」

そういうと、二人は驚いた顔をした。土遁の術を使えるとは思ってなかったのだろう。

「もう土遁の術を使えるのか……」

「父さんに頼み込んで色々教えてもらったんだ。父さんも土遁が得意だったから」

「そうなんだ……私も一つぐらいは取り得が欲しいな……よし！昼食が終わったら演習場で皆がどれくらいできるか見ましょう！」

確かに、周りから見てもらうのも重要な事だな。

こうして、俺たち三人は近くの演習場に行く事となった。

第五話

昼食を食べ終えた俺たちは、近くの演習場に足を運んでいた。
まず最初はアカデミーで習った術を復習した。
コンブが少しぎこちなかったものの、あまり問題はないだろう。

「それじゃあ、次はムスビの土遁の術を見せてよ」
「分かった。それじゃあ少し離れてくれ――土遁・烈土転拳の術」

チャクラを練り印を結び、地面に拳底を打ち込む。
すると、あたりの地面が一斉に割れていく。

「これは岩隠れの里だと基本忍術と言っていいほどシンプルな技だな」
「これぐらいなら私も出来るかも……」
「土の性質変化が出来れば後は、チャクラの練りこみの量と印を覚えれば出来るんじゃないかな」
「土の性質変化か……それがあったのよね」
「それの他には何か出きる術はあるのか？」

落ち込むモミジを尻目に、コンブが聞いてきた。
興味が無さそうに見えて、やっぱり興味深深らしい。
しかし、攻撃に使えるのはこの技なんだよな……
他の攻撃の術はまだ発動に時間がかかりすぎて使えないし。
補助系統の技ならそれなりに使えるんだけど。

「後つかえるのは防御の術が一つ。後はぜんぶ補助系統だけかな」
「え？　攻撃って今のだけなの？」
「土遁は火遁や風遁と違って攻撃の術の種類は少ないし、あっても

難しいんだよ」
「じゃあ、補助系統の術を見せてよ」
「分かった。あ、コンブ術かけてもいいかな？　怪我とかはしないから」
「少し嫌な予感がするが……分かった」

よしよし、一度やってみたかった事ができる。
土遁・土中映魚の術で土の中に潜り、コンブのましたまで移動する。
しかし、土の中を移動する術は結構多い気がする。
この術は周りの土にチャクラを流して液体状に変化させ、そこを泳ぐように移動する術である。
そのため、土遁・土中潜航のように高速移動は出来ない。
コンブの足元まで来ると、地面から両手でコンブの足首を掴み地面に引きずり込む。
そして、カカシがしたようにコンブを生首状態にする。

「今のは地面を土遁・土中映魚の術で移動して、土遁・心中斬首の術でコンブを地面に引きずり込んだんだ」
「なるほど……」
「いや……なるほどの前に助けてくれよ」

すぐに、コンブを引きずりあげた。

「まぁ、俺の使える忍術はこんなもんかな」
「何というか……パッとしないわね」
「正直な奴だな……」

モミジの言葉は俺が思っていたことでもある。
確かに、応用範囲は広いがパッとしない。

だから、原作でも土遁はあんまり活躍できないのかもしれない。
因みに、補助系統の術はもう一つ使えるがそれは説明し辛いため見せない。

「俺の事はこれぐらいにして、次はコンブの手裏剣術を見せてくれよ。ちょうど四方に訓練用の木の丸太があるし」
「分かった。良く見とけよ。危ないかもしれないから少し離れててくれ」

コンブに言われたとおり、もし当たったら危ないので少し離れるそういうとコンブはポーチから手裏剣を八枚取り出し、目を閉じ集中する。
そして、素早く手裏剣を丸太に向けて投げる。
手裏剣は八枚全て周りの丸太に刺さっていた。
これは……俺より上手いんじゃないか？
一通り忍具は父さんに扱いを習ったが、手裏剣八枚全てを的確に命中させるのは無理だと思う。

「凄い……全部命中してる」
「流石は趣味が手裏剣術の修行だな」
「それほどでもないって……」

あ、少し照れてる。
コンブはぶっきらぼうに見えて結構表情にでるな。

「次はモミジだけど……」
「あ～私？　私は特別な事はできないからパス！」

そういって、モミジは何もしようとしない。
コンブと二人でジーっと見るも、視線を外す。

「と、とりあえず！　今日のところは解散！　明日は絶対合格しようね！　それじゃあ！」

そういうとモミジは、足早に去っていった。

俺はコンブと顔を見合わせる。

「俺たちも帰るか」

「そうだな……」

俺とコンブはそれぞれ帰路に着いた。

翌日、朝の六時半頃に演習場に到着した。

そこには既にコンブが来ていた。

「おはよう。速いな……」

「おはよう……何か今日で忍者になれるかどうかが決まると思ったら眠れなくてな……」

「俺も似たような感じだよ」

何をするかは知っているもののやはり不安はある。

失敗した時の事を考えた所為であまり眠れなかったのだ。

少しして、モミジもやって来た。

「おっはよ～今日は頑張ろうね」

かなりやる気満々である。
まぁ、シカマルみたいにやる気がないよりはいいかもしれない。
そして、七時の五分前にカツオ上忍が現われた。
カツオ上忍は近くの太い丸太の上に時計をセットする。

「じゃあ、説明するよ。今から三人にはこの二つの鈴を僕から奪って欲しい。奪えたら合格忍者になれる。奪えなかった時は残念だけどアカデミーからやり直しだ」
「せ、先生！　それだと一人は絶対受からないじゃないですか！」

モミジの言った通りだ。
まぁ、これは仲間割れをするように仕組まれてるからな。
しかし、モミジは必死だ。まだ、会って一日しか経っていないのに。
コンブの方も苦々しい顔をしている。

「取り合えず鈴を奪おうぜ。その後の事は後で考えよう」
「そうね……」
「わかった……」

二人はまだ納得出来てないようだが、仕方が無い。
今は、カツオ上忍から鈴を奪わなければならない。

「よし、そろそろ七時になるね。一つだけ言って置くけど殺す気で来てね。そうしないと絶対に僕から鈴は奪えないから。それじゃあ、サバイバル演習開始！」

その言葉と同時に俺は素早く瞬身の術で近くの木の上に移動して身を隠した。
他の二人もどうやら上手く隠れたようだ。

カツオ上忍は見晴らしのいい平地に移動する。
あの場所なら俺達の誰でも発見できる。
挑発しているのだろうか？
どうしよう？　モミジとコンブはナルトやサスケのような性格じゃないから共闘を持ちかければ了承してくれそうだけど。
その時、俺の中に一つの好奇心が沸いた。
上忍相手に一対一なら何処までやれるだろう……
試してみたかった、自分の力が何処まで通じるのか。
俺は静かに木から降りると、土遁・土中映魚の術で土の中に潜ってカツオ上忍の真下まで移動する。

「土遁・心中斬首の術！」

地面から手を伸ばし、カツオ上忍の足首を掴もうとした。
しかし、予測されていたのか飛び上がって避けられてしまう。

「流石は綱さんの息子……その年で土遁の術を使えるのか」

直ぐに地面から飛び出て素早くカツオ上忍に近づく。

（中々に素早いな。だが、まだまだだ）

身動きの取れないカツオ上忍の顔面に向かって右拳を突き出すもカツオ上忍は左手で受け止める。
次は、左拳を突き出すがそれは右手で受け止める。
腹に向かって膝蹴りを行うも、その前に手を放し後方に離れていった。
その時、近くの茂みが揺れるのが視界の端で見えた。
茶色い物が見えたという事は、あれはコンブか？

「一人で向かってくるとはね……君はもう少し賢いと思ってたんだけど」
「それは少しかいかぶりすぎですよ――土遁・烈土転拳の術！」
会話をしつつ、チャクラを練り印を素早く結び地面に掌底を放つ。
すると、地面が罅割れていきカツオ上忍に向かっていく。
「水遁・水陣壁の術！」
水がカツオ上忍の下方から凄い勢いで噴出し、地割れがそこで止まってしまう。
土は水に有利といっても力の差がありすぎるようだ。
しかし、それでいい。
「コンブ！　上ががら空きだ！」
「分かってる！」
茂みから飛び出してきたコンブがカツオ上忍の真上から手裏剣を投擲する。
「水遁・水乱波！」
しかし、その手裏剣はカツオ上忍が口から水を吐き出し押し流した。
「コンブこっちだ！　一度身を隠すぞ！」
「分かった！」
コンブと共にこの場からはなれる。
体術はどうか知らないけど、忍術では絶対に敵わない。

チャクラを練る速度、印を結ぶ速度が桁違いに速い。
正直三人でかかっても無理だと思う。
とりあえず、今はモミジと合流しないとな。

第六話

「それで、どうするんだ？」
「二人じゃ無理。モミジも加えて三人で行けば鈴を取れるかも？ってレベルだね」
「じゃあ、モミジを探しに行くのか？」
「いや、多分モミジもあの戦闘を見てるだろうし。俺たちが逃げていった方にくるんじゃないかな？」

コンブと共にカツオ上忍から少しはなれた茂みに姿を隠す。
モミジに居場所を伝える為、気配は消していない。
カツオ上忍には気付かれているだろうが、攻めては来ないだろう。
少ししてモミジも茂みの中に姿を見せた。

「私を除者にするなんて……私も直ぐ傍にいたのに」
「いや、除者とかじゃないって。アレはコンブが機を伺っているのが見えたからだよ」
「そうそう。別に除者にしたわけじゃない」

最初にする事は、いじけているモミジを宥めることだった。
こんな事をしている場合ではないため直ぐに元に戻ったが。

「それでどうする？　まともにいっても勝ち目はないぞ」
「あ！　私にいい案があるよ」
「へぇ～じゃあその案を聞かせてよ」
「それはね――」

モミジが作戦について話していく。
何でも、昨日家に帰ってから色々と考えていたらしい。

「悪くはない……けどばれないか？」
「さっきの戦闘では、そこまで体術を披露してないから大丈夫じゃない？」
「取り合えずは、これでいいじゃない！　さぁ、早く作戦を実行するわよ！　配置について」

作戦はそれほど悪くないモノだったので実行に移すことになった。
俺は、二人を呼び止める。
今回の作戦で役に立ちそうな事を教えるためだ。

「あ、そうだ……一つ教えておきたい事がある」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「誰も来ないな……」

先程ムスビ君とコンブ君がこの場を離れてから既に一時間あまりが経過していた。
少し前までは三人の気配があったが、今は上手く隠してある。
作戦会議を終えて実行に移そうとしたのだろう。
大体の居場所は分かる――しかし、無理に攻めようとは思わない。
何故ならこれはチームワークをみる試験だ、無駄に攻める気はない。
そう考えると三人は合格するだろう。全員仲間意識が芽生えていたようだし。
そんな事を考えていると、ふと背後から気配を感じる。

そこに立っていたのはコンブ君。
彼は直ぐに此方に向かって、手裏剣とクナイを投擲しながら走ってくる。
手裏剣は左右にも上にも投擲されていて、何も無いここでは術を使わなければ逃れられない。

「水遁・水陣壁！」

水で出来た壁に阻まれて手裏剣は僕まで届かない。
この術の利点は、水は透明で気泡も何もないので守りながら周囲の情報を知ることが出来る事にある。
どうやら背後からムスビ君が近づいてきているようだ。
土遁の術を使ってくると思っていたけど――確か、アカデミーの情報では体術もそれなりに出来たはずだ。
水陣壁を解除しムスビ君に向かう。
コンブ君は投擲が得意なのはしっている。
しかし、どんなに自信を持っていても仲間に当たるかも知れないという考えが浮かび迂闊には投げられないだろう。

ムスビ君は走りながら印を結ぶ。その印は分身の術。
分身が四体現われ、五人のムスビ君が向かってくる。
分身の術は応用範囲は広いものの普通に使っても直ぐに見破られる。
しかし、右端の本物だけが急激にスピードを増し僕に迫る。

（足の裏にチャクラを吸着して……アカデミー生は教えられてないものだぞ）

ムスビ君はその勢いのまま左上段蹴りを繰り出す。
それを右手で受け止めると、そこを起点に体を回転させ体を上に

押し上げるとそのまま踵を落としてくる。
その時、突然足元の土から手が飛び出し僕の足首を掴んだ。

「変化の術！」
「そうだよ先生！」

すると、足を掴んでいたムスビ君の姿が解け、モミジさんの姿に。
とにかく攻撃を食らうわけには行かないので左手で踵を受け止める。
作戦はコンブ君が僕の逃げ道を塞ぎ水陣壁を出すように仕向け、動きを止め、鈴を奪う役。
ムスビ君に変化したモミジさんが両手を塞ぎ、土の中で機会をうかがっていたムスビ君が足を掴み、身動きを取れなくする役か。
変化の術も念頭にあったが、チャクラコントロールを見てそれが消えてしまった。
忍びを親に持つムスビ君ならチャクラ吸着を覚えていると思い込んでしまったからだ。

「よし！　両手両足を塞いだ！　今だコンブ！」
「分かった！」

残ったコンブ君が二つの鈴を取ろうとやってくる。
しかし――まだまだ甘いね。

「水？！」
「これは……水分身！」
「その通り」

そういって本物の僕が木の上から姿を見せる。

「さっきより水陣壁の高さが低いと思ったらそういう事か……」
「ううー……成功すると思ったのに」
「いやいや、まさかモミジさんがチャクラの吸着をマスターしてるとは思わなかったよ」
「あれ？　成功するとは思わなかったんだけどね」

何でも、ムスビ君がチャクラ吸着について教えたらしい。
確かに女性はチャクラコントロールが男性よりも上手い人が多い。
医療忍者も多くは女性である事からもそれがわかる。
それでもぶっつけ本番で成功させるとは……

「まぁ、そう落胆しないで。君達は見事認定試験に合格したんだから」
「え？　私達は鈴を奪えてませんよ」
「これはチームワークを見るための試験だからね。どのような状況においても自分の利害に関係なく行動できるかを見たかったんだ。鈴二つは仲間割れを起させようとしてやったものだけど……君達は既に仲間意識が芽生えていたようだからね」

その言葉に一人を除いて目を丸くする。
ムスビ君は知っているようだね。綱さんから聞いたのかな？　しかし、あの人が言うとは思えないけど。

「喜んでいいのか悪いのか……」
「納得できない……」
「まぁまぁ、二人とも。これで俺たちは忍者になれるんだし。喜ぼうぜ」

微妙な顔をしている二人をムスビ君が宥めている。
やっぱり彼だけ違和感を感じる。

上手くはいえないが、大人が子供を演じているような……
しかし、彼の履歴を見たがおかしな所は一切無い。
僕の気のせいなのだろうか。綱さんの息子だし後ろめたい事は無いと思うが。

「まぁ、お祝いに飯でも食べに行こうか。ムスビ、コンブ、モミジ」
「勿論！　奢りですよね！」
「う、うん。でもあまり高いものは――」
「じゃあ、木の葉の里一番の人気店に行きましょう！　いいわよね、二人とも」
「ちょっとまって、あまり高すぎるのは――」
「一度行ってみたいと思っていた」
「俺も言ったことないし丁度いいんじゃない？」

どうやらもうあのお店に行く事は決まっているようだ。

この後あのお店に行き、僕の財布の中身はすっからかんになった。
これから少しの間は掛蕎麦生活か……

第七話

「火影様、赤ん坊の子守、隣町までの買い物、迷子ペットの捜索終了いたしました」
「うむ……何時もご苦労じゃな」
「いえいえ、では失礼します」

下忍になって数週間がたった。
その間は、任務をこなしたり、訓練をこなしたりと毎日忙しい日々をすごしていた。
しかし、Dランク任務は皆で手分けすれば一日で数件片付ける事は容易だったりする。
Cランクからはそれも無理で、長ければ数ヶ月かかる任務もあるが。
原作キャラ達が任務をこなした回数をみて、ほぼ訓練に費やしているのでは……
任務終了の報告を三代目火影に報告すると、俺たちは足早に火影の屋敷から出て行き、何時もの演習場に向かった。

「じゃあ、今日は木登り修行の復習から。出来たら次は水面歩行の業だよ」

カツオ上忍に言われてチャクラを足の裏に一定量集め上っていく。
木登り修行は下忍になって次の日に課せられた。
俺は父さんに前もって教わっていた為直ぐにできた。
モミジもそれほど苦労することなく成功した。
しかし、コンブはチャクラを練るのが苦手だったため出来るまで時間がかかった。
今では普通に出来るようになっているが。

頂上に着いて後にモミジとコンブが登ってきた。

「あ～また負けた！」

モミジはそう言うが、俺はモミジのほうに驚いている。
習ってから数週間で俺に追い着きそうなのだ。
そうなると少し凹む、こっちは小さい頃から頑張って此処まで来たのに。

「よし！　皆、木登り修行は完璧みたいだね。じゃあ、次は水面歩行の業だ。木を降りて近くの川に移動しよう」

いつの間にか近くの木の頂上にいたカツオ上忍に言われ木を降り近くの川に移動する。

「皆知ってるだろうけどもう一度説明するよ。木の場合はチャクラを一定量足に裏に集め、それを維持すれば良かった」

カツオの言葉に俺たちは頷く。

「水面歩行はそれの応用。水に釣り合うように一定量チャクラを放出し続けなければならない。少なければ沈むし、多くても水が反発し沈んでしまう。じゃあ、説明はこれくらいにして、やってみようか」

皆が木登り修行で頂上までいけるようになってからは水面歩行の業の修行をするようになった。
一定量のチャクラを常に放出するのは難しい。
小さい頃、父さんに教わってやっていた頃は、毎回水に沈み、母さんに叱られたものである。

その甲斐あってか、今は沈まずに維持できているが。

「うわっ！」

隣で、コンブが水に沈んだ。

どうやらチャクラを放出しすぎたらしい。

モミジは最初の方は沈んでいたものの、今では浮かんでいる。

チャクラコントロールに関してはこのままいけばモミジに負けると思う。

少しして、モミジが唐突に話し始めた。

「先生！　一つお願いがあります！」

「お願い？　何かな？」

「性質変化の修行がしたいです！　先生やムスビだけずるい！　私もああいう忍術を使いたいです！」

その発言に俺とカツオ上忍は苦笑いを浮かべる。

「性質変化はそう簡単にできるものじゃないよ。長い時間をかけて会得するものだからね」

「うっ……なら、会得しやすい性質変化だけでも」

「分かった。皆一度川から上がってくれ」

ため息をつきながら全員一度川から上がる。

コンブが風邪をひいてはいけないためか、カツオ上忍は集めていた薪を火遁で火をつける。

その後、カツオ上忍は俺たち三人に一枚の紙を手渡した。

「ムスビ君は知っているかもしれないけど、これはチャクラ感応紙。チャクラを吸った特別な樹木から出来ていて、これにチャクラを流

せばどの性質が得意かがわかる」

そういって、カツオ上忍は感応紙にチャクラを流す。

すると、紙は塗れていた。

「水はこのように紙が濡れる。火は紙が燃え、風は紙がきれ、雷は紙にしわが入り、土は紙が崩れる」

「なるほど……あ！　紙がぬれました。先生と一緒ですね」

「紙が燃えた……」

「良かったな二人とも。カツオ先生は水遁と火遁が得意みたいだし。稽古つけてもらえるぞ！」

俺の言葉に二人はなるほど！　と言った表情をしている。

逆にカツオ上忍はまたため息をついた。

「というわけで、お願いしますねカツオ先生」

「お願いします……」

「修行法を教えるよ……」

凄い勢いで二人がカツオ上忍に詰め寄る。

カツオ上忍は苦笑いを浮かべつつ、二人に修行方法を教え始めた。

翌日から、二人は性質変化の練習を開始した。

それに負けないように更に気合いを入れて土遁の術の修練を始めた。

そして、更に数週間がが立った。

「Cランク任務ですか？」

「そうだ。皆予想以上に早く基礎が出来ていたからね。そろそろCランクの任務もこなせると思ったんだ。任務は明日火影様の屋敷で

伝えるから」
「大丈夫なのか？」
「大丈夫大丈夫。危ない時はちゃんとフォローを入れるから。それじゃあ解散」

太陽も沈み修練を終えると、カツオ先生が明日の予定を告げる。
Cランク任務の敵ならカツオ上忍の敵ではないだろう。
Cランクは忍者同士の戦闘は予想されないものの、任務遂行者の負傷が予想される任務だ。
正直言ってかなり不安である。
賊との戦いとなった時、もしかしたら人を殺めなければいけないかもしれない。
人を殺し殺されるのはこの世界では普通の事なのかもしれない。
例え殺したとしても、相手が敵であれば罪に咎められる事は無い。
しかし、俺は人を殺したという罪の意識に耐えることが出来るだろうか。

「それじゃあ、明日はがんばろうな」
「また明日……」
「ばいばい～」

二人と別れると俺は足早に家に帰る。
父さんと会って話がしたかったからだ。
この頃、父さんはあまり家に居ない事が多いが、昨日丁度Aランクの任務を終えて帰ってきている。

「ただいま。母さん、父さんはいるかな？」
「お帰りなさい。綱さんなら何時もの場所にいるわよ」

任務から帰ってきた翌日も庭で鍛錬か……勤勉だなぁ。

庭に行くとそこには、凄い速さで印を結んでいる父さんがいた。
正直、目で印を追えない。
少しして父さんが俺が来たのに気付いた。

「おお、ムスビか。お帰り」
「ただいま、父さん。少し聞きたいことがあるんだけどいいかな？」
「分かった……聞こう」

父さんの顔が真剣になった。
俺の表情から何かを読み取ったのかもしれない。

「明日、Cランクの任務があるんだけどさ。父さんは――初めて人を殺した時はどんな感じだった？」
「そうか……正直俺は殺した事に関しては何も感じなかったな。それよりも仲間を助けたかったからな」
「仲間を助けたかった？」

その後、父さんは色々語ってくれた。
父さんが始めて人を殺したのは八歳の頃。
アカデミーを卒業して直ぐに前線で戦うようになった。
時は第二次忍界大戦の真っ只中、下忍でも優秀であれば前線で戦わなければいけないほど大変な戦いだったらしい。
その時は四人一組（フォーマンセル）で動いており、敵の術により仲間と分断され二人になってしまったらしい。
そして敵と交戦。
そこで仲間が隙を突かれ敵に後ろを取られる。
その時、咄嗟にクナイで敵の心臓を一突き。
それが始めての殺しだったという。

「本当にただ助ける事しか頭に無かった。その後も敵と交戦して―

―殺したよ」
「全員殺した？」
「ああ……もし俺が逃がした事で他の仲間が殺される事は嫌だったからな。人を殺すのは勿論嫌だ。しかし、仲間を失うのはもっと嫌だった」

父さんの気持ちは良くわかる。
もしリーと一緒に任務に出て、俺の甘えの所為でリーが死ぬのは凄くいやだからだ。
まぁ……俺の方が死にそうだけど。

「あまり参考にならなくてすまんな」
「ううん。おかげで覚悟が出来たよ」

殺した後、後悔するかもしれない。
しかし、もし俺の所為で仲間が――モミジやコンブが死んだら、もっと後悔するだろう。
なら……俺も覚悟を決めるしかない。
明日の任務でもし戦う時になった時は余裕が無ければ殺す事も躊躇しない。
忍者になる事は自分が選んだ事だ。なら、その責任も自分で取らないといけない。
とりあえず、明日の任務はきちんとこなさないといけないな。

第七話（後書き）

今回は色々と独自解釈があります。
ＮＡＲＵＴＯの世界の年表には空白期間が多いのが理由です。
その為今回の作品ではこういう流れになります。

休戦（一次大戦）→（空白の２０年＋α）→（二次大戦）→（戦争中の十年＋α）→終戦（二次大戦）
→（数年間の小競り合い）→（三次大戦）→（数年）→（終戦）→九尾襲撃

大まかにいえば、こんな感じであると仮定して物語を進めていきます。
そのため、もしかしたら年月に無理が起きてくるかもしれません。
お分かりいただけますよう宜しくお願いします。

第八話

翌日の早朝、俺たちは火影の屋敷に集合していた。

「よし、皆集ったね。それじゃあ、入るよ」

カツオ上忍が全員集ったのを確認すると、依頼紹介場に入る。

そこにいたのは、御意見番の水戸門ホムラだった。

「確かCクラスの任務だったな……それなら、この任務だな」

そういうとホムラは、机から一枚の巻物をカツオ上忍に渡す。

「山賊の討伐……ですか。人数は六名……此処から近いですね」

「ある村の近隣の小さな森にある家屋を拠点としているそうだ。その所為で、村人達はその森に薬草の採取が生けずに困っているらしい。任務は山賊達の捕縛もしくは殺害だ。」

「分かりました。この任務受けさせていただきます」

カツオ上忍が頭をさげながらそう言うと、ホムラが頷く。

そのまま俺たちは火影の屋敷から出て行く。

そして門の前まで行くと、そこでもう一度巻物を開き任務内容を確認する。

「先程も聞いていたと思うが任務は山賊の討伐だ。人数は数十人、捕縛もしくは殺害が任務だ」

「殺害ですか……」

「出来れば捕縛の方が良いけど、捕縛の方が難しいからね」

そこでカツオ上忍は一旦言葉を区切った。

「君達はこれから様々な依頼を受ける事になると思う。その中には勿論人を殺さなければならない時もある。慣れろ……とは言わないが、覚悟はしておいて欲しい」

カツオ上忍の言葉に俺は頷く。

二人もしゃんとした表情で頷いていた。

「皆大丈夫そうだね。戦闘も無く捕らえるのが理想だけどね。じゃあ任務開始だ」

カツオ上忍を先頭に、俺たち四人は移動を開始した。

「みんな、此処で止まって。ここからは徒歩で近づく」

一時間程度木々を飛び移り移動していると、カツオ上忍が合図を送る。

「此処からは警戒態勢を取る、現在この森には村人は近づかないように言われているから、ここにいる人は山賊の可能性が高い」

「見つけた場合は？」

「見つけた場合は出来る限り捕縛する。相手のしっかりとした情報が欲しいからね」

そこからは、相手に気取られないように移動を始める。

残念ながら誰も発見する事はできなかったが。

少し歩くと、大き目の家屋が目に入った。
カツオ上忍はあたりを確認し、他に隠れている者が居ないかを探す。

「あそこが山賊の根城みたいだね」
「扉の前にいる二人以外は姿が見えませんね」
「あとは、家屋以外からは気配がしない」
「あの二人は監視役みたい……だけど」
「酒を飲んでるな。形だけって所か」

扉の前には二人の男が居た。
しかし真面目に警戒してはおらず、酒を飲んでいる。

「全く気づかれて無いし、あの二人を捕縛するのは簡単そうだね。一人は僕が捕縛する。もう一人は――」

するとカツオ上忍は俺たち三人を見た。

「まずムスビ君が土遁・心中斬首の術で相手の足を掴み動きを止めて、二人が気絶させる。分かった？」

俺がミスすると仲間を増やしてしまうのか……責任重大だな。
しかし、ここで退くわけにも行かないだろう。

「分かりました。やってみます」
「ミスっても大丈夫よ！　私とコンブがしっかりフォロー入れるから」

モミジは笑顔でそういってくれて、コンブも黙って頷いてくれる。
少し気持ちが楽になった。

二人とも俺なんかより、よっぽど落ち着いているようだ。

「ありがとう、二人とも」

「よし、拘束し終わったら家の中を確認する。その後は、僕が中に踏み込むから三人は中から出てくる四人を叩いて欲しい」

カツオ上忍の言葉に俺たちは力強く頷いた。

それを見てカツオ上忍は優しく微笑む。

「問題無さそうだね。仕掛ける時は今から約五分後。その時になったらムスビ君は行動に移して。二人は僕が合図を出す。じゃあ僕達はこっちだね。ムスビ君、宜しくね」

三人は俺を残し、奇襲を仕掛けられるポジションに移動を開始する。

俺も遅れないように土遁・土中映魚の術でゆっくりと移動を開始した。

相手に悟られぬ様に時間をかけて移動する。

しかし、相手は酒を飲みすぎていた為か全く気付く様子も無い。

そろそろ五分だ……行動に移さないと。

「それにしても、見張りなんて面倒くせぇな～」

「いいじゃねぇか。そのお陰で酒が飲めるんだしよぉ」

「それもそうだな」

一人の男が酒を瓶ごと飲んだ瞬間、地中から両足首を掴む。

もう一人の男が叫ぼうとするがもう遅い。
一瞬の内にカツオ先生が現われ、男に手刀を浴びせ気絶させる。
俺が両足首を掴んでいた奴には、コンブとモミジの蹴りが頭にまともに入りそのまま失神したようだ。

「よし、そのまま武装解除するぞ」

カツオ上忍は手際よく一人の男に、ロープを噛ませて両手・両足をしばる。
俺たちは三人でしっかりと男を拘束する。

「手はずどおり中に踏み込んで、家屋から山賊達を追い出す。いくよ」

カツオ上忍は手鏡で中を確認すると、突入していく。
俺たち三人は家屋を囲む様に待機する。
少しして男の怒号が聞こえると、扉に向かって移動してくる足音が聞こえる。
すると、四人の男が扉から飛び出してきた。

「あの化物め……どけっ！　餓鬼共！」

一人の男が刀剣を持って突っ込んでくる、俺はすかさずチャクラを練り、印を結ぶ。

「土遁・烈土転拳の術！　二人とも宜しく頼む！」

地面に掌底を放ち地割れをおこす。
突っ込んで来た男は空中でバランスを崩す。
身動きが取れないところに、モミジの膝蹴りが顔面にめり込んだ。

容赦が無いな……まぁ、いいことなんだけど。

「こいつらも忍者だ！　気をつけろ！　うっ、痛ぇ！」

そう叫んだ男は、コンブが投じたクナイが足に見事に命中する。
コンブは他の二人の足にもクナイを投じ命中させ相手の機動力を落とす。
そうしたところで、俺とコンブも敵に向かっていく。
俺とコンブは、足の裏にチャクラを練り地面を強く蹴ることで、地割れした地面を飛び越える。
そして、動揺している二人の男を同時に蹴り上げる。
さらに空中に居る男に踵落としを浴びせ、男を地面に叩きつける。
コンブの方は空中でから突き上げるように鳩尾を殴り、両手を組み、男の頭を叩き落す。
どうやら、二人の男は気絶したようだ。

「忍法・金縛りの術！」
「なっ！　体が！」

残った一人の男には、モミジが金縛りの術をかけていた。
金縛りの術はアカデミーで教わる基本忍術である。
しかし、上忍が使えば複数人に掛けたり、巨大な生物の動きを止めたりもできる。
忍術を知らない山賊は、モミジの金縛りに指一本動かせなくなった。

「よし、皆気絶させたようだね。早速拘束するよ」

家屋から出てきたカツオ上忍は手際よく拘束していく。
多分、俺達が実践でどういう動きをするか隠れてみていたに違い

ない。

「彼らはどうするんですか？」

「木の葉につれて行く。ああ、皆は気にしなくていいよ」

そういうとカツオ上忍は印を結び、水分身を三人出現させる。

一人が二人ずつ両肩で担ぐと木の葉の里に向かって移動していった。

「あいつ等はどうなるんですか？」

「他に仲間が居ないかの尋問を受けた後は罰が下るだろうね。まぁ、誰も殺してはないようだけど。さて、里に戻るよ。報告もあるしね」

「了解！」

行きと同様に、カツオ上忍を先頭に俺達は木の葉の里に戻っていった。

第九話

初めてのCランク任務が終えた後、カツオ上忍は極力任務を入れなくなった。
入れたとしても、それはすぐに終わる任務かCランクの任務だった。
それ以外の時間はほぼ毎日修行に明け暮れていた。
その甲斐あってか俺は土遁の術の種類も増え、モミジとコンブは性質変化の修行が進んだ。
カツオ上忍が火遁と水遁を使えたのも大きいだろう。
その為ナルトやサスケの異常性が際立つ。
影分身を使ったり、写輪眼があったりしたが数日や一ヶ月で性質変化を覚え、尚且つ術までもマスターするのははっきり言って異常だ。

「霧隠れの術！　ううっ……失敗した」
「火遁・豪火球の術！　火力が足りない……」

霧は発生するもすぐに雲散し、炎はすぐに消滅してしまう。
二人は唸っていた。

「まぁ、数ヶ月でマスターされたら俺の立つ瀬がないけど」

因みに俺が土遁の術が使えるようになったのは修練を開始してから半年後だった。
多分、父さんと母さんが優秀な忍びだったお陰だろう。

「それじゃあ午前の演習は此処まで。午後には合同訓練があるからまたここに集まってね」

「合同訓練……何処とですか？」
「三人は覚えてないかな？　担当上忍が紹介された時ドアを蹴倒して入ってきた人を」
「ああ！　あの濃ゆい人！」
モミジの言葉にカツオ上忍は苦笑いをする。
「彼の名前はマイト・ガイ。体術のスペシャリストだ。彼は僕の一期上に当たる先輩でね、彼に誘われて、特に断る理由も無かったからやることにしたんだ」
という事は久しぶりにリーに会うことになるのか。
その他にネジやテンテンにも会うことになるのだが……兎に角、目立たないようにしよう。
「日向ネジか……」
「久しぶりにテンテンちゃんに会えるのか～」
最近お互いの事を話すようになって分かってきた事だが、コンブは日向ネジをライバル視しているらしい。
リーもそうだし、珍しい事でもないのかもしれないが。
モミジはテンテンとくの一時代に仲が良かったそうだ。
今は、俺とリーのようにお互いに任務や演習があってあまり会っていないそうだが。
時間はすぐ過ぎ、合同訓練開始の時間となる。

演習場で待っていると時間の三十分前にガイ班の面々は現われた。
「第三班ただいま到着した！　今日はよろしく頼む」
正式名称は第三班だったのか……
ふとリーに顔を向けると、既にガイ上忍と同じ全身緑色のタイツの様な修行着を着ていた。
モミジはガイ上忍とリーを見比べて吹きかけているし、コンブは「あの服いいな……」と呟いている。
「君達！」
「は、はい！」
「お近づきの印としてこれをプレゼントしよう」
そういうとガイ上忍は、鞄のなかからレッグウォーマーのようなものを取り出した。
「あ、ありがとうございます――え……あの、これ中に何か入ってるんですか？」
「うむ！　重りだ！　さらに精進するように！」
レッグウォーマーを受け取るとき、あまりにも重く落としてしまう。
しまった……もう少し警戒して置けばよかった。
それを見ていたコンブとモミジは遠慮しているようだ。
しかし貰ったのに使わないのも何だし、足に装着する。
「あんまり無理しない方がいいんじゃないの？」
「大丈夫大丈夫」
テンテンが声を掛けて来てくれる。

何ていい子なんだ……
少し動き回ってみる。
確かに重いが何とか動けそうだ。

「早速気に入ったようだな！」

ガイ上忍とリーはいい笑顔でこっちを見ている。
俺は苦笑いで返した。
その後、訓練をするため崖の下まで移動した。
その間、モミジとテンテン、俺とリーは会話をしたものの、コンブとネジは会話に入ってこなかった。

「所で演習は一体何を？」
「今日は、崖登りの業をやってもらうよ」

崖登りの業か……原作でもカカシがやってたけどつらそうだな。

「この修行はチャクラを使ってはならない。全身の力だけで上りきってもらう。全身の筋力とバランス感覚、洞察力を養う為の修行だよ」
「前の二つは分かるが洞察力……」
「岩肌には堅い脆いがあるからね。それを良く見極めていかないと……落ちるよ」

崖は結構な高さがあり、高いところから落ちたら死ぬかもしれない。

「こういう危機的な状況でこそ！　忍びとしての真価が問われるのだ！」
「分かりました！　ならば、一番最初に登れなかったらもう一度最

初からやり直します！」
「よし、いいぞ！　リー！」

もう自分ルールを始めているのか……
そんなこんなで崖登りの業が始まった。

第十話

崖登りの修行が始まって数十分。
一番登っているのはリー、すぐ下にネジ、少し離れて俺とコンブ、そしてモミジとテンテンの順で登っていた。
チャクラを使ってはいけない為、必然的に自分の力に頼るしかない。
土遁を使えれば……修行でずるしたら駄目か。
上を見ると、リーは雄叫びを上げながら登っており、ネジは呆れている。
おっと！　落ちかけた……足が重りに慣れてないから危ないな。
集中しないと。

半分まで上りきった所で皆の登るスピードが落ちる。
ハイペースに登りすぎたらしい、手に力が入りにくくなってきた。
だが、ゆっくり行けば十分乗り越えられると思う。

「リー、少しスピードを落とせ。最後まで持たないぞ」
「だ、大丈夫です！」

その中でもリーが一番疲れている様子だ。
此処から落ちたらまずいぞ……まぁ、ガイ上忍かカツオ上忍が助けてくれるだろうけど。
そんな事を考えて、ふと上を見ると――リーが上から降ってきた。
俺は咄嗟に右手で足を掴んだが、重さに耐え切れずそのまま崖から手を放してしまう。
そして、そのまま落下。

「ムスビ！」

「リー！」

まずいこのままだと死ぬ――死ぬのだけは嫌だ。
俺はリーの足を離すと、チャクラを練り印を結ぶ。
そして、そのまま地面に向かって土を吐き出す。
まだ、リー以外に見せた事が無い術――土遁・土流壁の術。
本来は強固な土の壁を作り、身を守るものであるが、強度は自由自在だ。
頑張れば、スポンジのように柔らかくもできる。
その土に俺とリーは落下する。
し、死ぬかと思った……

「無理するなよ！　リー！　先生達も助けてくださいよ！」
「も、申し訳ありません」
「いや、勿論助けるつもりだったんだが、君が術を発動したものでな。邪魔をするとかえって危ないと判断したんだが、すまない」
「ごめんね、ムスビ」

三人が同時に頭をさげる。
確かに、俺が術をかけていたら邪魔だったな……

「大丈夫だったからもういいですが……やり直しですか？」

正直最初から登り始めるのは無理だ。
すると、ガイ先生は笑顔で俺とリーの背中を掴み――

「俺に任せろ！　元の場所に連れてってやる」

そのまま足だけで崖を登り、俺とリーを元の場所に戻し頂上まで登った。

足だけで……なんという規格外。

「大丈夫……？」

「ありがとう……あんまり大丈夫じゃないかも」

コンブの優しさが身に染みる。

上には、ネジが俺を値踏みするような目で見てるし、下だとモミジとテンテンが興味津々と言った顔をしている。

この後質問攻めにあうんだろうなぁ～

その後、時間をかけてしっかりと登りきった。

リーは一番最初に登りきった。

自分ルール達成である。

「ねぇ！　あの術どうやってやったの？」

「ねぇ！　あの術初めてみるけど、何で隠してたの！」

女三人寄れば姦しいというが二人だけでも騒がしいです。

俺は助けを求めようとコンブを見る……顔を逸らされた・

リーは……ガイ上忍と何かを叫んでいる。

ならばネジ……コンブと同様顔を逸らす。

「まぁまぁ二人とも。ムスビが困ってるから落ち着こうね」

流石はカツオ上忍……頼りになる。

立ち上がろうとすると、少し立ち眩む。

肉体的な疲労と、咄嗟に土流壁を使ったとき無駄にチャクラを練りすぎたらしい。

まだまだ要練習だな。

他の皆も肉体的な疲労がたまっているらしい。

まぁ、今日の修行は此処までだろう。

「よくやった！　崖登りの業をやり遂げた記念に俺が飯をおごってやる！」

「流石はガイ先生です！」

「ガイ先生、カツオ先生より太っ腹ですね！」

「あはは……」

モミジ……お前ホント容赦ないな。

しかし、この面子で食事か……原作には関係しないよな、多分。

そんなこんなでガイ上忍お勧めのお店に行く事になった。

ガイ上忍に連れられてやってきた所は鍋専門店。

そして、ガイ上忍が選んだメニューは勿論キムチ鍋。

ガイ班の三人は良く此処に来るらしい。

そして、今の状況は――

「ムスビ！　お豆腐とって」

「肉団子……」

「はいはい」

何故か人に渡す係になってしまっている。

それぐらい別に良いんだけど、皆食べるの速くて、俺が食べる時間が無い。

忍びに早食いは基本だけど、こういう時ぐらいは自重してほしい。

「むっ！　全然食べて無いじゃないか！　よし、これを食え！」

そういってガイ先生は俺の食器にいっぱい煮えた食べ物を入れてくる。

「所でガイ先輩、次の中忍選抜試験はどうしますか？」
「俺は一年間青春させてから出すと決めている！　だから次の試験にはださん！」

二人の上忍は次の中忍選抜試験の話を始めた。
因みに既に一回目の中忍選抜試験は終えている。
ルーキーがその年最初の選抜試験を受けるのは稀で、全班が受けるのはほぼ無い。
今回のルーキーは一回目は全員受けなかったらしい。
俺はそっと聞き耳を立てる。

「じゃあ、自分は次の試験を受けさせましょうかね」
「むっ？　何故だ？」
「ガイ先生の教え子達と被ると合格する確率が減りますからね」

カツオ先生良い判断だ。
原作の試験に参加したら確実に原作壊す事になるしな……
最初から試験内容を知っているという大きなアドバンテージがあるしな。
というか、我愛羅とかネジとかシノとかに勝てそうにない。

「というわけで、君達を次の中忍選抜試験に推薦しておくからね」
「わっかりましたー！」

え！　この流れで言うのかよ。
何はともあれ、次の中忍選抜試験に参加する事が決定した。

因みに鍋は殆どなくなっており、俺はあんまり食べる事が出来なかった。

第十一話

中忍試験参加が決まった次の日は、珍しく休みとなった。
その日の朝、中忍試験の事を父さんに伝えると、父さんは大きな巻物を持ってきた。
そして、それを開く。
そこには、血で父の名前が書かれ、下に血判が押されていた。
他にも名前が三つ書かれている。
この三つはご先祖様の名前かな？

「これは俺の家系が代々契約している土竜を呼び出す為の口寄せ契約の巻物だ」
「も、土竜？　役に立つの？」

あまり土竜の事は知らないが、地面の中以外ではあまり役立ちそうにない。
視覚とか発達してそうにないし。

「主もに諜報何かで役立つな。犬ほどでは無いが鼻も効く。それに、長年生きた忍土竜は高度な土遁の術を使える」

忍土竜なんて居たのか……
まぁ、何があっても不思議じゃない世界だけど。

「それじゃあ、俺の名前の横に血で名前を書いて血判を押してくれ」

父さんに言われて、親指を噛んで切り血で自分の名前を書き、血判を押す。
その後、口寄せの印を教えてもらう。

早速呼び出すために庭に移動する。

「印はさっき言った通りだ。じゃあ一回やってみようか」
「わかった……口寄せの術！」

チャクラを練り、印を結び、掌に血をつけ地面につける。
煙が巻き起こり、晴れると其処には赤茶色の土竜が居た。

「此処は……綱んちの庭か。何か俺によう？」
「いや、今回はムスビへの顔見せだけだよ、ミズラ」
「ムスビ？　ああ、そこに居る奴か」

何というか態度でかいな。
原作でもこういう口寄せ動物は居たけどさ。

「まぁ、取りあえずお菓子くれよ」
「はいはい。ムスビが契約した事君の両親に伝えておいてね

そういって父さんはガルビーと呼ばれるポテトチップスに似たものを渡す。
コイツはガマ吉ポジションか。

「分かった。んじゃな～」

そういうと、ガルビーを持って消えてしまう。
本当に役に立つのか？

「ああ見えて、諜報や追尾に関してはかなり役に立つよ」
「そうかなぁ……」

まぁ、父さんの言う事に間違いはないだろう。
久しぶりの休みだし街の中でもぶらぶらするか。
木の葉の里に住んでるけど、まだ隅々まで見回った事はないし。

「父さん、ちょっと出かけてくるよ。夕飯までには帰ってくるから」
「分かった。いってらっしゃい」
「いってきます」

さて、久しぶりに何をしようかな……

どうしてこうなったんだろうか。
俺の目の前には、藍色のTシャツに白の半ズボン姿のうちはサスケがいた。
たまたま、演習場を通りかかり、そこで修行に励んでいたサスケを見ただけなのに。
というか、どうして俺が行動するとこんな事が起こるんだ？
下手に介入したくないのに。

「本当にやるのか？」
「当然だ」

何故か手合わせする事になってしまった。
折角の休みなのに……

「来ないのならこっちから行くぞ！」

そういうと、サスケはその場で印を結び、大きく息を吸う。

いきなり火遁・豪火球の術かよ！
俺に向かって大きな火の玉が直進してくる。
すかさず土遁・土中映魚の術で土の中に潜る。
原作のカカシと同じ様な倒し方はサスケに影響を与えかねないしどうやって戦おうか……

「なっ！　何処に消えやがった！」

アカデミーじゃ性質変化は習うけど、術については教えてくれないからな。
俺は、後ろから飛び出るとそのままサスケの背中を小突き転倒させる。
そのまま腕を取って地面に押し付ける。

「勝負有りだ。それじゃあ、俺はこれで……」
「待て！　もう一回だ！」

そのまま立ち去ろうとすると、サスケに止められる。
こんなキャラだったっけ？
その後、何度も手合わせをさせられ、気付けば時間は午後になっていた。

「もう一回だ！」
「もう許してくれ……また今度だ」

その言葉を聞いてサスケの表情が変わった。
今の台詞ってイタチの台詞のまんまじゃん……

「また会う機会があれば、相手をするよ。それじゃ！」
「あ！　待て！」

俺は瞬身の術を用いてその場を離脱した。
あれ以上あの場に居たら、ぼろが出そうだし。
とにかく、昼食でも食べに行くかな。

第十二話

「う……美味い」

俺は今昼食の為一楽にやってきていた。
因みに、来るのは初めてである。
ナルトが良く此処に来る為、自重していたのだ。
しかし、今回は此処に来る前、金髪のツンツン頭のオレンジ色の服を着た男が帰っていくのを見た。
だから、ナルトとかち合うこともあるまい。
しかし、木の葉は服装自由だな。
赤とかオレンジ色なんか目立つのに。

「あ～腹減った。おっちゃん！　味噌ラーメン一つ！」
「チョウジ、あんまり食べ過ぎるなよ。あ、俺も同じの一つ」

俺の隣に座ったのは秋道チョウジと奈良シカマル。
チョウジの方は出されたラーメンを凄い速さで食べている。
凄い食欲だな……流石は、秋道一族。

「何か、すんません」
「いや、別に迷惑してないからいいよ。気持ちのいい食べっぷりだと思ってただけだよ」

俺がチョウジをじっと見ていて迷惑だと思ったのかシカマルが頭を下げてくる。
どうも、彼等は昔俺と会った事を忘れているようだ。
シカマルの父とチョウジの父は俺の父さんの友人で、昔二人を家に招いた事がある。

その時に、シカマルとチョウジを連れて来たのだ。
あの時は、かなり焦ったものだ。
まさか、いきなり会うとは思わなかったし。

「一楽のラーメンは好きかい？」
「大好きー！」
「そうかい。おっちゃん！　二人に味噌ラーメン。俺のおごりだ」
「え？　良いんですか？」
「子供なんだから遠慮するなよ」

そういうとシカマルは小声で「あんたも子供じゃ……」と言っている。
社会的に見たら大人だと思う。職についてるし……忍者だけど。

「ご馳走様でした。これ、御代ね」

そういって、カウンターの上に三食分のお金を出す。

「それじゃあ」
「おい！　一体アンタはだれなんだよ」

そのまま俺は足早に立ち去った。
勿論、シカマルの言葉はスルーである。

一楽を出てからも里をブラブラする。
ふと、人通りの少ない所を通りがかると、地面に膝をついて、何かを探している黒髪で長髪の少女が目に入る。

何か落し物でもしてしまったのだろうか？

「君、どうしたの？」

「え？　あ、あの財布を落としてしまったみたいで……父上から頼まれた買い物の途中なんですが……」

そのとき、初めて少女の姿をしっかり見た。

そこにいたのは、日向独特の目をした少女だった。

原作に出ていたような気もするが……思い出せない。

「君は日向家の人だよね？」

「はい、そうですが……」

「なら白眼を使えばいいんじゃないかな？」

「あ！」

確か白眼はほぼ全方向を見渡す視野、数百メートル先を見通す視力、その他にも物体の透視や幻術を見破ったりも出来たはずだ。

本当に瞳術はチートだよな……

「白眼！　……あ、犬が咥えて離れていきます！」

「どっちの方向？」

「あっちです！」

少女が指を指した方向は家屋。

俺は、家屋をつたっていこうとするが、少女はついて来れない。

そういえば、少女は日向家だけどまだまだ小さいしな。

すぐに戻って、しゃがんで背中をだす。

「乗って」

「え……ですが」

「いいから、いいから」

直ぐには乗らなかったが、急かすと乗ってくれた。

「場所が変わったりしたら教えてね。じゃあ、いくよ」

「は、はい！」

少女をおんぶした状態で屋根を乗り移っていく。

「あ！　あっちです！　凄い速さで離れていきます！」

少女が指を指した方向に向かって移動する。

万が一見失ったら駄目だよな。

チャクラを用いてスピードを上げる。

「もう直ぐそこです！」

家屋が終わり、普通の通りに着地する。

「ん？　赤丸何咥えてんだ？」

声のした方向を振り向くと、そこには赤丸を頭の上に乗せた犬塚キバがいた。

財布を咥えた犬は赤丸だったのか。

「おろすよ」

「は、はい」

少女をおろし、キバに近寄る。

なんか、この頃よく原作のキャラと絡んでしまうな。

原作開始が近づいてるからか？

「あの、ごめん。ちょっといいかな？」

「ん？　何かようなのか？」

「実はね、君の頭の上に乗ってる忍犬が咥えている財布なんだけど……」

「おお、これか。もしかしたアンタのか？」

「いや、俺のじゃないよ。この子のなんだ。返してくれないかな？」

「ああ、いいぜ。悪かったな、赤丸が勝手に持ってきちまって」

「い、いえ。見つけてくれて感謝します」

そういって少女はキバから財布を受け取る。

涎で少しぬれているが……大丈夫だろう。

これで万事解決だな。

「あ、あの……一ついいですか？」

「ん？　何かな？」

「此処って一体どこでしょうか？」

赤丸を追ってきてしまったために場所が良くわからなくなってしまったのか。

「何処に行きたいのかな？」

「酒酒屋って所です」

酒酒屋……お酒とか売ってるみせだな。

こんな子供に買いにいかせるなよ……親の顔が見てみたいものだ。

「じゃあ、連れて行ってあげるよ」

「え！　そんなに迷惑かける訳には……」

「いいからいいから。さぁ、乗って」

そのまま少女をおぶって、目的地の酒酒屋に移動する。
普通に行くより家屋つたって行った方が速いしね。

「よし、ここが酒酒屋だね。それじゃあ、俺ははここで」
「あ！　少し待っててください」

そのまま立ち去ろうとすると、少女に止められた。
流石に、待っていてと言われているのに帰ったら駄目だろう。
しかし、この少女は一体誰なんだ？　何処かで見たことがあるような。
少しして、少女が酒瓶を持って出てくる。

「お待たせしました。じゃあ、いきましょう」
「え？　何処に行くの？」
「我が家です。ここまでして頂いたのに何もせずにいるのは、日向宗家の恥です」

日向宗家の恥って……って、この子宗家の子なのか？
と言う事は……あ！　日向ハナビか！
原作でもほんのちょっとしか出てないから分からなかった……
しかし、お礼に家まで行くとなると日向ヒアシや日向ヒナタと会うことになる。
それは避けたい。

「いや、別にお礼をされるほどの事はしてないよ」
「駄目です！」

駄目だ、これは逃げられない雰囲気。

「分かったよ。でも、ここでちょっと待っててくれるかな。両親に言ってくるから」
「分かりました。でも、絶対戻ってきてくださいね」
この後、両親に事の次第を報告し、また酒酒屋に戻る。
その後、ハナビちゃんに連れられて日向宗家へと向かった。

第十三話

「大きい家だね……」
「そうですか？」

日向ハナビに案内され、向かった日向宗家はとても大きな家だった。
庭の広さとか俺の家の比じゃないくらいに広い。
流石は、日向宗家の家だ。

「さぁ、入ってください」
「ええと……お邪魔します」

日向宗家の門をくぐる。
何か緊張してきた。

「ただいま帰りました」
「お帰りなさい……その人は？」

家の中に入ると、直ぐに日向ヒナタが現われた。
しかし、俺の姿を確認すると、柱に隠れてしまう。

「この方は私の恩人です。名前は……」
「そういえば、まだ自己紹介してなかったね。俺は海苔巻ムスビ。よろしくね」
「私は日向ハナビです」
「日向ヒナタです……」

自己紹介を済ませ居間に案内される。

そこには、日向ヒアシが座布団に正座で座っていた。

「父上、ただいま帰りました」
「うむ……その者は一体誰だ？」
「恩人の海苔巻ムスビさんです」

取りあえず、頭を下げる。
ヒアシさんは俺の名前を聞くと表情を変えた。
多分父さんの息子だと思っているんだろう。
その後ハナビちゃんが何があったのかを説明する。

「娘が世話になったようだな。私からも礼を言う」
「い、いえ……」

まさか、日向家当主に礼を言われるとは思わなかった。

「すまないが、私からも一つお願いしてもいいかな？」
「何でしょうか？」
「ヒナタとハナビと組み手をして欲しいのだ」

何ですと……

あの後結局断りきれず、了承してしまった。
現在は、道場に移動してきている。

「準備はよいか？」

「はい、いいですよ」

柔拳か……掠っただけでも効くらしいしな。
まぁ、全力で来る事は無いだろう。

「二人は胸をかりるつもりで全力でいけ！」

え！　何を言っているんですか！
そんなこと言える訳もなく、最初はヒナタと対峙する。

「宜しくお願いします！」
「お願いします」

礼をして、構える。
ヒナタは日向独特の構えをしている。

「行きます！」

そういって向かってくる。
ヒナタの拳底を外に押し出すように受け流す。
掠っただけでも効くらしいので、ガードなんて出来ない。
何度か同じ流れが続き、今度は此方も攻撃に転じる。
掌や手の指の動きに注意して攻撃をする。
つかまれて柔拳受けたら元も子もないし。
少しの間、打ち合った後、足払いで転倒させた所で寸止めの拳を放った。

「次、ハナビ」

ヒナタに対して言葉は無しか。

続いて、ハナビと対峙する。
原作だと、ヒナタよりも才能があるとか言われていたな。

「宜しくお願いします！」
「お願いします」

先程のヒナタと同様の構えを取る。
そして、向かってくる。
打ち筋はヒナタに似ている。
教えているのが、ヒアシさんだから当然か。
しかし、ヒナタの拳とハナビの拳は違う感じがするな。
今回も少しの間打ち合った後、裏拳をハナビの胸辺りに当て、衝撃で倒し、倒れた所に寸止めで拳底を入れた。

「ヒナタとハナビは先に戻っていなさい。私は少し、ムスビ君と話がしたい」

ハナビとヒナタが道場から出て行く。
一体、俺に何を話す気なんだ？

「君は、綱の息子だな？」
「はい。父とは一体どういう関係で？」
「アカデミーの同期だ。任務もよく一緒に組んだ間柄だ」
「そうだったんですか」

父さん結構原作キャラとも親交あるな……
一体どういう存在なんだろう。

「君から見てヒナタとハナビはどう思う？」
「自分が思った事……ですか？」

「ああ……」
「そうですね……」

俺の言った事は大体纏めてこうである。
技術だけを見たらヒナタのほうが高い。
しかし、ヒナタのほうは優し過ぎるせいか、攻撃を躊躇うときがある。
反面ハナビはそんな事は考えず、思いっきり来る。
だから、ハナビのほうが手強く感じた。

「そうか……」
「戦闘時に気持ちの切り替えが出来ていない感じですかね」

俺の話を聞いたあと、ヒアシさんは何か考え込んでいるようだった。
原作でも、ネジについて悩んでたし、大変な人だな。

「よし、それでは私とも、手合わせ願おうか」

え！　マジですか……
しかし、断るわけにも行かない。
此処は胸を借りるつもりで行こう。

「宜しくお願いします」
「本気で来るのだぞ」

この場所じゃあ土遁は一種類しか使えないな。
俺はチャクラ吸着を用いて、ヒアシさんに向かう。
下手にフェイント入れても無駄だな。
上段蹴りと下段蹴りを連続で放つ。

木ノ葉旋風である。
しかし、簡単に腕と足で防がれてしまい、足を掴んで投げられる。
回転しつつも着地し、低い態勢で突っ込み、直前で手を着きそのまま飛び上がり踵落としを浴びせる。
それも簡単に防がれる。
体術得意な日向のそれも当主相手に体術で挑んで勝てるわけ無いか。
頑張ったものの、ボコボコにされてしまった。
容赦ないです、ヒアシさん。
その後、夕食をご馳走になった。
その時、俺の顔を見てハナビちゃんがヒアシさんに少し怒ったりしていた。
俺の前で娘に怒られるのは嫌だっただろう。
しかし、原作に介入しないと決めているのに今日はかなり原作のキャラにあってしまった。
多分、影響は与えてないけど……大丈夫か？

第十四話

「夕食ありがとうございました。美味しかったです」
「また、何時でも来るといい」
「また来てくださいね」

帰るときに、何と三人がお見送りをしてくれた。
何時でも来るといいって……確かに夕食は美味しかったけど、そんなにほいほい来れる場所じゃないです。
ヒナタは原作どおりモジモジしてるし。

「それでは、失礼します」

その場で、お辞儀をして日向宗家の家を去った。
もう辺りは暗くなってるし、早く帰らないとな。
角を曲がった所で、遠くから誰かが来るのが見えた。
あれは、何処かで見たような……

「お前は……此処で何をしている？　そっちには、日向宗家しかなかったはずだが？」

そこにいたのはネジでした。
日向宗家と分家の家はどうやら近くにあったようだ。

「何をしていたかを聞いているんだが？」
「ああ……色々あってな」

それから、ネジに今日あった事を話すことになった。

「お人よしだな……」
「気まぐれだよ、気まぐれ」
「そうか。だが、日向宗家に関わるのは止めておけ」

ネジの目つきが鋭くなる。
何というか、本当に今のネジは宗家恨んでるな。
真実を告げられてないだけ当然か。

「え？　どうしてだ？」
「それは……」

言葉を濁してるな。
流石に言えないらしい。
あの時は、中忍試験の最中で気分が高まっていたんだろうか。
そうじゃなければ、大観衆の中であんな事言うと思えないし。

「んじゃ、そろそろ俺は帰るな」

俺はそそくさとその場から立ち去る。
色々と面倒な事になりそうだし。

ネジと分かれた後、薄暗い道を一人で進む。
流石に急ぐ事も無いので、普通に歩いている。
屋根をつたったりするのは、緊急の時だけにしないと。
少ししして、誰かが路上に座っているのを発見する。
それは、大きな荷物を背負ったおばあさんだった。
どうかしたのだろうか？

「おばあさん、どうしましたか？」
「腰が抜けて歩けなくなってしまって……」
「じゃあ、おぶって連れて行ってあげますよ。乗ってください」
「おお……ありがとうございます」

片膝をつけ、背中を差し出す。
荷物のせいなのか、中々重い。

「家はどっちですか？」
「あっちですじゃ」

指を指した方に歩いていく。
無理な動きをしたらおばあさんに負担がかかってしまう。
その後、数十分ぐらい歩くと、おばあさんの家に到着した。
おばあさんに聞いたところによると、一緒に住んでいる家族がいるらしい。
この世界にインターホンは無いので扉を叩く。
少しして、どこかで聞いたような声がした。

「は～～い……あ、ムスビ！　何で私の家に？」
「此処モミジの家だったのか……」
「二人は知り合いかい？」
「あ！　おばあちゃん！　心配してたんだよ？」

どうやらこのおばあちゃんは、モミジの祖母らしい。
とりあえず、玄関までおばあちゃんを運び座らせる。

「ありがとうございました」
「私からもありがとう」

「いえいえ、次からは気をつけて」

そして、そのまま帰ろうとするとモミジに止められた。

「上がっていってよ。夕食ご馳走するから」

「いや、今日はもう夕食食べたから……また今度」

「じゃあ、明日ね！」

強引だな……

まぁ、特に用事はないし大丈夫だと思うけど。

「わかった。それじゃあまた明日」

「ばいばい～」

モミジの家を後にする。

今日は色々と人助けをよくした気がする。

この様子だとまだ誰かに会いそうな気がする。

「あれ？　君は……」

案の定テンテンに出会ってしまった。

今日は厄日か？

両手には大量の荷物を持っている。

「ええと、テンテンさんだったよね？　こんばんは」

「こんばんは。テンテンで良いわよ」

「俺もムスビでいいよ。買い物の帰り？」

「ええ。お母さんに頼まれたものとか、自分の買い物とかね」

よく見ると、雑貨品とか野菜とか買い込んでるな。

自分の買い物は……大量の口寄せ巻物か。

「へぇ～……重たそうだし、もとうか？」
「え？　でも、悪いし……」
「今日は運がよかったと思っておけばいいと思うよ」
「じゃあ、お願いしようかな」

テンテンから大量の荷物を受け取る。
かなり重い、どれだけ買い込んだのだろうか。

「ムスビ君って、リーが言うとおり優しいんだね」
「一体何を言っていたんだ？」
「ん～内緒～」

一体何の話をしているんだろうか。
そんな会話をしていると、テンテンの家に到着する。
そういえば、テンテンの親は原作に登場してないな。
そこで、荷物をテンテンに手渡す。

「それじゃあ、俺はここで」
「うん。ありがとうね～」

そこでテンテンと分かれる。
何か、今日は良い事をよくした気がする。
明日は良い日になりそうだ。
あ！　俺の休日が……

第十五話

色々な出来事があり、あまり休めなかった翌日の早朝。
俺達はいつもどおり演習場で忍術の修行をしていた。

「霧隠れの術！」
「火遁・豪火球の術！」
「土遁・影分身の術！」

モミジは水を巻き上げ霧を発生させる。
コンブは直径が等身大の炎を吐き出し。
俺は二人に分身する。
土遁・影分身は土を媒介に、チャクラを練り混み発動する。
普通の影分身と違い、チャクラを半分にする必要はない。
分身も術を使えるが、それ相応のチャクラを練り混まないと使えない。
消せば、分身の情報は還元されるが、経験値は還元されないらしい。
まぁ、それだと疲労とかも還元されるからよかったけれどね。

「よし！　出来た～」
「出来た……」
「まさか、こんな短期間で出来るとはね」

これで、三人全員が性質変化を使えるようになったのか。
戦闘の幅も広がるな。

「でも、一つの忍術を覚えたぐらいで満足しちゃいけないよ」
「は～い」

「分かってます……」

まぁ、一つの術を使えるようになれば、他の術も覚えやすいとは思う

忍術は攻撃用の術、防御用の術、補助用の術の三種は欲しいよな。

火遁は攻撃用の術しかないような気もするけど……

「じゃあ、二人からは僕が忍術を伝授しよう」

「やった～！」

「宜しくお願いします」

「ムスビ君は少し待っててね」

「分かりました」

そういうと、カツオ上忍は二人に色々と話し始める。

俺も聞いておくべきだろうか？

将来的には土遁以外にも覚えようと思ってるし。

今は、土遁一本に絞っているが。

中忍レベルの土遁の術なら父さんに学び使えるようにはなった。

しかし、使えるようになっただけだ。

戦闘中はスムーズにできるだろうか？

「印の練習するか……」

その後、一人となった俺は印の練習に勤しんだ。

どうやら、モミジとコンブはカツオ上忍から簡単な術を教わったらしい。

「それじゃあ、幻術の修行をしようか」

少しして、幻術の修行に移る。

この班は基本的に忍術と体術に傾き始めているのであんまり重視していない。

それでも、俺とモミジは簡単なのなら数種使えるが。

「今回は幻術破りの修行だ。皆、よく見ておいてね」

そういうと、カツオ上忍は水の上にたった。

水面は揺れていない。

「もう一度おさらいするけど。幻術というのは敵にチャクラをコントロールされる事を言うんだ。大体、人の五感に働きかけて発動する」

写輪眼とか多由也の笛とかだな。

「だから、自分のチャクラを自分で乱す事ができれば幻術を破る事ができる。今僕は体内でチャクラを乱回転させている。次の修行はチャクラを体内で乱回転させること。水の上に立ちながらね」

「それなら簡単ですよ！」

足の裏のチャクラを一定量放出しつつ、体内のチャクラを乱回転か。

放出したら釣り合いが取れずに水の中にドボンってことか。

モミジが意気揚々と水の上に立ち、チャクラを乱回転させる。

少しして、モミジの足元の水が大きく波立ちモミジは水の中に落ちた。

「お、思ったより難しい……」
「俺達もやるか」
「ああ……」

水の上に立ち、体内のチャクラを乱す。
水面が波立つのが分かる。
意外に難しい、集中する。
落ちはしないが水が波立つ。

「あ！」
「きゃあ！」
「うわっ！」

一人が落ちると、何故か立て続けに落ちてしまった。
その後一時間程度すると、全員が水の上に乗れるようになった。

「よし！　皆良い感じだね。とりあえず、火にあたりながら次にやることを説明するよ」

何度も水に落ちた所為で全員びしょ濡れだからありがたい。

「幻術はチャクラを乱す以外にも、幻術にかかっていない者がかかっている者に衝撃を与えれば解ける」
「なるほど……」
「それじゃあ実践してみよう。まず最初はチャクラを乱して解いてね」

カツオ上忍が印を結んだところをみた後、すぐに幻術を解除する。

「お、ムスビは速かったね。他の二人はどうかな？」

他の二人は何か唸っている。

「一体どんな幻術をかけたんですか？」

「内緒だよ。内緒」

何か良い笑顔で言われた。

どういう幻術をかけたんだ？

「解！　……死ぬかと思った……」

「解……」

二人も幻術を解除したらしい。

かなり焦燥しきった顔をしている。

「一体どんな幻術にかかったんだ？」

「言いたくない……」

「同じく……」

二人は口を押さえて気分悪そうにしている。

一体何を見たんだ？

「よしよし。でも、ムスビ。君は最初から体内のチャクラを乱してたよね？」

「ムスビずるい！」

「ずるいな……」

この後俺一人だけ何度も幻術をかけられた。

何を見たのかは……言いたくない。

思い出したくも無い……。

第十六話

「よし！　午前の修練はここまで。次は午後からだから遅れない様にね」

そういうと、カツオ上忍は煙を出して消えてしまった。
一々、素早く煙球を投げているんだろうか。

「大丈夫か？」
「ああ……多分」
「ずるい事をするからだよ」

ずるい事って……別に、最初からチャクラを乱していたら駄目って言われてないのに。

「それじゃあ、飯でも食いにいくか……」

さて、今日は何を食べようか。
昨日はラーメンだったしな。

「ちょっと、ムスビ！　約束！」
「え？　ああ……」

そういえば、飯を食べにいく約束してたな。
でも、今言うか？
まだ、午後の修行もあるし軽めにしたい。

「何があったのか？」
「ああ、実はな……」

コンブに昨日あったことを説明した。
勿論、モミジの部分だけだが。

「良いことしてるな。ムスビ」
「まぁ……流石に放置して行くのは駄目だから」
「というわけで、昼食食べに行くよ！」
「いや、待てって！」

強引に連れて行こうとするモミジを押しとめる。

「修行で服とか濡れて汚いからさ。また、今度な」
「え～、おばぁちゃん来るの楽しみにしてるのに」
「ムスビ……諦めろ」

これは、逃げられないのか。

「分かった。服を着替えてから行くから先に行っておいてくれ」
「絶対来てよね！」

そういうと、モミジは帰ってしまった。

「頑張れ……」
「ああ、うん。頑張るよ」

コンブも同情してくれている。
さぁ、早く着替えて家に行くか……

家で服を着替えてモミジの家に直行した。
モミジの家に着き、ドアをノックする。

「遅かったね」
「道に迷ってな……」

昨日、行った時は暗かった為そんなにモミジの家を覚えていなかったのだ。
断じて、俺が方向音痴という訳ではない。
というか、忍者が方向音痴って駄目だと思う。

「早く入って。もう、昼食の用意は出来てるから」
「お邪魔します……」

何だか、日向家に入るのと違う緊張感があるな。
その後はモミジの家族の皆さんと昼食を取った。
気をきかしてくれたのか、かなり多くの食べ物が並んでいる。
残すのも悪いし全て食べざる終えない。
モミジの家族構成は、父・母・祖父・祖母・モミジ・モミジの妹だった。
この世界で六人家族は珍しいと思う。
昼食を食べ終わった後、モミジの妹――カエデに忍術を見せてくれとせがまれた。

「ねぇねぇ！　何か忍術見せてよ！　お姉ちゃんの使える術って地味で面白くない――痛っ！」

「地味言うな！」
「こらこら、カエデ。ムスビ君に迷惑かけたら駄目でしょ」
「構いませんよ。それくらいなら」

確かに地味な術しかないな。
でも、霧隠れの術って簡単な術な割りにかなり使える術だと思う。
まぁ、地味なのには変わりないけど。

「じゃあ、少しだけだよ」
「やったー！」

土遁は室内で使うのは駄目だな。
なら……この術にするか。
俺は印を結び、親指を噛み血を掌につける。

「口寄せの術！」

煙が晴れた所には赤茶色の土竜がいた。

「か、可愛い！」
「な、何だ何だ！」
「あらあら、可愛いモグラさんね」

俺が呼び出した喚び出したミズラはカエデちゃんに抱きかかえられた。

「お菓子食べる？」
「食べる食べる……って、これは一体どういうことだ！　ムスビ！」
「お菓子貰えるそうだぞ。よかったな、ミズラ」

その後、叫んでいるミズラを放って置いた。
モミジの方を見ると、何か怒ってるような。

「何でムスビばっかり新しい術が使えるようになってるのよ！」

襟元掴まれて揺らされた。

「落ち着いてくれよ」
「あ、ごめん。でも、ムスビばっかり新しい術を覚えるのってずるくない？」

その後、俺はモミジに口寄せの説明をした。
そのお陰で何とか納得してくれたようだ。
そうこうしている間に、午後の修練の時間が迫ってきた。

「それじゃあ、そろそろ午後の修練があるからかえるね、ミズラ」
「つ、疲れた……まぁ、お菓子を大量にくれたからいいけど」
「えー！　もっと、ミズラと遊びたいー」

ミズラは最初の方は嫌々だったものの、最終的には懐いたようだ。

「わがままいわない、またムスビに出してもらえればいいでしょ」
「うん！　また来てね、ムスビさん！」
「じゃあ、俺は帰るな」
「御疲れ様、ミズラ」

ミズラは煙を出して消えた。
大量のお菓子を持って。
アイツ……本当に役に立つのだろうか？

「ありがとう、ムスビ君。また何時でもきていいからね」

何故か、モミジの家族に気に入られてしまった。

「昼食おいしかったです。ありがとうございました。お邪魔しました」

「またきてね～」

良い人達だったな。

さて、午後の修練もがんばるか……お腹がいっぱいだけど。

第十六話（後書き）

新年明けましておめでとうございます。
今年もよりいっそう頑張りますので宜しくお願いします。

第十七話

「遂に中忍選抜試験か～」

モミジが感慨深くそう言った。
現在は、中忍選抜試験の会場であるアカデミーにやって来ている。
原作では幻術が仕掛けられていたが……果たして。

「此処からは気をつけろよ。俺達はルーキー何だから、目立たず行こうぜ」
「賛成……忍びらしく」
「分かってるわよ。それじゃあ、行くわよ」

ゆっくりとアカデミーの中に入っていく。
試験会場は三階の１２１号室……やっぱり、違うな。
しかし、アカデミーに入って、違和感を感じる。
取りあえず、体内のチャクラを乱しておく。
少し歩いていくと、二人があらぬ方向に行こうとする。
俺は小声で二人に話しかけた。

「おい、何処に行くんだ？」
「え？　こっちじゃないの？」

もしかして、自分がいる場所を別の場所だと錯覚させる術か？
とりあえず、二人の幻術を解いておく。

「道が違う……」
「おいおい、もう中忍試験は始まってるんだぞ」
「ご、ごめんなさい」

「ごめん……」

俺も原作知識が無かったら同じ事になってたかもしれないけど。
それはともかく、俺達は正しい道を進んだ。
１２１号室に入ると既に結構な人がいた。

「何というか、知り合いがいないのって寂しいね」
「まぁ、俺達と同期は二組とも出てないからな」

俺達は目立たないように隅のほうに移動する。
原作のナルトのように目立つような真似はしない。
というか、忍者が目立ったら本末転倒だと思う。

「人がいっぱいいる」
「まぁ、原則的に試験は三人一組（スリーマンセル）で受けないといけないからな」
「と言う事は……１００組受けたら３００人か」

そう考えると凄い人だな。
その中で受かるのは数人だし……倍率高いな。
一時間程して第一の試験官がやってくる。
原作で見たことのある眼鏡をかけた人物だ。

「第一の試験官山城アオバだ。第一の試験の説明を行う。各自指定された席に座れ」
「皆頑張ろう……」
「一次試験合格しようぜ」
「じゃあ、皆また後で」

そういって三人別々の席に着いた。
さて、一体何が行われるのかな。

「参加者は２７６名か……第一次試験はペーパーテストだ」

その一言で辺りがざわめく。

ペーパーテストは毎回するのか……

「黙って聞け！　失格にされたいか！」

監視役の中忍が怒声を上げる。

下忍達は押し黙った。

「試験は１００点満点の問題だ。班員三人で合格ラインを超せば次の試験に進む事が出来る。もし、カンニングを3回犯したと試験官が判断した場合容赦なく失格だ。勿論、仲間である二人もだ。忍びなら忍びらしく無様な姿は晒さないようにしろ」

これ、露骨に忍びらしいカンニングをしろって事だよな。

「最後に、最終問題は試験官から出題される問題だ。試験開始時間から４０分経ったら始める。それまでに別の問題を全て終えるようにしろ」

ちゃんと、意思の強固さを図るものもあるのか。

しかし、次の奴と試験内容が似てるな。

まぁ、そこまで別物にも出来ないんだろうけど。

「それでは試験を配る。今から五分後に始める。そのまま待機して

おくように」

その後直ぐに試験が配られる。
その試験を見て愕然とした。
こんなの解ける訳が無いという問題だ。

「それでは……試験開始！」

どうするか……
口寄せでミズラ呼んで置けばよかった……
回りもあんまり鉛筆動いてないみたいだし。
あ、いいこと思いついた。
俺は土遁・影分身の印を結ぶ。
そして、分身を口寄せの術が使える程度のチャクラを練って床下に出現させる。
そこで、口寄せの術を行い床下にミズラを呼び出した後、分身は消えた。
ミズラは爪で床を通れる程度の穴を開け顔を出す。
どうやら、土竜は全員爪が発達しているそうで、それを用いて穴を掘るらしい。

「何か――ムグッ！」

取りあえず、ミズラの口を塞ぎつつ抱きかかえる。
そして、耳元でやって欲しい事を言った。
まぁ、原作のキバのパクリなんだけど。
ミズラを頭の上にのせて、問題が出来ている奴のカンニングを頼むだけ。

「そこっ！　カンニング三回目だ！　他の二人も退席しろ！」

少し時間が経ってちらほらと退席していくものが増えていく。
モミジとコンブは大丈夫かな。
その後、何十人かは退席したもののそれ以外は何事も無く進み、四十分が経過した。

「これより十問目を出題する」

さぁ……どういう問題かな。

「この問題は三人一組（スリーマンセル）同士が争う問題だ。間違いなく一人は落第する。その際、そいつは二度と中忍試験は受けさせない」

理不尽な問題が来たな。
忍びとしてならここは降りないべきだが……

「受ける者は此処に残れ。受けない者は退室しろ」

カカシは仲間を大切にしない奴はクズって言ってたし。
まぁ、そんなに早く中忍にならなくてもいいか。
俺は席を立ちそのまま退室した。

「あ、ムスビも退室したんだ」

廊下には既にコンブとモミジがいた。

「何だ、皆退室したのか」
「一人が絶対落ちるなんて後味悪すぎ。あの試験官酷いね」
「俺達は運命共同体……」

何ていい奴らなんだ……
俺達はそのまま帰ろうとすると試験官の一人に止められた。

「おめでとう。君達は一次試験を突破した。次は１３１号室に言ってくれ」
「ご、合格ですか！　私達は退室したのに」
「忍者は確かに犠牲を強いられる場面もある。しかし、それを避けて通る事ができるのならば、避けた方がいいだろ？」

避けられるのであれば避けるべきか。
今回はその選択使があったという事か。
なにはともあれ、次は第二次試験か。

「おい、そろそろ帰ってもいいか？」
「あ、お疲れ。また頼むよ」

ミズラは面倒臭そうに相槌をうって消えた。
多分二次試験でも呼び出すと思う。
すまん、ミズラ。

第十八話

俺達は指定された１３１号室に向かっていた。
どうやら幻術とかの仕掛けは無いらしい。
１３１号室に入り、また隅の方に行く。

「人少ないね」
「まだまだ後で来るだろう」
「うんうん……」

その言葉通り後からぞろぞろと人がやってくる。
大体３０～４０人と言った所か？
原作よりも大分減ってるな。
原作はナルトの声が無かったらもっと減っていたと思うけど。
しかも今回は、退室したものが通過だから、俺達みたいに三人残っている所は少ない。
ふと、当たりを見回すと眼鏡の男――薬師カブトが目に入った。
そういえば、彼は本選を棄権し続けているんだよな。
木の葉は彼をもう少し疑わなかったのだろうか？

「二次試験に残ったのは３６名か……俺の名前は並足ライドウ。次の試験に移るついて来い」

少しして、１３１号室に現われたのは顔に傷のある並足ライドウ試験官がやってくる。
３６名って普通に考えてどうなんだろうか。

本選の予選はなさそうだけど。
そんな事を考えつつ試験官の後ろをついていく。
どうやら、二次試験はいつも演習場でやるっぽい。

「第二次試験は此処、第１２演習場で行う。取りあえず、この同意書を配っておく」
「同意書って、何に同意するんですか？」
「ああ、此処からは死人がでる。この同意書にサインをしてもらわないと俺達の責任になるからな」

二次試験から戦う事になるのは一緒か。

「その前に二次試験の説明を始める。ルールはこの宝石を集めてもらうだけだ。宝石は各自一つずつ配る。まぁ、宝石の奪い合いだ」

そういってライドウ試験官は赤い宝石、青い宝石、緑の宝石を三種類見せる。
三種類……難易度高いな。
その後、ライドウ試験官は説明を始めた。

試験場は円周状になっていて中心には塔がある。
入り口から中心まで約三キロ。
この演習場は様々な動植物が生息している。その中で宝石を奪い合う。
宝石は各自、一つの種類を配分する。
赤・青・緑の宝石の三種類全てを集めて塔にたどり着けば二次試験合格となる。
ルールは特に無い。何でもありと言う事だ。
制限時間は１２０時間、原作と同じ５日間である。

「それじゃあ、覚悟の出来たものからこのテントに入り同意書を提出しろ。その後宝石を配布する」

そういうと、五つあるテントの真ん中のテントにライドウ試験官は入っていく。

宝石か……巻物と違って小さいから落としても気付かないかもな。

「忍者同士の殺し合いになるのか。二人とも気をつけろよ。此処からは個人での争いみたいだし」

「うん！　皆、頑張ろうね」

「皆で合格しよう」

二人とは別れテントに入り同意書を提出し、宝石――緑色の宝石を受け取る。

「全員同意書の提出。宝石の配布が終わったようだな。それでは各自ゲートに着け。午後三時より始める」

午後三時か……あと三十分って所か。

ゲートは４番か……なんか嫌だな。

その間に忍具の確認などを行う。

そんな事をしていると直ぐに時間が立った。

「これより中忍選抜試験第二次試験を始める！」

第二次試験が始まった。

ジャングルのような演習場の塔を目指して進む。
木々を飛び、移動している間に結構な動物を見てきた。
デカイカマキリとか二足歩行のライオンとか。
正直、他の忍びよりもそいつらの方が怖い。
一定の距離までやって来ると、一旦移動を止める。
その後、辺りに気配が無い事を確認して口寄せの術を使ってミズラを呼び出す。

「お前……また呼んだのかよ。何のようだ？」
「俺に近い忍びや近づいてくる忍びの位置とか教えてほしい」
「別にいいけど、それ相応の報酬はよこせよ」
「ああ、分かってるよ」
「その言葉忘れるなよ！」

ミズラに働かせる代わりに、俺はお菓子を与えている。
それが先祖代々の契約の仕方なんだとか。
ミズラはその場で鼻をヒクヒクと動かす。
ミズラを呼び出した理由は敵の忍びの監視。
やはり、情報は大切だ。

さて、これからどうしようか。
セオリーとしては信用の置けるモミジとコンブと合流して、数の差の有利を作り、ミズラの嗅覚を用いて奇襲を仕掛ける。
しかし、此処は自分の力を試してみたいという思いがある。
原作と違いこれは個人での試験だしな。

「この辺りから色々なにおいが混じってる。気をつけろよ」

ミズラにそういわれ立ち止まって考える。
隠れるべきか向かい打つべきか。

定石どおりなら、夜休んでいる時に奇襲を仕掛けるべきだ。
だが、それは誰もがわかっている。だから、警戒もするだろう。
ならば――

「ミズラ、早朝になったら動く。今は誰とも会わずスルーする。だから、今は帰って休んでてくれ」
「分かった」

ミズラを返し、地面に降りる。
そこで、土遁・土中映魚の術を使って地面に潜る。
早朝に行動を開始する為俺は少しの間仮眠を取る事にした。

第十九話

「ん……今は真夜中か。良い時間だ」

辺りの気配を確認しつつ、地面から抜け出す。
その後、口寄せの術を用いてミズラを呼び出す。

「行動を開始する。近くに他の忍びがいたり罠があったら報告してくれ」
「分かった」

ミズラを頭の上に乗せ、移動を開始する。
どうやら真夜中に移動する者はいないようだ。
その間に食べられそうなもの――果物などを集める。
採った果物をミズラの鼻で危険かどうか確認してもらい食べる。
少しは腹の足しにもなった。
そうしている間に空に少し赤みが差してくる。
そろそろ攻める頃合かな……

「ミズラ、此処から一番近くて動いてない忍びはどっち？」
「そうだな……南西の方角……およそ２００ｍあまりってところか」

殆どの忍びは夜中の奇襲が怖く警戒しながら眠る。
基本小隊を組んでいる場合は交代で警戒に当たるのだが、一人だとそれは出来ない。
早朝になれば警戒も緩む、そこを狙う。
先程のように木々を飛び移らずに歩いて近づく。
時間をかけてでもリスクは避けないといけない。

少しして木に凭れて座っている忍びを発見する。
額当ては……砂隠れか。
多分、罠を張っているだろう。
俺は、小声でミズラに話しかける。

「ミズラ、罠はどう？」
「地面に起爆札がたくさんあるな……お前が一つでも踏んだら連動して爆発するようになってる。微妙に土の色が違うだろ？」

目を凝らして地面をよく見てみると、確かに土の色が微妙に違う。
まぁ、土遁・烈土天掌を使えばいいような気もする。

「後はワイヤーだな。ご丁寧に色を塗ってるが……匂い過ぎだ。引っ掛かるとクナイとかが振ってくるような仕掛けだな」
「じゃあ、ミズラはワイヤーを切ってくれ。俺が相手から宝石を奪えたらそのまま合流。もし駄目だったら帰ってくれ」
「分かった。ぬかるなよ」

勿論こんな所で終わる気は毛頭ない。
土遁・影分身の術を使う。
本体である俺は地面の下に潜り、様子を伺いつつ砂隠れの忍びに接近する。
分身体がクナイを地面に投げ起爆札を発動させる。
その音に砂隠れの忍びも気付き、戦闘態勢を取る。

「馬鹿め。正面から堂々と出て来るとはな」

どうやら、相手は此方が影分身である事は気付いていないようだ。
そっちの方が好都合だが。
分身体はそのまま砂隠れの忍びに向かって駆け出す。

相手は余裕の表情だ。まだ、ワイヤートラップがあるからだ。
しかし、特定の場所を通っても何も起こらない。

「なっ！　何でトラップが！　くそっ！」

すかさず何かの印を結ぼうとするがそうはさせない。
背後から飛び出し羽交い絞めにする。

「何でそんな所に！」

動けない砂隠れの忍びを分身体が首を絞め、失神させる。

「終わったか。俺に感謝しろよ」
「ああ、ありがとう。今から宝石を探す」

戦闘に勝ったためミズラと合流する。
使えそうな忍具は全て頂き、抵抗しないようにパンツ一丁の状態で地面に埋める。
中々外道とは思うが、命があるだけ感謝して欲しい。
服を探すと内ポケットの中に発見した。
赤い宝石か……これで次は青い宝石を集めればいいんだな。

「取りあえず此処から離れよう。さっきの起爆札の音で近くに居る忍びに気付かれたと思うし。他の忍びが近づいてきたら教えてくれ」
「分かった」

また、ミズラを頭の上に乗せて木々を飛び移り始める。
幸先良く宝石を入手できた。
この調子でいければいいのだが。
とりあえず、塔に向かおうかな。

その後、塔に向かう最中に休んでいる忍びを見つける。
先程と同じ様に奇襲を掛けて武装解除した。
生憎、緑色の宝石だったが、交渉かなんかに使えるか。
襲った忍びは確りと気絶させ、土の中に埋めておく。

「よし、周りに忍びはいないかな？」
「いるが、此方には近づいていないな」

ミズラの言葉を聞き、移動を開始する。
出来る限り塔に近い所で休みたい。

「少し止まれ！　この辺は血の匂いが充満しているな。戦闘があったみたいだ」

戦闘か……もう始まっているのか。
同じレベルの忍びが普通に戦ったらこうなるよな。
忍びならやはり奇襲するか罠に嵌めて自分に有利な状況を作ってから攻撃をしないといけないと思う。
卑怯だとか言われるかもしれないが、忍び同士の戦いは本来こういうものだ。
正直、敵に姿を見せてから戦うなんて忍びとしてどうかと思う。
まぁ、この世界の忍びは全然忍んでなかったりするけど。

「取りあえず迂回しよう。出来る限りリスクは避けておきたい」
「分かった。じゃあ……西側から回り込め」

ミズラの言葉に従いに西側から回り込み戦場を迂回する。
二日目に突入したし、こういう状況は多くなってくるはず。
とりあえず、昼間は体力を温存しなければならない。
塔も目と鼻の先だし、そろそろ宝石を集めた奴らが来るかもしれない。

「此処の近くには誰もいないよな？」
「おう、いないぜ」
「それじゃあ、土の中で休みつつ待機。此処に近づくものがいたら奇襲を掛ける」

ミズラと共に地面に潜る。
宝石は出来る限り集めておきたい。
そうしておけば、若しもの時の交渉に使えるかもしれないし。
とりあえず、今は休みつつ待機だな……

第二十話

休みつつ待っていたが誰も通らなかった。
もう、時間も夜だ。
まぁ、チャクラも回復できたから別にいいんだけど。
時間は……夜か。
青の宝石を奪える確率が高いのは……
そう考えていると、近くから爆音が聞こえる。
これは……

「どうやら、近くで交戦している忍び達がいるらしい」
「よし……見つからないように近づいて、どちらかが勝った瞬間に奇襲を仕掛けよう」

ミズラにそういうと、ゆっくりと交戦状態の忍の所に移動した。

交戦している忍びの近くまでやって来た。
現在は土中から観察している。
因みにミズラは帰した。
戦闘では役に立たないし。

「これでもくらえ！」
「風遁・烈風掌！」

現在交戦しているのは、砂隠れの忍と木の葉隠れの忍び。
木の葉の忍の風魔手裏剣を砂の忍びは突風で弾く。

どうやら、砂の忍びは性質変化を使えるらしい。
木の葉の忍びも動きはいいが決めてが無い。
下忍が性質変化を覚えているのは少ないからな。
徐々に木の葉の忍びが追い込まれている。
しかし、この二人の体捌は上手い。
この二人なら宝石を持っていないということはないだろう。

「風遁・風砂塵」
「し、視界が！」

遂には風で吹かれた砂塵で視界を失い、致命的な隙を相手に与えてしまう。

「風遁・烈風掌！」

先程の強烈な突風を無抵抗で受け、吹き飛ばされ木に後頭部を強打する。
あれは、失神しただろう。
砂の忍びは厳戒態勢はといていない。
確かに、相手を倒したとしても、周りに忍びがうろついているかも知れない状況だ。
警戒しすぎて不思議じゃない。
しかし、相手は俺の隠れている土の中を見ている気がする。

「出て来きなよ。そこにいるのは分かっているからさ」

砂の忍びが俺の土中の上にクナイを投げつけてきた。
どうやら、相手は何らかの理由で俺の居場所を知る事ができたらしい。
土の中から逃げてもチャクラが切れたらまずいし、此処は戦闘覚

悟で出るか。
俺はクナイを手に持ち土の中から飛び出す。

「どうして分かった？」
「そんな理由を忍びがほいほい話すと思うかい？」

確かにその通りである。
顔をよく見るとどうやら女らしい。
彼女もクナイを構えている。

「さて、どうする？　このまま俺と戦うか？」
「いや……さっきの戦闘で体力とチャクラを消費しすぎたかな。正直、此処で君と戦うのは得策じゃない。だから、交渉したい」

交渉か……

「俺がそれに応じるとでも？　応じずとも今此処で戦いお前から宝石を奪えば良い」
「此処でアタシと戦う事は、そこまで君にメリットがあるかな？話しぐらいは聞いて欲しいな」

先程の戦闘から見て、勝てない相手じゃない。
しかし、そこまで簡単に勝たせてくれる相手でもなさそうだ。
正直、彼女を狙うぐらいなら他の者に奇襲を掛けたほうが良い。

「分かった。交渉に応じてもいい」
「よし、それじゃあね……」

クナイを構えながら説明を聞く。
そこまで簡単に信用は出来ない。

相手もそれはわかっているようで何も言わない。

「アタシが今持ってる宝石は青と赤。一つダブリがある。君は？」
「俺が持っているのは赤と緑。同じく一つのダブリがある」
「私は緑が欲しい。君は青が欲しい」

青を持っているのか。

「それでは提案だ。お互いダブリがあるようだし、それを交換しよう。それで駄目なら、木の葉の忍びの宝石を上げてもいい」
「それで、もし青い宝石が出なかったらどうする？　もしかしたら、交渉を破るかもしれないよ？」
「いいや、君はそんな事はしないと思う」
「根拠は？」
「勘かな？」

なんというか、やりづらい。

「分かった。その交渉を呑む」
「じゃあ、ダブってる宝石を取り出そう」

そういって緑の宝石を取り出す。
彼女は赤色の宝石を取り出した。

「アタシのは当たりだったみたいだね。君には木の葉の忍びをあげるよ。じゃあ、近くの木の下に置いて。私は木の葉の忍びの木の下に置くから」

彼女の言葉通り俺は近くの木の下に緑の宝石を取り出す。
彼女も木の葉の忍びの体を縛って動けないようにした後、赤い宝

石を忍びの頭の腕においた。
その後、一定の距離を取りつつ場所を入れ替える。

「うん、確かに。それじゃあ」

そういうと彼女は飛び去っていった。
直ぐに木の葉の忍びの宝石を確認する。
持っていたのは青い宝石と緑色の宝石。
これで、三つ集った。
これを塔まで持っていけば合格か。

その時、俺に向かってクナイが飛んでくる。
そのクナイを先程持っていたクナイで叩き落す。
直ぐに飛んできた方向を見るも相手の姿はない。
複数人の気配を感じる。囲まれたようだ。
そう簡単に合格をさせてくれるほど、二次試験は甘くないようだ。

第二十一話

すぐさま移動したいが、囲まれてるこの状況だと難しい。
今も四方八方から飛んでくるクナイや手裏剣を避けている状況だ。
この状況で印を結ぶのは難しい。
クナイにもし、毒が塗られている事を考えると回避をおろそかに出来ない。
取りあえず分かっているのは、このままではジリ貧だということだ。

しかし、こういうときに使える優秀な忍具を俺は持っている。
俺はウェストポーチから光玉を取り出す。
この閃光弾は現実で言うスタングレネード(フラッシュバン)と呼ばれる物だ。
使用する事で強烈な閃光を発生させ、人間の視覚を一時的に麻痺させることが可能だ。
現実では爆音も響かせるが、流石にそれは無理らしい。
所が、余り利用する忍びはいない。
何故なら小隊を組む場合、上手く連携をしないと味方の視界を奪いかねないからだ。
俺は閃光弾を地面に投げつける。
そして、目をつぶり土遁・土中映魚の術の印を結び、地面に潜る。

「ちっ、探せ！　何処かに隠れているはずだ」

俺が居なくなったのを見て、二人の忍びが姿を現す。
どうやら相手は俺が地面に潜った事は分からないらしい。
なら、此方から攻めてやる。
背後から飛び出し、一人を蹴り飛ばし、もう一人を殴り飛ばす。
二人は受身を取り態勢を立て直す。

今度は、雨隠れの忍び。

「こいつ、土遁の術が使えるぞ。気をつけろ！」

「分かった！」

一人が俺に印を結ばせないように接近戦。

もう一人は、動き回りながらクナイを投擲してくる。

一度距離を取り、一呼吸置く。

相手の忍びの連携は様になっている。

おそらく、同じ班なのだろう。

しかし、二人ともまだまだチャクラをコントロール仕切れてないようだ。

相手は俺に忍術を使わせないために近づいてきている。

これなら――

チャクラを一気に練り上げ、足に集中させ地面を蹴る。

先程とは比べ物にならないほどの速さで近づき、顔面をぶん殴る。

殴られた忍びは、下手にスピードがあったのが逆にムスビの拳の威力を高めてしまった。

簡単には起きないだろう。

「後は……お前一人だ」

「舐めるなよ！　お前を倒して俺達がこの試験を突破してやる！」

仲間を見捨てないか……

男は巻物から二つの大型の手裏剣のようなものを取り出す。

風魔手裏剣よりも大きいが形は丸く、厚みがある。

あれでは、敵に傷を負わせることはできない。

「くらえ！」

そういって二つ同時に投擲される。
しかし、速さはない。
それに、この距離なら普通の速度でも簡単にかわせる。
一体何を考えている？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「手裏剣乱舞！」

大型の手裏剣収納具が開き、その中から大量の手裏剣が相手を襲う。
範囲は狭い。
だが、これはブラフだ。

「土遁・土流壁！」

土の壁が手裏剣を全て防ぐ。
やはりそういう術を使ってきたか。
相手は俺を一瞬見失ったはずだ。
今の間に木の上に移動しつつ、口寄せの巻物から手裏剣収納具をとりだす。
正直、相手がアイツを殴り飛ばしてくれてよかった。
そのお陰でアイツが手裏剣の範囲に居ないのだから。

アイツは俺を見つけたようだ。
だが、既に遅い。
俺は下に向かって手裏剣収納具を投げつける。

一個や二個ではなく、数十個近く投げつける。
これなら逃げ場は無く、印を結んで土の中に逃げる時間はない！

「俺の勝ちだ！」

俺は勝利を確信した。
アイツには無数の手裏剣が突き刺さ――

「誰の勝ちだって？」

その声が聞こえた瞬間、左頬に強烈な痛みを感じ、俺は木から落ちた。
幸い手裏剣が落ちていない所に落ちたが、全身が痛い。

「どう……して」
「一度目を囮にして二度目を繋げたのは見事だった。でも、功を急ぎすぎて俺の動きが見えてなかった……」

確かにその時は土の壁でアイツは見えず、その後も移動で切羽詰っていた為そこまで確り確認しては居なかった。
まさか……その時に何らかの術を使って。

「分かったみたいだね。それじゃあ、お休み」

そして、俺の意識は闇に落ちていった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

正直、かなり危なかった。
今が夜でなく、相手が此方の姿をしっかり確認していたらやられたのは俺だったかもしれない。
やったのは単純だ。
土流壁で壁を作った後、土遁・影分身で分身体を作り、俺は土の中に身を隠した。
土流壁は水陣壁と違い、前方が確認できないという欠点がある。
しかし、それは相手にも自分が何をやっているのかがわからないということである。

「とりあえず、此処は危ないな」

俺は気絶している二人を担いでこの場を離れた。
そのまま、捨てておけばよかったのかもしれないが、何故か出来なかった。
何故かといわれると上手く答える事はできない。
戦闘中の発言や気構えを評価したのかもしれない。
彼らを安全な場所に運んだ後、俺はその場を後にした。
宝石を奪っても良かったが、余分に奪って敵を減らそう何て考えは起きなかった。

第二十二話

俺は全神経を集中して塔に向かっていた。
ミズラを呼び出せればこんな事をしなくても良かったかもしれない。
何回も使って分かった事だが、口寄せの術はチャクラを大幅に使う。
先程、土遁・土流壁、土遁・影分身、土遁・土中映魚の術を連続で使ってしまったため、チャクラを大幅に使ってしまったのだ。
その為、口寄せの術が使えない状況になっている。
兵糧丸を使ってチャクラを底上げすれば使えるかもしれないが、それでもしも何かのイレギュラーがあったら……
間違いなく負ける。
そうなれば、俺は死ぬ可能性がある。
それだけは避けなければならない。

土遁で土の中に潜ればいいのかもしれないが、少々怖い。
さっき会った少女のように、何らかの方法で気付かれるかも知れないからだ。
今まではそんな事考えもしなかったが、二度あることは三度あるとも言うしな。

「またトラップか……」

また、トラップを発見した。
これで三度目である。
トラップを発見した場所は迂回しなければならない。
正面から行くと高確率で戦闘になってしまう。
それ以外にも野生生物を見つけても迂回しないといけない。

今、襲われて余計な体力を使いたくないからだ。

もう時刻は三日目の朝になった。
そろそろ合格者も出てくるだろうし、待ち伏せも増えてきている。
その時、遠くの方で音が聞こえる。
誰かがトラップに引っ掛かったようだ。
俺も注意しないとな。

「よ、ようやく着いた……」

夕方になる頃に俺はようやく塔にたどり着いた。
腹が減ったので兵糧丸を食べたが、あんまり美味しくなかった。
まぁ、栄養価の高い物は大体そうだけど。
おっと、そんな事気にしてる場合じゃないな。

「誰も居ないな……ん？　巻物」

塔の中には誰も居ないが、奥の机にポツンと巻物がおいてある。
口寄せの巻物か？
俺はそれを開けながら地面に投げた。
巻物は濛々と煙が立ち込め見えなくなる。
煙が治まった頃には、見慣れた人物がいた。
それは、アカデミーで俺の担任をしていた先生だった。

「せ、先生？　どうして此処に」
「お、ムスビか久しぶりだな。宝石は集めたのか？」

俺が宝石を取り出すと先生は微笑んだ。

「この二次試験の最後は俺達中忍が受験生を迎える事になってるんだ。偶々その巻物が俺だったってわけだ」

偶々か……イルカ先生は火影に直々にお願いしたのにな。

先生は腕の時計を確認する。

「二日残して合格か。ムスビ、お前は二次試験合格だ！」

「ありがとうございます！」

その言葉に俺の中から嬉しさがこみ上げ、自然と笑顔になった。

先生もそれを見て笑ってくれている。

これで、本試験出場か。

「もう一つ伝えなければならない事がある。あの壁を見てくれ」

先生が指さす場所には壁に文字が書かれていた。

虫食いがあってよくわからない状態になっている。

「これは火影様が記した『中忍』の心得だ。心して聞くように」

「わかりました」

先生は、話し始める。

「『天無くば智を識り機に備え』、これは己の弱点が頭脳にあるのなら……『様々な理を学び、任務に備えなさい』という事を意味する。まぁ、お前なら大丈夫だろう」

アカデミーでの座学の成績はそれなりに良かった。
今は、机に向かう事なんて殆どないけどな。
それなら外で修行する方がいい。

「次に、、『地無くば野を駆け利を求めん』、己の弱点が体力にあるのなら……『日々鍛錬を怠らないようにしなければなりませんよ』という事を意味する。これも大丈夫だろう」

コンブほどではないが下忍の方では体力もあるほうだと思う。

「そして、その両方を兼ね備えれば、どんな危険に満ちた任務でも正道……覇道とも言える安全な任務にも成り得る……と言うことだ。わかったか？」
「わかりました！」

流石は火影様が考えた言葉だ。
素晴らしい言葉だと思う。

「そして、文字が入っていない所には、中忍を意味する文字……『人』が入る」

此処で、先生は一呼吸を入れる。

「中忍とは部隊長クラス……チームを導く義務を持つ。任務における知識の重要性、体力の必要性を心得よ。この中忍心得を決して忘れず、次の段階に進んで欲しい。俺からは以上だ」
「はい！」

その後、俺は別室に案内された。
そこには、既に何人か合格者がいたが、知り合いも居なかったの

で無視して塔に設置されている食堂に向かった。
と言うか、木の葉で知り合いってそんなにいない気がする。
余り美味しくないが、食事にありつけただけでもよしとしよう。

「この席空いてるかな？」
「どうぞ……あ」

食事をしている俺に近づいてきたのは、昨夜に出会った少女。

「まずは、二次試験突破おめでとうと言っておこうかな」
「そっちこそ、二次試験突破おめでとう」
「ありがとう」

掴みどころが無いな……

「アタシの名前はラン。砂隠れの忍び、君は？」
「海苔巻ムスビ。木の葉隠れの忍びだ」

どうしてこんなに俺に話しかけて来るのだろうか？
良くわからないな……

「そういえば、あの後二人の忍びに襲われたと思うけど大丈夫だった？」

どうしてその事を知っているんだ？

「そんな怖い顔しないでよ。別にアタシがけしかけた訳じゃないよ」

この言葉は多分本当だろう。
このランと名乗る少女は恐らく感知タイプで、何らかの方法で二

人の忍びが近づいているのに気付いたのだろう。
どのような方法かはまだ分からないが……
とりあえず、今は食事に集中しよう。

第二十三話

その後、ランと言う少女と話して食事を終えた。
依然として、何故俺に近づいてくるのかが分からない。
食事を終えたのに着いてきてるし。

「君の知り合いの所に行かなくていいの？」
「まだ、誰も合格してないんだよね～」

合格しているのは、草隠れの侍のような忍び、雨隠れの忍び、そして俺にランという少女。
確かに、砂隠れの忍びは居ないな。
なら、何で俺に構うんだろうか。

「他の忍びと親交を深めないでいいのか？」
「一応やったんだけど……」

邪険にされたわけね。
それも仕方無いと思う。

「まぁ、それが普通の反応だよな」
「それって、自分の事を普通じゃないっていってるようなものだよね」

あ、そういう事になるのか。

「そんな事はどうでもいいとして、何で俺が二人の忍びと戦ったって知ってるんだ？」
「ん～……内緒かな～」

流石に教えてはくれないようだ。
原作だと、説明してくれるのに……

「そうか。分かった」
「あれ？　あんまり追求しないんだね」
「内緒って言われたしな。そこまでして聞かないよ」

本選は正面からの戦いだしな。
それに、彼女に対しては隠れても無駄って事が分かったしな。
今はそれでよしとしよう。

「所で、その値踏みするような目は止めた方がいいと思う」
「あれ？　気付いてたの？」
「俺と話しているのも情報を集めるためだろ？　皆ピリピリしてるんだし、そういう事は止めたほうがいいと思う」

そんな目で見てたら、此処まで突破してる者なら気付く。
それでも、俺が対応していたのは、俺が異質だからと思う。
ランという少女はペロッと舌を出した……コイツ。
思わず睨んでしまった。

「ごめん、ごめん。もうやらないから、そんな怒った目で見ないでよ」
「分かった。じゃあ、俺はもう寝る」
「ええ！　もうちょっと話そうよ～」
「今日は早朝からずっと神経尖らせてたんだ。少し眠らせてくれ」

寝れる時に寝ないとな。
俺は壁に凭れて目を閉じた。

「ムスビ、起きろ……」

目を覚ますと、俺の視線の先にはコンブがいた。

「あ……コンブ！　二次試験突破したのか！」

俺がそう言うと、コンブはピースサインで返した。

服が所々汚れて、ボロボロだが、大きな怪我はないようだ。

「取りあえず……おめでとう」

「ありがとう……」

コンブは口下手だがどうやら喜んでいるようだ。

「そういえば、コンブって何時到着したんだ？」

「さっき……早朝になって待ち伏せが手薄になった所を……」

まさか、トラップとか全て潜り抜けてきたのか？

ああ、だから服がボロボロなのか。

意外と無茶したんだな。

しかし、これで後はモミジだけか。

「朝になったし、朝食でも食いにいこうぜ」

「わかった」

俺はコンブを伴い食堂に向かう。

やっぱり、友達と一緒に食事を取るのは楽しい。
昨日のランという少女は唯の知り合いだしな。

「此処空いてるかな？」
「また、アンタか……」

そんな事を考えているとランと言う少女がやって来た。
どうやら、まだ知り合いはきていないらしい。
昨日みたいな値踏みするような目はしていないからいいか……
コンブはどうでも良さそうな顔をしてるし。

「別にいいかな？　コンブ」

コンブは頷いて答える。

「いいってさ」
「ありがと。アタシはラン、君は？」
「三石コンブ……」

その後はそれなりに会話して食事を終えた。
コンブは少しだけ警戒していたが、それは仕方無いだろう。

「まぁ、コンブも二次試験突破したし、後はモミジだけだな……」
「モミジって誰なの？」
「俺達の班員の一人だよ」

因みに彼女はまだ着いてきている。
何でも、一人で居るのが寂しいらしい。
最初からそういえばいいのに。

「大丈夫かな？　時間がかかればかかるほど待ち伏せやトラップの数も増えるし、忍びも逃さないように狡猾になる。そう易々と突破はできないだろうし」
「大丈夫……モミジなら」
「自信満々だね～そんなに信頼してるんだ」

コンブはモミジをかなり信頼している。
コンブとモミジは性質変化の自主修行も一緒にしてたようだしな。
班での修行も俺は一人でしてたし、俺よりコンブの方がモミジの実力を分かってるのだろう。
因みに、俺はハブにされていた訳ではなく、カツオ上忍が二人につきっきりで指導していただけだ。
カツオ上忍は土遁は使えないので、俺の指導は出来なかったのだ。

「所で、お前の知り合いはどうなんだ？　突破できそうなのか？」
「多分出来ると思うけど……運が悪いからなぁ」

運が悪い？　そのままの意味か？

「多分、倒した忍びが宝石持ってなかったり、同じ色ばっかり手に入ったりしてるんじゃないかな？」

そのままの意味だったのか。

そんな他愛もない会話をして二次試験の時間は過ぎていった。

第二十四話

時間は過ぎ、四日目の夜。
二次試験合格者は変わらず五名。

「やっぱ、明るい内には誰も来なかったか」
「見つかる可能性が高い……待ち伏せも多くなってるはず」

この時間帯で宝石を集めきっていない者は、後から来る者の宝石に希望を託すしかない。
その為、結構な人数が待ち伏せをしているだろう。

「あ、誰か来たみたいだよ」

彼女の言葉に反応して扉の方を見る。
しかし、誰も入ってこない。

「誰も来てない……」
「多分もう直ぐ来ると思うよ～」

コンブはよくわからないと言った顔をしているな。
まぁ、塔の中に誰か入ってきたんだろう。

数十分後扉が開く。
入ってきたのはモミジだった。
体には大小の傷があるが、どうやら無事みたいだ。

「あ、ムスビ、コンブ……私が一番最後か。何か悔しい……」
「おいおい、合格できて良かったじゃないか」

「本当に来た……」

軽口が叩けるぐらいには余裕があるようだ。
コンブは本当に来た事に驚いているし……まぁ、前知識が無かったら驚くか。

「取りあえず、二次試験突破おめでとう」
「おめでとう」
「おめでと～」
「ありがとう……あれ？　貴女は？」

かなり馴染んでるな……

四日目の夜はモミジと滝隠れの忍びが二次試験を突破した。
これで二次試験合格者は七名。

そして、時間は過ぎ五日目に入った。

「ん～遅いなぁ～」
「後、少ししか時間ないぞ。本当に間に合うのか？　君の仲間は」
「多分間に合うとは思うんだけど……」

時間が少ししかないのに彼女は慌てる様子も無い。
普通ならこの時間帯に来なかったら、何かあったと思うべきなんだが。

「ランちゃんの仲間って誰なの？」
「仲間というか、身内というか」
「身内？　お兄さんとか？」
「そうそう～」

モミジとは結構仲良くなったらしい。
まぁ、女の子同士だしな。

「あ、間に合った」
「へ？　誰も来てないよ？」
「まぁまぁ、後少しで来るからさ」

その言葉にモミジは疑問の表情を浮かべる。
そして、数十分後――

「間に合った！」

そう言って入ってきたのは彼女と同じ赤っぽい髪色をした男。
今の俺から見たら結構でかい。
１６０ｃｍぐらいはあるか？

「エン、待ってたよ～。遅かったね」
「まぁな……倒した相手が殆ど宝石もってなかったりしてな……ん？　こいつ等は？」
「えっと～友達かな？」

友達認定早いな……
そんな事を考えていると、時刻は三時をまわった。
合格者は八名のようだ。
まぁ、大体こんなものだろう。
その後、すぐ試験官の一人に案内され別の部屋に行く事になった。

「まずは、第二次試験通過おめでとう。これから火影様より、”第三の試験”の説明がある。心して聞くように」

移動した場所は原作と似たような闘技場。

前方の一段高くなったところには、三代目火影とそのほかの上忍・特別上忍・中忍・の人たちが立っている。

そこには、カツオ上忍もいる。

「”第三の試験”の説明を始める前に、お前達にはっきりとこの試験の真の目的について告げておきたいことがある」

あ、これは毎回言うんだな。

「何故同盟国同士が試験を合同で行うのか……”同盟国同士の友好”・”忍びのレベルを高めあう”……本当の意味を履き違えてもらうのは困る！　この試験はいわば――」

そこで三代目火影は咳えていたキセルを外し、一息ついた。

周りの皆はざわざわしている。

それも仕方無いだろう。

「同盟国の戦争の縮図なのだ」

その後は中忍選抜試験の成り立ちなどが話された。

それは、国々が互いに無駄な戦力を潰しあうのを避けるためにあえて選んだ戦いの場らしい。

しかし、この試験が中忍に値する忍びを選抜する為の者である事に否定はしないが、その一方でこの試験は国の威信を背負った各国の下忍が命がけで戦う側面も併せ持っている。

”第三の試験”には諸国の大名や著名な人物が招待客として大勢招かれ、各国の隠れ里を持つ大名や忍頭が俺達の戦いを見ることになる。

その場所で国力の差が明らかになれば依頼の減少につながり、同時に隣接各国に政治的な圧力を掛ける事もできる。

国の力は里の力であり、里の力は忍びの力、そして忍びの本当の力は命がけの戦いでしか培われない。

大体はこういう事である。

原作と違い余り横槍が入らなかったので更に長かったが……

「それでは”第三の試験”する……その前に」

「このクジをひいてくれ」

下忍たちの前に第二の試験の担当官である、並足ライドウが進み出てきて、手に持った箱からクジをひかせる。

俺は何があるか知っているが、他の皆は不思議そうに引いていった。

そして、全員がクジをライドウにわたす。

「では……アオバ組み合わせを前へ」

「はっ！」

第一の試験官である山城アオバが組み合わせを前に書いていく。

俺は一戦目で相手は草隠れの侍のような格好をしている忍び。

二戦目はモミジとラン。

三戦目はコンブと雨隠れの忍び

四戦目はエンというランの兄と滝隠れの忍びとなった。

「試験は勝ち上がり形式のトーナメント。勝てば中忍としてのアピールの機会が増え、もし負けても資質が認められれば中忍になる事

もありうる。試験は今から一ヵ月後、中忍試験本選会場で行われる。他に質問があるものは？」

特に声は上がらない。

「では、それぞれ対策を練るなり、休むなり、自由にするがよい。これで解散とする！」

一ヶ月か……この期間を有効に使わないとな。

第二十五話

試験が終わった翌日。
一ヵ月後の三次試験に向けての修行をする為に演習場に向かっていた。
コンブとモミジはカツオ上忍と修行。
どうやら、忍術を磨くらしい。
俺も誘われたが、断った。
流石に三人を相手にするのは効率が悪いしな。

「確かこの演習場で……いたいた」

俺の視線の先に居たのは、全身緑色のタイツの様な修行着を来た二人組み――ガイ上忍とリーだ。
お互い腕立て伏せをしている。
朝から元気そうだ。

「おはようございます。今日は宜しくお願いします」
「おお、ムスビ君早いじゃないか！　やる気満々のようだな！」
「今日は一緒に頑張りましょう！」

いや、貴方達の方が早いです。
これでも待ち合わせ時間の一時間前に来てるのに……
今日は、カツオ上忍に頼み、ガイ班の演習に参加させてもらったのだ。
ガイ上忍は二つ返事で了承してくれたらしい。
この一ヶ月は体術の修行を重点的に行うつもりだ。
忍術は一ヶ月で自分の物にするのは少々リスクが高い。
覚えられなかったりした時の事を考えると、自分の地力を上げた

方が良いと判断した。

「今日は君が三次試験に進んだお祝いとしていい物を持ってきたぞ！」

何かくれるんだろうか？

そういって、ガイ上忍が取り出したのは――重り。

少し前に見たのよりも一回りほど大きい重り。

「バランスが悪くならないように腕にもパワーリストを用意したぞ！」

「あ、ありがとうございます」

つけていた重りを外し、新しい重りをつける。

その後パワーリストもつける。

体が重い……一体何キロなんだ？

「ふむ……どうやら毎日しっかりつけていたようだな」

俺の着けていた重りはボロボロになっていた。

いい換え時だったかもしれない。

その後、ネジ、テンテンという順番で演習場にやって来た。

「先生ー今日は何やるんですか？」

「そうだな……ムスビ君というタイプの違う忍びもいる訳だし、実力を図る意味も兼ねて組み手をしてもらおう」

「はい！　はーい！　僕がやりたいです！　ガイ先生！」

「落ち着け、リー！　ムスビ君には全員を相手にしてもらうつもりだ。いいかな？　ムスビ君」

「構いませんが……」

これは断れる雰囲気ではないな……
重りにまだ体が慣れてないが、大丈夫か？
まぁ、色々な忍びと戦えるのは良いことだけど。
順番はリー、テンテン、ネジと言う順番になった。
テンテンとは普通に挨拶出来たが、ネジは何か嫌な目で見られた。

「宜しくお願いします！」
「お願いします！」

体術じゃ敵わないだろうが、敢えて体術で対抗してみよう。
体術を重点的に鍛えたいし、忍術使って逃げたら修行にならない。

「それでは……はじめ！」

ガイ上忍の宣言で勝負が始まる。
リーは動き回る。
動き回って的を絞らせない戦法だろうか？
確かに速いが、目で追えない程ではない。
前方からは来ないだろうし、左右と、後方に気を配る。

「そこっ！」

背後からの肘打ちをしゃがんで避けて、足払いでリーの態勢を崩す。
リーは両手で受身を取ると、両足を俺に突き上げる。
それを受け止めると、そのまま投げ飛ばす。
しかし、普通に空中で受身を取られた。
リーはかなり余裕そうだ……俺は一杯一杯なんだけど。
その後、体術のみで頑張ったものの、最後は蹴り倒された。

体術だけでリーに勝つのは無理か……

「やっぱりムスビは凄いです！」
「勝った奴が言う台詞かよ……」
「そういうわけでは……」
「冗談だよ。冗談」

リーが差し出した手を取って立ち上がる。
リーの体術は今の時点でも体術なら中忍超えてる気がする。

「次はテンテンだが……いけるか？」
「大丈夫です」

テンテンか……忍具を使ってくるんだろうなぁ。
テンテンとある程度距離をとって向かい合う。

「それじゃあ、いくわよ！」
「お手柔らかに頼むよ……」

チャクラを全て足に集める。
忍具使いに時間を与える必要は無い。
先手必勝で行くしかない。

「それでは……はじめ！」

その声が響いた瞬間にテンテンの懐に飛び込み、足刀蹴りを繰り出す。
テンテンはガードしたものの、威力は殺しきれなかった様で後方に吹き飛ぶ。
しかし、吹き飛びつつも携帯していた巻物からクナイや手裏剣を

口寄せし、投擲してくる。
幸いそんなに数は多くない。
ホルスターからクナイを取り出して全部弾く。
そんな事している間にテンテンは巻物から忍具を口寄せし終えている。
トンファー、棒、トゲ突きの金棒、鉄球……本当に忍具か？

「いっくわよーっ！」

そこから投擲される忍具の数々。
足にチャクラを集めて逃げ続ける。
数十分逃げ続けても投擲が終わらず、最後は逃げ場がなくなった所で俺がギブアップした。
その後、結構な時間を忍具集めに費やした。

「あはは……ごめんねー」
「別にいいよ」

これで、二戦二敗か……
やはり、体術だけで挑むのは無謀か。
最後はネジだが……柔拳くらったらお仕舞いだしなぁ。
点穴突かれたら、普通はチャクラ練れなくなるからな。
そんな事を考えつつネジと向き合う。

「白眼！」
「白眼使うのかよ……」

こいつ……本気で来てるな。
構えは日向流の独特なものだ。

「それでは……はじめ！」

しかし、それでも接近戦で挑む。

確か、手の先や掌からチャクラを放出してそれで経絡系や点穴を攻撃するんだったな。

「はっ！」

ネジの掌打を受け流す。

受け流す事に集中すれば、攻撃はくらわないが、此方から攻撃が出来ない。

今回も数十分ぐらいは避けることが出来たが、埒があかない。

これは、攻撃を受ける覚悟で行くしかない……

「おらっ！」

俺の気合いを入れてはなった右拳がネジの腹を捉えたものの、ネジの拳底が俺の鳩尾を捉えた。

普通に殴られるよりも痛みが凄い。

内蔵を攻撃される感覚ってこういうのか……

結局、三戦三敗という散々な結果に終わってしまった。

第二十六話

ガイ班に混ざり修行を開始して数時間。
やはり、体を鍛える為の修行が多い。
具体的には崖登りの業とか逆立ちで山登りとかミット打ちとか。
現在は、最後のしめとして軽い組み手を行っている。
俺はリーと組んでやっている。

「木ノ葉旋風！」

上段蹴りと下段蹴りを腕と足で受け止める。
ガードしても腕と足がかなり痺れるな……
よし、なら俺も！

「木ノ葉旋ぷ――うぶっ！」

木ノ葉旋風は、左足で上段を蹴り、その回転力を生かし右足で下段を蹴る技。
見ると簡単に出来そうだが、実際にはバランスがとても難しい。
バランスが取れずに地面に落ちてしまった。

「大丈夫ですか？　ムスビ」
「ああ……案外難しいんだな」
「確かに慣れてないとバランスを取りにくいですからね。僕も最初はよく失敗しましたよ」

何回も何回も繰り返して完璧に扱えるようになったんだろうなぁ……

本当に、リーの勤勉さには頭が下がるよ。

俺も結構修行をしていると思うけど、その密度はリーに敵うとは思わない。

「よし！　今日はそこまでだ！」

ガイ上忍の言葉により今日の修行は終わった。
リー以外の二人は結構疲れてるみたいだな。
一番疲れてるのは俺だろうけど……

一日リー達と修行して分かった事がある。
それは、俺の体術は下忍の中でも並より上程度という事だ。
まぁ、体術だけなら中忍レベルに達している彼らと互角程度に戦えるからもう少し上かもしれないが……
俺の戦い方はやはり、忍術主体になるだろう。
中でも、土の中からの奇襲や土や砂を用いて相手の動きを制限するような戦い方になると思う。
卑怯かも知れないが、忍者は普通そういうものだと思う……多分。
それを生かす為にも、もう少し体術のレベルを上げなければいけない。
そこまで体術の修行をサボっていたわけじゃないんだけど……やはり、体術を集中的に伸ばしていた彼らには敵わない。
ガイ上忍は何時も同じ演習場で演習をしているので、何時でも来ても良いと言われた。
本当に良い人である。
まぁ、明日は情報収集があるのでこれないけれど。

翌日、俺は対戦相手が何処にいるか情報収集を始めた。
一回戦の相手は草隠れの忍び……侍のような格好をしているから

直ぐ見つかると思う。
数十分ぐらい聞き込みをしていると、有益な情報が得られた。
何でも、近くの森に向かったらしい。
まぁ、他里の忍びだから演習場を勝手に使えないのかもしれない。
俺はその森に向かった。

「何だ……木に亀裂が……」

やって来た森には所々の木に斬られたような後がついていた。
草隠れの忍びにやられたのか？
もう少し進んでいくと、開けた場所に出る。
そこに草隠れの忍びを発見した。
服装は変わらず侍のような感じで、刀を持っている。
俺は土遁で土の中に潜り、気配を消して潜んだ。
相手は集中しているようで俺には気付く様子はない。
ランみたいに感知タイプではないようだな。
まぁ、そう何人もいても困るんだけど。

「はっ！」

刀を縦に振りおろす。
すると、扇状の斬撃が飛んだ……流石は、『ＮＡＲＵＴＯ』の世界だ、何でもありである。
飛んだ扇状の斬撃は木に命中し、木に大きな亀裂がはいった。
凄い切れ味だな。

「ふむ……まだまだだな」

アレで、満足してないのかよ。
人間なら簡単に真っ二つになるぞ。

俺の推測だが、アレは多分チャクラを風に性質変化し扇状に形態変化し飛ばしているんだろう。
風の性質変化はあらゆるものを斬り裂き断ち切る。
そして、特殊な忍具や術に作用しやすいという特性を持っているしな。
分かった事は、相手は近距離・中距離・遠距離と全てに対応できるという事だ。
厄介な事この上ない。
中々のスピードだし、やっぱり体術を鍛えて相手の攻撃を避けれるようにならないとな。
後は新しい忍具も欲しい、刀相手にクナイは心もとない。
チャクラ刀みたいな長すぎず、クナイよりも頑丈な武器が良い。
とりあえずそういうのは後で考えるとして、前みたいにばれる前に此処から離れよう。
俺はばれない所まで土の中を移動した後、土から抜け出てその場を後にして、街に戻ることにした。
出来る事なら他の受験者の情報も得たいが……
ランは感知系のようだから迂闊に近づいたらばれる。
エンというランの兄も似たような能力を持ってる可能性がある。
それに、俺が当たる可能性があるのは二回戦目からだし、第一試合を見ればいいか。

「あ、ムスビじゃない。奇遇だね～何してるの？」
「あっ……」
「あっ！　今嫌そうな顔した！」
「してないしてない」

そんな事を考えていたせいか、暇そうなランと出会ってしまった。

第二十六話（後書き）

一ヶ月ほど時間が経ちましたが更新いたしました。
これからも不定期に投稿になります。
ご了承ください。

第二十七話

「一人なのか？　ランの兄さんは？」
「エンは修行してるって～私は木の葉の見物。ムスビは？」
「気分転換かな……」
「ホントかな～」

バカ正直に情報収集していたとは言わない。
何か俺の考えを見透かされているような感じがする。
俺が先に行こうとすると、後ろから着いて来る。
俺が走ると、走って着いて来る。
一体どうしろと言うんだ。

「何で着いて来るんだ？」
「木の葉を案内してよ」

正直、かなり面倒くさいが、嫌と言ってもついてきそうだな。
仕方無い……運が悪いという事であきらめるか。
このまま修行場まで連れて行ってもガイ班に迷惑だろうし。

「分かった。着いて来てもいい」
「やった～やっぱ言ってみるもんだね～」

何処に行くか……木の葉茶通りでいいか。
あの通りは茶屋・甘味処が並ぶ所だ。
中でも、甘栗甘は他里の忍びにも人気だし、丁度割引券もあるし。
俺は、行く所を決めると歩き出した。

「これ、おいし～」
「どれだけ食べる気だ……」

今は甘栗甘でダンゴを食べている。
殆ど食べているのはランだけど。
俺は項垂れながらランが食べる様子を眺める。
女ってどうしてこんなに食べれるんだ？

「食べ過ぎると、昼食が食べれないぞ……」
「甘い物は別腹だから大丈夫～」

そんなに食べてお金は大丈夫だろうか……
その後も、数十分ぐらい食べ続け――

「ふぅ～ご馳走様～」

言葉も出ない。
お皿が山盛りに積まれている。
最低でも２０００両は食べたな。
因みに、この世界の一両は前世の十円である。
だから、二万円程度食べた事になる。
ダンゴだけで二万……すごいな。
俺は店員に割引券と２０００両をだす。
何両かお釣りが戻ってくるが……少ないな。
任務で稼いだお金が一気に飛んだ……

「え？　いいの？」
「まぁ……女の子に払わせるのは悪いしな」

女性には優しくしろって父さんに言われてるしな。
しかし、この出費痛い。
忍具を買えそうにないな。

「ええっと……ありがとう」

何か戸惑っている様子だ。
人にこうゆう事された事がないのか？
砂隠れは貧乏かもしれないから仕方無いと思うけど。

「持ち帰りも出来るから、気に入ったのなら木の葉から帰るときにでも持ち帰ればいいと思うぞ」
「そうなんだ～……また来ようかな」

次は何処に行こうか……
あ、あそこにするか。
確か入るのはタダだったし。
この時期にはあの人はいないはずだしな

「じゃあ、もう一つ観光名所に案内しよう。ついてきて」
「はいは～い」

俺は観光名所に向けて歩き出した。

「着いたぞ」
「ここは……温泉？」
「そうだ。木ノ葉温泉だ、数十ぐらいの温泉があって入るのはタダだ。タオルや石鹸も常備されてる」
「何でそんなところに……まさか――」

「砂隠れの里にはこういうの無いと思ったから連れてきたんだよ」

ランが体を抱きしめるような形をして俺に変な視線を向けてくる。
やましい事なんて全く考えてないのだが……
取りあえず、ランを無視して話しを進めるよう。

「それに、此処は忍びの保養施設も兼ねてるからな」
「へぇ～そうなんだ」
「じゃあ、そこのロビーで待ち合わせな。ゆっくり入ってくれ」
「は～い、じゃあね～」

そういうと、ランは女湯の方に歩いていく。
さて、俺も久しぶりに温泉を満喫するか。

温泉には誰もいなかった。
まぁ、時間は昼食前だし、当然ともいえる。
まずは、数十回掛け湯をする。
浴槽へ入るマナーとして、体の汚れをしっかり落とさないとな。
そして、湯船に浸かる。
かなり気持ち良い……やはり温泉はいいものだな。

「あ～極楽極楽……」

他にも、サウナとか砂風呂とか電気風呂とかあるな……
もう、この世界に何があっても驚かないけど。
何か女湯が騒がしいな……ランがいるから当然なのかもしれない。
初めて入る温泉にはしゃいでいるのだろう。
その後、三十分ぐらいゆっくりした後、湯船から出て、ロビーに向かった。
ロビーには当然のようにランはいない。

「やはり、温泉の後は牛乳が一番だな……」

温泉に入った後の牛乳は何時もより美味しく感じられるな……
コーヒー牛乳もいいけど、俺は牛乳の方が好きだ。

「おまたせ～」

少ししてランが出てくる。
かなり満足したようだ。

「それは？」
「牛乳。あそこの店員さんにお金を払えばもらえるよ」
「へぇ～買って来ようかな」

そう言って牛乳を買って来るラン。
そして牛乳を一気に飲む。

「ぷはぁ……これ美味しいね！」
「それは結構な事だけど……口の周り」

ランの口の周りには牛乳の泡のようなものがついていた。
それを指摘するとランは慌てて口の周りを拭う。

「そろそろ昼食に良い時間だな。一楽でラーメンでも食べにいくか」
「一楽？　ラーメン？」

どうやら、ランは一楽はおろか、ラーメンも知らないらしい。
砂隠れではラーメンとか売ってないのか？

「まぁ、行ってみてのお楽しみって事で」

この時間帯から一楽に向かえば、待つ事も無さそうだし。
背後でギャアギャア言ってるランをスルーして、俺は一楽に向けて歩き始めた。

「味噌ラーメン？　塩ラーメン？　ラーメンってこんなにも種類があるの？」
「まぁね。一楽のお勧めは豚骨ラーメンだよ。中々癖になる味でね。あ、豚骨一つお願いします」

一楽は俺の予想通り待つ事無く中に入る事ができた。
ランはメニューを見てウンウン唸っている。
初めて食べる食べ物だから悩んでいるようだ。
結局ランは俺と同じ、お勧めの豚骨を選んだ。

「これがラーメン……」
「まずは、スープから飲んでみて」

緊張している様子のランにレンゲを手渡す。
ランはおそるおそるスープを掬い、口に運び――

「美味しい！」

そう叫んだ。
そして、凄い勢いで食べ進めていく。
口にあったようでよかった。

おっと、俺も食べ始めないとな。
その後、俺達は無言で食べ進めた。

「ご馳走様でした」
「ご馳走様～」

そういって、テウチさんに豚骨ラーメン二つ分のお金を渡した。
一楽は懐に優しいのも売りの一つだな。
とりあえず、長居するのも悪いので一楽を出る。
もう十分木の葉隠れを案内しただろう。

「もう十分木の葉を案内したし、俺はこの辺で帰るよ」
「うん、分かった。今日はありがとう」

満足したみたいだな。

「んじゃ、次に会うときは本選会場だな」

今日みたいなことが無い限りな。

「そうだね。それじゃあ、またね」

そういうとランは風のように去っていった。

第二十八話

ガイ班との演習に混ざってから早十日。
現在は一時間耐久腕立て伏せをしている。
唯の腕立て伏せではなく、体全体に重りをつけて行うという、ガイ上忍らしい修練である。
一つだけルールがある。
それは、昨日より一回でも多く腕立て伏せをするという事でだ。

「九百九十九！　千！」
「九百八十一、九百八十二」
「九百五十五……九百五十六」

リーが千回をやり遂げ、ネジもそれに追随するスピードで腕立て伏せをこなしていく。
テンテンも二人には敵わないものの、着いていっている。
そして、俺はと言うと――

「八百七十九……八百八十！」
「ハッハッハ！　どうしたムスビ君！」

まだ、九百回に達していなかった。
これでもだいぶ着いていけるようになったほうだったりする。
しかし、何故俺だけ上にガイ上忍を乗せた状態で、腕立て伏せをさせられているのだろうか？
まぁ、俺はこの中で体術の修練時間が一番短いからそれを補う為かもしれない。
でも、何で俺の上でガイ上忍も親指だけを使った腕立て伏せをしているのだろうか？

その後、何とか昨日よりも多く腕立て伏せをする事が出来た。
腕が棒のようだ……
ネジとテンテンも疲れている中、リーとガイ上忍はまだ腕立て伏せをしている。
一体何処から元気が出てくるのだろうか。

「よしっ！　それでは、これから実践形式の修行に移る！」

実戦形式の修行か。
これはその名の通り、実践形式の組み手である。
何回かやってるけど、全然一本取れないんだよな～
仕方のない事だけど。

「そうだムスビ君。君は何時も忍術を使わずに戦っているが……今日は使ってみてくれないか？」
「え？　どうしてですか？」
「一つは現時点の君の実力を見極めたい事。もう一つは、カツオの教え子と俺の教え子のどちらが上か興味があるからだ」

多分、最後の方が本当の理由だろうな。
でも、お世話になってるし断るのは悪い。
それに、二次試験で全然新術使わなかったからな。
やっぱり、ああいう時は使い慣れた術の方が使ってしまう傾向にあるしな。
それに、此処なら他の受験者も来ないだろうし、情報漏洩の心配もない。

「分かりました。構いませんよ」
「よし、なら組み合わせは――」

「ハイハイ！　ガイ先生！　僕がやりたいです！」

リーが手を挙げて自己主張している。

まぁ、こうなるとは半分予想してたけど。

「まぁ、待てリー。お前は昨日一番最初にムスビ君と戦っただろう。順番から行くとムスビ君の相手は……テンテンだな」

良かった、ネジじゃなくて。

点穴突かれたらチャクラ練れなくなるし。

俺とテンテンとの相性はそんなに悪くないしな。

まぁ、忍術を使わないと勝てないけれど。

「リーはネジとだ。分かったか？」

「はい！　分かりました！　ネジ、勝負です！」

ネジは何時も通り表情を崩さず、リーと共に遠くに歩いていく。

テンテンは忍具使いだから、ある程度距離を取ってないと危ないからな。

「なんだか、リーに悪いわね」

「この後、どうせやる事になるんだし、速いか遅いかだよ。じゃあ、早速始めよう」

お互いに、ある程度距離をとる。

何時も負けているが、今日ぐらいは勝ちたいな。

「いくわよ！」

テンテンがその掛け声と共に、クナイを数本投擲する。

俺は印を結び、畳返しの要領で地面をめくり上げてクナイを防ぐ。
土遁・土陸返しの術――原作では次郎坊がチョウジの肉弾針戦車に対して使用した術である。
肉弾針戦車に耐え切れず破壊されてしまったが、本来の使用用途はクナイなどの飛び道具を防ぐ術である為、仕方無いといえる。
この術も土流壁同様視界を塞いでしまうという欠点もある為、直ぐその場から移動し、テンテンを確認する。
一つの新術は試したし、もう一試してみよう。

「今度はこっちの番だ！」

威勢の良い言葉を吐きながら、テンテンに向かって走る。
飛んでくる忍具を足にチャクラを集中させて回避し、接近する。
そして印を結び、空気を勢いよく吸い、口の中から大量の泥をテンテンの足元に吐き出す。
土遁・泥胞子と言う術で、口から泥を吐き出す術である。
しかし、他にこれと言って特徴がない。
本当に、唯土を吐き出すだけである。
ただ、土を固定化させる土流壁と少し似ている。

「なにこれっ！」

驚いて後方へ飛び退いてよけるテンテン。
その隙に吐き出した泥を足の裏に吸着し、泥をテンテンの顔面向かって蹴飛ばす。
命中しなくても気を逸らすぐらいは出来るだろう。

「きゃあっ！」
「勝負ありかな」

一瞬の隙を逃さず、瞬身の術でテンテンの背後に移動する。
そして、背中にクナイを突きつけ寸止めする。
やっぱり、まだまだ忍術に頼る戦いになってしまってるな。
三次試験は最大三回戦う事になるし、このままだとチャクラが切れて後半試合にならないぞ。

「ん～負けちゃったか……悔しいわね」
「まぁ、俺は相手の手の内を知ってたけど、テンテンは知らなかったからね。そこまで悔しがることないよ」

かなり悔しがってる様子なのでフォローを入れる。
女性が不機嫌になると色々と面倒事になるのは分かってるからな。
さて、次は順番的にネジか。
今のネジは遠距離の対処法がないけど……どうしたものかな。

第二十九話

「さぁ、かかって来い」

テンテンとの実戦形式の対決に勝利し、今はネジと向かい合っていた。

今のネジは、遠距離からの攻撃の対処法は無いので、テンテンとは逆に距離を取って戦う事にする。

「それじゃあ、お言葉に甘えて……」

そう言いつつ、後方に飛び退きつつ印を結び、土遁・烈土転掌の術を使い、ネジに向かって地割れを引き起こして注意を逸らし、手裏剣を数枚投げつける。

しかし、ネジは地割れを大きく飛び退いて交わすと、簡単に手裏剣を取ってしまった。

目が良すぎるだろ……

「どうした？　その程度か？」

ネジは余裕の笑みを見せている。

しかし、この状況を打破する術が無い。

攻撃用の術は先程使った土遁・烈土転掌の術しかない。

地面から奇襲を掛けるにしても、ネジには白眼がある。

ならば――

「土遁・土陸返し！」

「そんな土の壁で、一体何が出来る！」

俺は術の名前を叫びながら地面を垂直上に立てる。
しかし、それはこの後の事をネジに感づかれないようにするカモフラージュ。
大きな足音が聞こえる。
どうやら、ネジは此方に向かって突っ込んできたようだ。
こんな土の壁、ネジなら簡単に破壊できるだろう。
ここで、土遁・烈土転掌を使って簡単に壊れるように土の壁の内側に亀裂を起す。
そして、土の壁に蹴りを放つと、土の壁の破片が礫のようにネジに向かって飛んで行く。
すかさず、地面に潜り、ネジの背後に移動する。

「なっ！」

ネジは一瞬驚いたような顔を見せたものの、急ストップし柔拳で礫を弾いていく。
八卦掌回天が使えれば、こんな攻撃を全て簡単に防がれてしまうだろうが、現時点では覚えていないはずだ。
そして、礫を弾いているネジの背後から飛び出し、殴りかかる。
幾ら３６０度見えていようとも、前方と後方からの同時攻撃には対処しようが無い。

「甘い！」

そんな俺の甘い考えを直ぐに払拭させられた。
俺に殴られる直前に、ネジは回転し始める。
これは、八卦掌回天か？
この時期から覚えていたのかよ！
礫は簡単にいなして弾かれ、俺の拳もいなされそうになる。

両足と拳にチャクラを集め耐える。
どうやら、まだまだ未完成らしく回転の勢いが甘い。
このまま押し切ってやる！

「うぉおおお！」
「何っ！」
「あっ……しまっ――」

回転が切れたところに、俺の拳がネジの頭に命中してしまった。
ネジは面白いように吹っ飛んでしまった。
これはまずい……
直ぐに、吹っ飛んだネジの元に駆け寄る。

「大丈夫か？」
「ああ……」

ネジは俺が殴った所を摩りながら立ち上がった。
どうやら大丈夫なようだ。

「まだまだ、未完成か……」

起き上がったネジがブツブツ呟いている。
どうやら、まだまだ八卦掌回天は未完成らしい。
原作でも完璧だと言っていたのは、中忍試験本選の時だったからな。

「今のは柔拳の応用なのか？」
「お前には関係無い事だ」

八卦掌回天の事を知らない振りをして聞いてみる。

ネジからは予想通りの言葉が返ってきた。
まぁ、下手な事を言ってしまいそうだし、何も言わないでおこう。
ネジなら放っておいてもしっかり完成させるだろうし。
さて……最後はリーか……
チャクラはどれだけ持つ事やら。

「くらえっ！」
「させません！」
「くっ……」

俺の上段回し蹴りをリーは受け止め、その勢いのまま投げ飛ばし、空中で身動きの取れない俺に接近する。
空中で態勢を立て直した時にはリーが既に俺に向かって拳を突き出していた。
反応し腕で防ぐものの、勢いを殺しきれず、地面に叩き落とされる。
しかし、さすがのリーも空中でなら同じ様に身動きはとれない筈だ。
何とか受身を取り、リーから距離を取りつつ印を結ぶ。

「土遁・土流壁！」

使用した術は土遁・土流壁。
但し、今回は壁のように硬くなく粘土のように柔らかい。
そして、相手に吸着し相手の行動を制限する。
まぁ、鬼童丸の糸ほど高性能ではないので、力づくで破られる可能性もある。

「なっ！　これは！」

初めて使ったから狙いが微妙にそれ、リーの右腕付近にしか命中しなかったか。

しかし、これでリーは右腕を使えなくなったという事だ。

今がチャンスだ！

足にチャクラを集めて一気に――あれ？　チャクラを感じない……

まさかチャクラ切れか？

そういえば、いつもは体術しか使ってなかったけど、今回は忍術も用いたからか……

そんな事を考えていて、リーの接近に気付かなかった俺は、リーの一撃で先程のネジのようにぶっ飛ばされてしまった。

「だ、大丈夫ですか？」

リーが慌てて駆け寄ってくる。

右腕についていた粘土は既に無かった。

力付くで破ったのか……流石だな。

「ああ、大丈夫大丈夫。気にしないでくれ」

「それなら構いませんが……」

今回で分かった事は俺のチャクラ量はまだまだ連戦では耐えられないという事だ。

という事は、最大三回戦う事になる本選では、チャクラを温存しなければいけないという事だ。

そう考えると、俺は結構運が良かったのかもしれない。

もし、二回戦を勝ち上がった場合俺は一戦の間休む時間があるが、相手にはそれが無い。

本選まで後二十日……出来る限りの事はやってみよう。

第三十話

本選までの時間はあっと言う間に過ぎて行く。
現在は家の庭で忍術の修練をしていた。
ガイ班との演習で肉体を苛め抜き、それが終わればチャクラ量を増やす為にチャクラを限界まで消費する。
チャクラは精神エネルギーと肉体エネルギーを混ぜ合わせる事によって生じる。
その為、総量を増やす為にはその二つのエネルギーを増やさなければならない。

身体エネルギーは人間の身体を構成する膨大な数の細胞一つ一つから取り出すエネルギーのこと。
その為、ガイ班と毎日体術の演習に明け暮れている現在は増加している事だろう。
精神エネルギーは修行や経験によって蓄積したエネルギーのことをいうそうだ。
という事は修行をすれば精神エネルギーは自動的に増えるのだろうか？
この辺りがよくわかっていない。
まぁ、チャクラは色々と謎が深いため考えても無駄かもしれない。
木に吸着したり、水に浮かんだり……

「精が出るな、ムスビ」

振り返るとそこには父さんがいた。
父さんはよく長期任務で里を離れる事が多い為、会うのは久しぶりだ。

「お帰りなさい、父さん。母さんにはもう会ったの？」
「ああ、ただいま。母さんとはさっき会ってきたよ」
「任務は成功したの？」
「何事も無く成功した。ムスビも本選出場おめでとう」
「ありがとう」

父さんは笑顔で祝福してくれる。
母さんにもしてもらったが、やはり嬉しい。

「そうだ、ムスビに渡したいモノがあるんだが受け取ってくれるか？」
「渡したい物？」
「そうだ。とりあえず、居間で待っていてくれ」

そういうと、父さんは先に家の方に入っていった。
一体父さんは何をくれるのだろうか？

「待たせたな」

居間で待っていると、少しして父さんと母さんがやってくる。

「お前に渡したいのはこれだ」

父さんが俺に差し出したのは古びた細長い箱。
どうやら、その中に目的のものが入っているらしい。

「開けてみてくれ」

俺はその箱を受け取り、綺麗に箱を明ける。
その中には無骨なチャクラ刀が入っていた。

「これは……チャクラ刀？」
「よく知ってるじゃないか」

しかし、このチャクラ刀は本当に使えるのか？
所々にヒビが入っているし……
使っていると折れてしまいそうだ。

「そのチャクラ刀はね、私が綱さんにプレゼントしたの。綱さんが始めてのＡランク任務の時に、どうか何事も無く済みますようにってね」
「そして、長い間俺の相棒として共に様々な任務に赴き、そして無事帰ってきた」

帰ってきたという台詞を言った時、父さんの表情が曇った。
成功したとは言わないという事は、何かあったのだろうか……
しかし、今はそんな事を聞ける雰囲気ではない。

「何でそんな大切な物を……これは大切に残して置いたほうがいいんじゃないの？」

まさか、このチャクラ刀が両親の大切な物だったとは。
しかし、そんな大切な物を何故俺にくれるのだろうか……

「これはムスビが生まれた時に二人で決めた事なの。生まれてくる子供にはこの刀を渡そうって」
「このチャクラ刀には俺達二人の想いが篭っている。もらってくれ

るか？」

父さんがチャクラ刀を手に取り、俺に向かって差し出す。
答えは一つだけしかなかった。

「勿論、頂戴します」

チャクラ刀を受け取り、眺める。
よく見ると所々に土がついていた。

「そのチャクラ刀は、土遁のチャクラを付加する事で生まれ変わる。それ以外にも土や鉱物を纏わせたりすることが出来る」
「元々は私が父さんの為に作ってもらったモノだからね。今のムスビなら使いこなせるはずだわ」

今の俺なら使いこなせるか……
本選まであと少ししかないが、使いこなしてみせる。

「今から試しに行って来ても良い？」
「よし、特別に俺が軽くレクチャーしよう。庭に行くぞ」

庭に着くと早速チャクラ刀の説明が始まった。

「いいか、このチャクラ刀は斬る為の物ではない。叩き折る為の物だ。まずは――この石を割ってみせる」

そういって父さんは、口寄せ巻物からそれなりの大きさの石を呼

び出す。

「じゃあ……行くぞ」

そういうと、チャクラ刀を勢いよく頭の上に振り上げ――振り下ろす。

石は綺麗に真っ二つに割れた。

「このように、土遁のチャクラを流す事によってチャクラ刀の強度は限界無く増す。その気になれば草薙の剣とも打ち勝てるようになる」

草薙の剣に打ち勝てるって凄いな。

でも、雷遁纏った草薙の剣は流石にむりだろうけど。

「よし、次はムスビが試してみろ」

チャクラ刀を俺に手渡すと、口寄せ巻物から先程と似た石を呼び出す。

「刀に流すイメージは全体を覆うような感覚がやりやすい」

父さんの言葉通りに、チャクラ刀全体を覆うようなイメージでチャクラを流し、振り上げる

「はぁっ！」

掛け声と共に振り下ろす。

石は父さんのように真っ二つとはいえないものの、それなりに綺麗に割れた。

「筋はいいが……まだまだ要練習だな」

どうも父さんは全然満足していないようだ。

取りあえず、これで初戦の相手には接近戦で対抗できるな。

しかし、頼んでおいたチャクラ刀はどうしようかな……

まさかチャクラ刀をもらえるとは思っていなかったのでオーダーメイドで依頼していたのだけれど。

まぁあって無駄なものではないし、状況によって使い分けていけるように修練するか。

しかし……ここ数日でやる事がどんどん増えていってる気がするな。

第三十一話

時は直ぐに過ぎて行き、三次試験の当日。
俺は、本選会場にやって来ている。
原作のサスケのように遅刻したものはおらず、全員が会場の中心に並んでいる。

今日までに色々あったな……
ガイ上忍に殴られ、リーには蹴られ、テンテンのクナイから逃げ、ネジの柔拳を受ける。
後半はまだ大分マシだったけれど。
思い出すと碌な思い出がないな。
しかし、そのお陰で体術面は向上したと思う。
忍術面はそれほど気にして修練をしていないが、劣化はしていないだろう。
チャクラの総量はどれだけ増えたかはわからない。
チャクラ刀も一応及第点には使えるようになった。
幻術はあまり鍛えていないが……多分大丈夫と思う。

三代目火影が簡単な開催宣言をする。
火影の席には風影の姿もある。
今はまだ本物の四代目風影なのだろうか？
俺は一戦目からなので、そのまま場に残る事になる。
三次試験のルールは原作と同じ。
相手を殺すか、ギブアップするか、審判が判断するかである。
審判は原作でも見たことが無い男だ。

「ムスビ、頑張ってね！」
「頑張れ……」

久しぶりに会ったモミジとコンブは俺に一声掛けて、受験者の席に帰っていった。
さて、一回戦目ではあんまり手の内を見せたくないな。
でも、此処まで残ってきた相手だ、簡単には倒せないだろう。
俺と草隠れの忍びは向かい合う。

「今日は、宜しく頼む」
「よろしく……」

相手は自信満々のようだな。

「二人とも準備はいいか？」
「大丈夫です」
「同じく」

相手は腰に挿してある刀を抜いた。
同じ様にチャクラ刀を抜く。

「それでは第一回戦……はじめ！」

その言葉と同時に俺は足にチャクラを集めて接近。
相手は一瞬驚いたものの、向かい打ってくる

「どうやら、ただのボロイ刀ではないようだな」
「さぁね……」

軽口を叩きながら鍔迫り合う。
力だけならこっちの方が上らしい。

「力は相手の方が上か……ならば――」

そういうと、強引に俺を押しのけると後方に下がった。

「はっ！」

その場で刀を振るうと、斬撃が飛んでくる。

これはあの時より――速い！

右腕に掠った。

傷は浅いが、綺麗に皮膚が切れている。

忘れていた……相手もこの一ヶ月で強くなっている事に。

さらに、飛んでくる斬撃を避ける。

一撃目はかわせるが、それに気を取られて二撃目はあたってしまう。

それを繰り返していると、気がついたら全身切り傷まみれだ。

そこまで深い傷は無いが、ずっと受身でいるとまずい。

斬撃のスピードが速すぎて交わせない。

重りを外すしかないか？

「外せ！！　ムスビ君！！」

「がんばれ！　ムスビ！」

そう考えていると観客席からとてつもなく大きな声が聞こえる。

そちらの方を向くと、そこにはガイ班がいた。

ガイ上忍とリーが親指を立てて頷いた。

修練に付き合ってもらったのに、このまま負けるわけには行かないな。

そういえば、俺は特に何も言われてないけど、重りを外すのは大切な人を複数人守る時とかだったような。

今回はガイ上忍の許可があるからいいか。

俺は中忍試験で千鳥を放ったときのサスケのように後方に下がり壁に足を吸着させる。

そこで素早く重りとパワーアンクルを外し地面に落とす。

すると、地面に落ちた時に結構大きな音が響いた。

一体何キロをつけていたんだ？

「重りを外した程度で拙者の攻撃が避けられるとでも思っているのか！」

そう言って相手は斬撃を飛ばす。

足にチャクラを集めて横に飛ぶ。

すると、一瞬で会場の端まで移動してしまった。

「ど、何処に……」

草隠れの忍びや会場の客は俺を見失っているようだ。

スピードはかなり上がったようだ。

でも、リーよりは劣るだろう……そのリーを倒した我愛羅って一体……

俺は相手に向かって二つクナイを投擲し、駆け出す。

相手はそれに気付き、刀で弾く。

その瞬間一気に地面を蹴り相手に近づき、その勢いのままチャクラ刀で相手を薙ぎ払う。

「くっ……何っ！」

相手は刀で受けるも、スピードと全体重を乗せた一撃に刀には大きなヒビが入った。

相手は驚愕の顔を隠せない。
そこが狙い目だ。

「隙だらけだ！」

隙だらけの相手を蹴り上げ、追随するように飛び上がる。
空中なら流石に身動きは取れないだろう。
背後から相手の右手を左手で掴み、左手を右手で掴みクロスさせる。
この状態なら相手は受身も取る事は出来ない。
そのまま相手の頭を地面に叩きつけるように落とす。

「そこまで……勝者――」

「ま……待った！　まだ戦える！　拙僧の刀はまだ折れてはいない！」

審判が判断を下そうとした時、相手は刀を支えにして立ち上がった。
どうやら、相手の心はあの刀と同じ様にまだ折れてはいないようだ。
なら、俺も相手にこたえないといけない。
チャクラ刀を構え、ボロボロの相手に突っ込む。
相手も刀を構え、此方に突っ込んできた。
そして、交差する――

「見事なり……」

その言葉と同時に刀は砕け、そのまま倒れる。

「勝者……ムスビ！」

観客席から歓声が聞こえる。
何とか勝てたか……

第三十二話

「おめでとう……ムスビ」
「おめでとう！　ムスビ！」

受験者の席に戻ると、コンブとモミジが出迎えてくれた。

「でも、凄く切れてるね」
「傷はそう深くないけど……服は新調しないとだめだな。気に入ってたんだけどな」

モミジの指摘どおり、服はかなり切れてしまっている。
もうこの服は着れないな……
というか、この後もこの試合で戦わないといけないのか。

「次は、モミジとランの試合だな。頑張れよ、モミジ」
「頑張れ……モミジ」
「うん！　任せて！」

モミジはかなりやる気みたいだ。
水と風か……相性的には互角だな。
この一ヶ月でモミジがどれほど強くなったかが勝負の鍵だな。

「あれ？　アタシの応援はしてくれないの？」

ランが話しかけてくる。
いつもどおり、何を考えているか読めないな。
だからこそ、警戒しないといけない。

「まぁ、モミジは同じ班のメンバーだからな。優先順位はモミジの方が上だ」
「同じく……」
「なるほど、確かにそうだね。モミジちゃん、絶対負けないよ！」
「私だって！」

二人はフィールドに向かって階段を下りていく。
女の戦いか……
これに勝った方が俺の次の相手だし、しっかり観察しないとな。
ランの血継限界も分かるといいけど……

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「二人とも準備はいいか？」
「はい！」
「いいよ～」

私は今ランちゃんと向かい合っている。
ランちゃんとは友達だけど……絶対に負けられない。

「それでは……試合開始！」

まずは、このフィールドを変えないといけない。
水遁は水場の近くでないと真の力が発揮できないから。
アタシは口寄せの巻物を取り出し、ランちゃんの上に向かって投げる。
これはカツオ先生に頼み込んで作ってもらったもので、中には大量の水が口寄せされている。

巻物から出てきた水が、ランちゃんを覆い隠す。

「風遁・烈風掌！」

しかし、突如突風が起きて、水は遮られた。
風の性質変化が使えるみたいだね……
なら手数を増やして攻める！

「水分身の術！」

私は、周りの水を用いて二人水分身を生み出す。
分身体の性能は本体よりも落ちるのがやや難点だけど……それを差し置いても良い術だと思う。
作り出した分身体と私でランちゃんを囲む。

「あちゃあ～これは厳しいね」

ランちゃんはそう言うが、厳しそうには全然聞こえない。

「余り舐めないでよね！」
「舐めてるつもりはないんだけどな～」

分身体と三方向から同時にランちゃんに駆け出しながら、私は印を結ぶ。

「水遁・水飴拿原（みずあめなばら）！」

チャクラを水飴に変換して口から吐き出し、水溜りのようにランちゃんに撒き散らす。
水飴特有の甘い匂いが蔓延する。

「あ、足に絡みついて――」
「そこっ！」
水飴が足に絡み付いて身動きが取れない相手に三方向からの同時攻撃。
これなら避けられない！
「な～んてね。風遁・大突破！」
ランちゃんはニヤリと笑うと、地面に向かって大きく息を吐く。
その風圧で水飴の水溜りを吹き飛ばし、上空に浮上しながら私達に向かって手裏剣を投擲する。
私、本人は交わしたものの分身体の二人には命中し、水になってしまう。
風の性質変化は厄介ね……
「水分身の術！」
「また、さっきと同じ戦法？　通用しないって分からないのかな？」
「まだだよ！　霧隠れの術！」
「無駄だよ、風遁・大突破！　あれ？　霧が晴れない」
先程と同じように分身体三人作った後、今度は霧隠れの術で濃霧を発生させる。
ランちゃんが風で霧を吹き飛ばそうとするが、霧は晴れない。
それもそのはず、この霧はチャクラを練りこんである。
風で飛ばされた程度で晴れるものじゃない！
「だけど、この状況でどうするの？　これだとモミジにも私の居場所が分からないんじゃない？」

確かにそう。
この霧で視界はとても悪い。
だから、しっかりランちゃんにマーキングした。
水遁・水飴拿原（みずあめなばら）は、相手の身動きを止める為に使ったのと、この時の為の仕込みでもある。
ランちゃんの足には水飴がべちゃりとついてしまっている。
その甘い匂いをたどれば見つけるのは簡単だ。
現在、ランちゃんは元の場所から動いていない。

「なるほどなるほど、匂いか。これで私はモミジの居場所が分からず、モミジは私の居場所が分かると」

喋って居場所を教えるわけにはいかないので何も答えない。
今の状況はモミジちゃんの言うとおり此方の方が断然有利だ。
なのに、この胸のざわめきは何だろう。
アタシの中の何かが警鐘を鳴らしている。
だけど……此処で止まるわけには行かない！
分身体には前と左右から攻めさせ、私本人は背後から息を潜めて接近する。

「前後左右からか～えらく警戒されてるね。ムスビから情報が漏れてる訳でもないみたいだし」

その言葉と同時に一気にランちゃんに接近する。
場所が全部ばれてる……

「特別に見せてあげるよ。私のオリジナルの術。風遁・振音波！」
「あ、頭が痛い……。この術は一体……」

私は耳を押さえてその場に蹲る。
この術の所為で霧と水分身も消えてしまった。

「高い振動数をもつ弾性振動波だよ――有体に言えば超音波だね。
さて、降参してくれないかな？」

ランちゃんは迫ってくる。
何とか立ち上がるけど頭はがグラグラしている感じがする。
だけど、迫ってくるのなら！

「まだだよ！　水遁・水乱波！」

素早く印を結び口から多量の水を吐き出そうとする。
しかし、口から吐き出されたのは少量の水。
何で……

「術って言うのは、チャクラを練って、印を結んで発動する。しっかり集中しないといけない訳だね。でも、今のモミジはチャクラも練りにくい状態だし、印もグチャグチャ。モミジは気付いてないかもしれないけどね」

ランちゃんの拳が私の鳩尾に入る。
そのままアタシは意識を失った。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「超音波か……厄介だな」

結果はランの勝利。
俺と違って外傷は見受けられない。
完勝か……時間は結構かかったけど。
モミジも頑張ってたけど、ランの方が一枚も二枚も上手だったようだ。
モミジは救護室に搬送された。
鳩尾に一発貰ってそのまま失神。

それよりも、さっきのランのオリジナルとか言っていた術。
アレは多分大気を震わせて、超音波を起こしたんだろう。
元の世界のモスキート音を更に強力にした感じか。
厄介な術だ……集中を乱されるとチャクラのコントロールに支障をきたす。
そうなれば術も発動できなる。
厄介な術だけど何故か妙に引っ掛かる。
この違和感は何だろうか。

「第三試合を始めます。受験者は出てきてください」

どうやら、次の試合が始まるようだ。

「頑張れよ、コンブ。モミジの分も応援するからさ」

コンブはしっかりと頷いた後、会場に降りていく。
少し遅れて雨隠れの忍も降りていく。
とりあえず、今はコンブの試合に集中しよう。

第三十二話（後書き）

オリジナル術解説
風遁・振音波
大気を震わせて、超音波をおこす。
聞いた者に強い不快感を与え、集中力を乱させる。
聴覚に作用する為防ぐのは難しい。

第三十三話

コンブと雨隠れの忍が向かい合う。
コンブは相手に何か言われているが、表情を崩さない。
あ、相手の表情が歪んだ。
相手の挑発を上手くかわしたみたいだな。
ああいう所は、ホント忍に向いてると思う。

雨隠れの里は暁の表のリーダーであるペイン――長門が所属していた里だ。
その他にも、三忍と言う名を自来也様たちに与えた、山椒魚の半蔵と呼ばれる凄腕の忍が所属している。
しかし、下忍に関してはそれほど脅威には感じない。
雨隠れが、原作の中忍試験に送りこんできた雨隠れの忍びは簡単にやられてしまっている。
一つの班は我愛羅の前に無残に敗れ、もう一つの班はナルト達を追い詰めるも、ナルトの底なしのスタミナの前に敗れた。

「それでは、第三試合開始！」

審判の言葉で試合が始まる。
まずは、小競り合いと言った所か、お互い相手に近づき体術で勝負する。

「コンブのほうが押してるね」
「そうだな」

声のした方を横目で見ると、そこにはランがいた。
無視するわけにも行かないので普通に答える。

ランの言うとおりコンブの方が優勢だ。
相手は、コンブのスピードについてこられなくなっている。

「まぁ、まだまだこれからだろ」
「そうだね。相手は体術では敵わないって分かっただろうし。お、いい蹴りが決まったね」

コンブの蹴りが相手の腹に綺麗に決まり、相手はゴロゴロと転がりながら吹き飛ぶ。
中々痛そうだが、相手は立ち上がった。

「本当の勝負は此処からか……」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

良し、良い蹴りが入った……
此処までは良い調子で試合を運べている。
ムスビは勝ち、モミジは負けた。
モミジの敵はムスビが討ってくれるだろう。
自分は、ムスビと戦うべくこの試合は絶対に勝たないといけない。

「クソ……俺がこんな奴に」
「舐めてるからこうなる……身の程を知れ」

相手はわき腹を押さえながら立ち上がってくる。
相手は蛸のように顔を赤くしている。
かなり熱しやすい性格みたいだ……試合前の挑発も無視したら勝手に怒っていたし。

「この野郎……もう許さねぇ！　朧分身の術！」

相手が印を結び術を発動するとどんどん分身が増えていく。
この術は一体……
唯の分身の術じゃなさそうだ。
近くに居る分身にクナイを投擲する。
しかし、クナイは分身をすり抜けてしまった。
残像でも実体でもない……

「考え事か？　余裕だな！」

その言葉と同時に背後からクナイが飛んできて左肩に刺さる。
痛みに顔を顰めつつクナイが飛んできた方向に手裏剣を放る。
しかし、相手には当たらない。

「オラオラ！　どうした？」

死角から放たれるクナイに反応できず、今度は左膝にクナイがさ
さる。
こういう術は相手を見つけないとやりようが無い。
モミジなら霧隠れの術で五分に持ち込める。
ムスビなら口寄せの術がある……そうでなくとも何とかしそうだ。
しかし、自分にはその術が無い。
なら……利用できるものは利用するしかない。
ホルスターから数本の手裏剣を取り出し、両の指の間に挟む

「大きな口を叩いた割りにやる事はこそこそと逃げ回るだけ。口だ
けにも程がある……」
「はっ！　その手には乗らないぜ。俺を挑発して引きずり出そうっ

て魂胆だがそうは行くか！」
「今ので場所は分かった。この手裏剣に当たればお前は終わり」
声のした方向に手裏剣を投擲し、印を結ぶ。
勿論、この手裏剣に当たっただけで相手を倒せる訳がない。
これは、次の術の為の仕込み。
「忍法・幻影多重手裏剣の術」
「なっ！」
術が発動すると、投げた手裏剣がどんどん増加していく。
最初に投げた数枚以外は全て分身だ。
しかし、相手は頭の中で先程の言葉がちらつく。
そうなれば、相手は色々な可能性を考えてしまう。
次に、数十本以上のクナイをチャクラで空中に待機させる。
「ちぃっ！」
良し、逃げようとしている本体を見つけた。
チャクラを足にため、相手を起点に回りながらクナイを放ち、逃げ道を塞いでいく。
「くそっ、忍具使いか！　逃げ場がねぇ！」
前方からは幻影の手裏剣が、横方向からはクナイが飛んでくる。
逃げ場は一つしかない――上だ。
相手は上に飛び上がり、自分も同じ様に飛び上がる。
「体術なら負けない」
「舐めるなよ！」

相手が苦し紛れに繰り出した右拳を受け止める。
動きが止まった所を両肩を掴んで腹に膝蹴りを浴びせ、怯んだ相手の頭を掴み、顔面に膝蹴りを浴びせた。
相手は受身も取れず地面に落ちた。
審判の忍びが駆け寄り、相手の様子を見る。

「試合終了！　勝者コンブ！」

周りに見えないように小さくガッツポーズをした。

第三十四話（前書き）

長らくお待たせしました。

再開しますのでよろしくお願いします。

第三十四話

「やったな、コンブ……」

中盤危ない所もあったが、コンブが勝利した。
やっぱり、コンブも成長している。
新しい術もコンブの長所を生かした忍具系の術だったし。
しかし、アイツ結構毒舌だったんだな。
あんなに挑発するとは思わなかったぞ。

「次はようやく俺の出番か。待ちくたびれたぜ！」
「ちょっと、エン。油断はしないでよ！」
「まかせとけって！　とぉっ！」

エンと言う男は、観客席からダイブし空中で何度か回転した後、見事な着地を決めた。
何処の体操選手だよ。
滝隠れの忍びもそれに続いて降りていく。

「どうも～！　どうも～！」
「目立ちたがり屋なのか？　お前の兄貴は」
「あー……うん。こういうの初めてだからはしゃいでるんだね」

エンは観客席に手を振りながらフィールドを走り回っている。
それを見ている滝隠れの忍びは仏頂面になっている。
無理も無いだろう。
しかし、何かナルトに似てるな……

「それで、お前の兄貴の実力はどうなんだ？」

「ん～見てれば分かると思うけど、体術だけならムスビよりも上かな」

体術だけなら、俺より上か……

それなら別段驚く事は無い。

俺の体術は、達人であるガイ上忍に仕込まれたものの、一ヶ月程度の付け焼刃に過ぎない。

だから、昔から体術を中心に鍛えている奴には敵わない。

「ただいま……」

「おめでとう、コンブ。これで二回戦進出だな」

「おめでと～コンブ」

少ししてコンブが戻って来た。

小さな傷はあるがそこまで深刻な怪我は無いようだ。

「次はコンブが二回戦で当たる相手だからしっかりと見ておかないとな」

「次も勝って絶対にムスビと戦う……」

そう張り切られても困るんだけどな……

数分して、先程のコンブの試合中にフィールドに散らばった忍具が全て回収される。

フィールドはモミジの水遁で湿っているが、大きな影響はないだろう。

原作だとナルトの開けた穴を利用してシカマルがテマリを追い詰めていたし、戦う場所はしっかりと把握していないといけない。

エンと滝隠れの忍は向かい合う。

「それでは、第四試合始め！」

試合が始まった途端、エンは真正面から滝隠れの忍に向かう。
正面からって、流石に相手を舐めすぎじゃないか？
原作で言われている通り、直線的な攻撃は相手にとって動きを読みやすく絶好のカウンターのチャンスとなる。
その為、写輪眼が無い時のカカシ上忍の千鳥は四代目火影から欠陥を指摘されてしまっている。
それを克服するには、相手の攻撃を読む事に長けた目が必要だが……カカシ上忍のような例外を除くと、結局の所生まれ持った才能に左右されてしまう事になる。

「あ～またやってるよ」
「また？　あの、正面から敵に向かっていく事か？」
「うん。あんな感じにカウンターを受けるか受けないかの緊張感を味わうのが好きらしいんだよね～。
「それって大丈夫なのか？　もしカウンター貰ったりしたら……」
「只じゃすまない……」
「多分大丈夫じゃない？」

多分って……
滝隠れの忍はクナイを構えて冷静に相手の動きを見ている。
そしてエンを限界まで引き付けてクナイを振り下ろす。
しかし、エンはその攻撃を完璧に読んでいたかの如く紙一重でかわし、鳩尾に肘鉄を浴びせる。
滝隠れの忍は三メートルほど吹っ飛び、その場で蹲る。
あの速度と体重を乗せられて鳩尾にくらったのだから仕方無い。

「なぁ、お前等兄妹ってさ……血継限界か？」
「あれ？　何時から気づいてたの？」

全然隠さないな……コイツは。

「最初から。まぁ、どういうのかは分かってなかったけど。お前の兄貴の方は目だろ？　あの読みは異常過ぎる」

「やっぱり分かっちゃうよね～」

普通、あんな速いスピードで突っ込んであんな綺麗にかわせるわけないからな。

ランの方も大体目星はついている。

「滝隠れの忍が起きたよ……」

ムスビの言葉で思考を止め、試合の方へ目を向ける。

滝隠れの忍はフラフラになりながらも立ち上がり、印を結ぶ。

そして、口から多量の水を勢い良く吐き出す。

エンはニヤリと笑うと印を結ぶ。

何かを吐き出す動作を行う。

「あの印は……火遁・豪火球の術」

コンブの言葉通りエンは口から巨大な火球を吐き出す。

その巨大な火球は、滝隠れの忍が吐き出した水を全て飲み込み直進する。

滝隠れの忍は飛び上がって火球を避ける。

しかし、その動きはエンに読まれている。

エンは飛び上がり、空中で身動きが取れない相手を地面に蹴り落とした。

滝隠れの忍は、受身も取れず地面に激突した。

審判が、滝隠れの忍の状態を確認する。

「試合終了！　勝者エン！」

結局エンの勝利か……
試合時間五分も無かったんじゃないか？

「圧勝か……コンブ、アイツに勝てるか？」
「厳しいと思う。でも、勝てないわけじゃない」

コンブと似たようなタイプの忍だけど地力はエンの方が高そうだ。
さらにエンにはあの目がある。
下手な攻撃は当たらないだろう。

「さて、これで一回戦は全て終わって……次は二回戦だね」

エンの事ばかり考えている余裕は無い。
次は俺とランの試合だ。
俺は静かに階段の方から試合会場に向かった。

第三十五話

フィールドに向かう間、頭の中でランの事を整理していた。
モミジとの試合を見るには、戦闘スタイルは忍術中心だろう。
そして、風遁が得意だ。
風遁と土遁か……相性的には互角か。
しかし、相手は感知タイプでもある、土に潜るタイプの忍術は使うことはできない。
これは下手に忍術を使うよりは、体術で攻めた方が得策か？
前の試合ではランは体術はあまり見せていない。
距離を置いて戦えばモミジがやられた様に、超音波の術が飛んでくるし。
相手に忍術を使わせる暇も無いほどに攻めて、一気に決める……言うのは簡単だが、実行するのは難しい。
しかし、やっぱりこれが得策だろう。
何も相手の土俵で戦う事もないし。
そんな事を考えていると、直ぐにフィールドに着いた。
その場には、既にランが立っていた。

「遅かったね。作戦は立てられた？」
「さぁ？　どうだろう」

ランはいつもと変わらない笑みを浮かべている。
何となく不気味な感じがする。

「二人とも準備はいいか？」
「大丈夫です」
「何時でもいいよ～」

審判に答えながら構える

「試合開始！」

審判が、宣言した瞬間ランに向かって駆ける。

「残念、それは予想してたよ」

しかし、一歩早くランが印を結び終える。
風によって周りの砂塵が巻き上がる。
どうやらこっちの視界を奪い、感知能力を用いて一方的に攻撃するつもりらしい。
出し惜しみは出来ないな。

「口寄せの術！　ミズラ、今は一対一の試合の途中だ。頭の上に乗って相手の居場所を逐一報告してくれ」
「いきなりだな、おい。まぁいい、お前から見て後方だ」

ミズラを呼び出しランの位置を確認すると、土遁・土陸返しで後方に壁を作る。
直ぐに壁に手裏剣が突き刺さった。
ようやく砂塵が収まり、ランを視認する事ができた。
ランは特に驚いた様子も無く経っていた。

「へぇ～感知する術を持つ口寄せ土竜か」

牽制として手裏剣を投擲する。
しかし、風遁・烈風掌の術で手裏剣が跳ね返ってくる。
先程作った壁に隠れ、事なきを得る。
やっぱり投擲武器は逆効果か……

「来ないの？　なら、こっちから行くよ！」

ランは、クナイを抜き取りこちらに向かってくる。
こっちもチャクラ刀を抜き取り、ランに向かう。
クナイとチャクラ刀が鍔迫り合う。
女にしては力強いが……腕力と武器の硬さは此方のほうが上のようだ。
思いっきり振りぬくと、クナイが二つに割れた。

「凄い硬いね～やっぱ、接近戦じゃ不利か」

ランは地面に煙球を投げつけ、その場から素早く離れる。

「どこだ、ミズラ！」
「右方向に後退してるぞ」

今のでランは体術には俺に分があるのがわかったはずだ。
此処で強引に行かないとアイツはもう接近してこない。
ミズラの言うとおり右方向から一気に煙を抜け出し、ランを追う。

「風遁・大突破の術！」

強風で吹き飛ぶも空中で体制を立て直し着地する。
すぐさまランに接近を試みる。
飛んでくる忍具をチャクラ刀で弾き前進する。

「そうはさせないよ」

ランは印を結ぶと手を前に押し出す。

あれは――風遁・烈風掌の術、まずい！
すぐさま横に飛び転がる。
先程俺がいた所を凄い勢いで忍具が通過した。

「知ってたみたいだね。この術の本当の使い方」

風遁・烈風掌の術……クナイや手裏剣などの忍具と組み合わせることで真価を発揮し、忍具の速度や威力を数倍に上げることが可能だ。
原作だと、長門が小南の紙手裏剣と連携で用いていた。

「でもこのままじゃ時間がかかりそうだね。なら……」

そういうと、ランは両手の人差し指と中指を十字に合わせる。
あの特徴的な印は影分身の術……
まさか、使えるのか？

「影分身の術」

ランの左右に分身体のランが現われる。
これで、ランは三人。
多分、クナイや手裏剣を投げる役と風遁・烈風掌の術を使う役に分けるつもりだろう。
しかし、これはチャンスでもある。
影分身はチャクラを均等に分ける術。という事は、ランのチャクラは三分の一になっている。
更に言えば、影分身を使わないといけないほどに相手も手が無い状態におい込まれているという事だ。

「じゃ始めるよ」

二人のランがクナイを投げ、一人のランが風遁・烈風掌で打ち出す。
数が多すぎる！
「土遁・土陸返し」
土の壁を立ててクナイを防ぐ。
大体の忍具ならこれで防げるが……
「甘いね」
流石にランは対処方を知っていたようで、起爆札をまきつけたクナイで土の壁を爆破し、土の壁を粉々に破壊した。
そして、壁を掻い潜りクナイが左肩に突き刺さる。
凄く痛いが……まだまだ戦える。
クナイを抜き取り無造作に投げ捨てる。
「やばいんじゃねぇの？　今のお前にはこの距離から迎え撃てる術はないだろ」
「分かってる事をいうな！」
落ち着け……冷静に考えろ。
落ち着きながら冷静にクナイや手裏剣を避ける。
だが交わしきれない。
クナイや手裏剣が俺の体に突き刺さる。
急所に入ってないのが幸いだ。
相手が数なら、こっちも数で勝負だ。
「土遁・影分身」

土を媒体として分身体を二人生み出す。
土を用いている為、影分身のようにチャクラを均等に分ける必要は無い。
しかし、影分身のように実体に経験は蓄積されず、一定量の土がないと使えないのが難点だ。

前、右、左からそれぞれ攻める。
攻撃を分散して、ランに近づく作戦だ。
しかし、左右の分身を無視して俺に攻撃を集中してくる。
思惑と外れたが、これでも構わない。

「土遁・烈土転拳の術！」

左右の分身体が地面に掌底を加える。
すると、地面にどんどんひびが入っていき、ランに迫る。
三人のランはたまらず飛び上がる、隙が出来た。
足にチャクラを集め、一気に地面を蹴りランに迫る。
苦し紛れに手裏剣を投擲してくるが、現在のスピードなら簡単に避けられる。
空中で身動きが取れないランに向かってチャクラ刀を振り下ろす。
しかし、横から来た突風にラン共々吹き飛ばされた。
どうやら影分身が、チャクラ刀をくらうより、風遁で吹っ飛ばすの方が良いと判断したらしい。
しかし、影分身の一体が巻き込まれて消えた。
あと影分身は残り一体、此方は二体。

「俺は本体を狙う。分身体は任せた！」

体勢を整えながら分身体にそう伝え、ランに迫る。

分身体は二人でランの分身体を追い詰め、ダメージを与え倒す。

「風遁・砂砂塵！」
「後方に逃げたぞ！」
「了解！　皆同時に行くぞ！」

砂を巻き上げて逃げるが遅い。
強引に砂塵を突っ切りランを見つける。
三人全体で攻め、このまま押し切る！
しかし――

「詰めが甘いよ！　風遁・振音波！」
「ぐっ……頭が」

砂は唯の時間稼ぎか……
咄嗟にチャクラを耳に集め、障壁を作り術の効力を半減させる。
しかし、頭にはズキッとした痛みがはしる。
頭の痛みをがまんしつつ、無防備のランを蹴り飛ばし、肩膝をつく。
ランは受身が取れず、地面を転がった。
今の術で分身体も消えてしまった。

「おい、どうした？」
「お前は無事なのか……」

ミズラが心配そうな声で聞いてくる。
土竜と人間では周波数が違っていたのか？
チャクラを練って追撃しようとするが、頭の痛みで上手く練れない。

「悪い、時間切れみたいだ」
「そうか。ご苦労様」
ミズラは時間切れで煙と共に消える。
「どう？　チャクラを上手く練れないでしょ。降参した方が良いんじゃない？」
ランが服の汚れを叩きながらそう勧める。
足に気合いを入れて立ち上がる。
「何でだよ、もう少しで勝てるって所なのに」
「面白い事言うね。ムスビはチャクラも上手く練れず、全身傷だらけなのに」
「確かに、傍から見れば俺の方が追い込まれてると思う。だけど、俺には分かる。ラン、お前チャクラが切れかかってるだろ？」
「そんなわけ――」
「さっき、受身取れなかっただろ。受身が取れないほどの攻撃じゃないのにな。肉体的にダメージは無い……なら、チャクラ切れしかないだろう」
初めて、ランの表情に動揺が見て取れた。
「俺もチャクラは上手く練れない。お前はチャクラがもうほとんど残ってない。だったら、純粋な力比べしかないよな」
「そう……みたいだね」
ここからは、小細工無しのぶつかりだ。

第三十六話

「いくよ！」
「来い！」

ランの拳を払い、蹴りを受け止める。
リーやネジに比べると、鋭さもないし、重さもない。

「木ノ葉烈風！」
「なっ！」

攻めると見せかけて、虚を突き足払いをかける。
ランは反応するが、体がついて来ず避けれない。
体が宙に浮き、無防備になった所を蹴り飛ばす。
ランは腕で防御するが、防ぎきれず地面を転がっていく。
これは効いたはずだ。

「まだ……まだっ！」

しかし、すぐに立ち上がり向かってくる。
殴りかかってくるが、その腕を取って投げる。
相手は上手く受身を取り立ち上がる。

「体術なら俺のほうが一枚上手みたいだな」
「確かにそうだね。だけど……ムスビもつらそうね」

ランの言うとおり、先ほどくらった術で頭が痛い。
その所為で、さっきの蹴りや投げもそこまで威力がでなかったし。
なら、一発一発積み重ねる！

ランの攻撃を捌き、相手の体に叩き込む。
だが、あまり効いた様子がない。
鳩尾に肘鉄を入れ、そのまま一回転して蹴り飛ばす。

「いたた……今のはまともに当たってたら不味かったよ」
「鳩尾に肘鉄浴びせたのに咄嗟に防御って……まじかよ」
「まぁ、エンの攻撃をよくくらってたからね。この程度じゃまだ倒れないよ！」

ランはすぐに立ち上がり、俺に近づくと俺の両手を掴む。

「これで捌くことも逃げることもできないよ」
「そっちもな」

ランの膝蹴りを同じように膝蹴りして防ぐ。
この状態だと膝蹴りぐらいしかできないが――一つあったな。
考え付き、頭を背後に限界までもっていく。
そして、額と額が激突する。
ものすごく痛い……

「なんという石頭……」
「ムスビこそ……」

お互い距離をとって額を押さえる。
けん制の意味もこめてクナイを投擲する。
だが、簡単に避けられる。
コンブのように上手くないから仕方ないな。
もう少し手裏剣術も練習しないとな。

「さて、このまま長引かせるのも得策じゃないし、一気に決めさせてもらおうかな」

ランがそういった瞬間俺の背中に何かが突き刺さった。
これはクナイ……
さっき、ばら撒いたクナイを使ったのは分かる。
コンブも使った操襲刃か？
いや、あれはチャクラでクナイを統制して放つ術、今のあいつのチャクラで俺の後ろのクナイを統制することなんか無理だ。
待てよ……別に統制なんてしなくても、俺に向かって飛ばすことができればいい訳だ。
そして、相手は砂隠れの忍……だとしたら。
クナイを無造作に抜く。

「なるほどな……」
「あれ？　もう種が分かったの？」
「砂には傀儡師という人形を使う忍がいるって聞いたことがある。だから……」

ランの指の動きをしっかり見て、横から来る二つのクナイをしゃがんで避ける。

「チャクラの糸……それをクナイにつけて操っていたわけか」

かなり精密なチャクラコントロールが必要だから俺にはできない芸当だ。
確かに、これならあまりチャクラを使わないで済む。
これができると言う事は、ランは本来は傀儡師なのか？

「あったりぃ～どんどん行くよ！」

転がっていたクナイや手裏剣が俺の方に向かって飛んでくる。
しかし、何故か数本ずつしか飛んでこない。
何かの罠か？
それとも、全部の指を同時に動かすのは無理なのか？
タイミングを見計らって、ランに近づく。

「木ノ葉旋風！」

上段の蹴りはしゃがんで避けるものの、下段の蹴りはまともに食らったらしい。
倒れているランに近づくクナイを首元に突きつける。

「勝者、海苔巻ムスビ！」

クナイを仕舞いランに手を差し伸べる。

「参った。完敗ね」
「いや、運がよかった。次やったらランが勝つかもな……負ける気ないけど」
「私も次は負けないよ」

ランは俺の手をとり立ち上がる。
俺もランもぼろぼろだ。
さっさと医務室行って治療受けないと、次の試合を見逃すな。
どちらも強いし、しっかりと研究しなければいけない。

「ラン、さっさと医務室行こうぜ」
「あ、私は別にいいよ。殴打されただけだから」
「そうか？　じゃあ、俺は医務室に行かせてもらうぞ」

さて、さっさと医務室行って試合見ないとな。

第三十七話

ムスビは医療室で簡単な治療を行い、すぐに観客席に戻ってくる。
しかし、先に戻ったはずのランはいない。

「試合はっと……」
「あ、ムスビ。おめでとう」
「ああ、ありがとう。モミジ戻ってきてたのか」
「ムスビとランちゃんの試合の途中にね」
「そういえばランは？　見当たらないが？」
「ランちゃん？　一緒に医務室いってたんじゃないの？」
「いや……どうしたんだろうか」

ランのことは気になるが、考えていても仕方がない。
そう考え気持ちを試合に切り替える。

「試合は今からか？」
「うん。忍具が散乱してたから、その片付けをね」

試合会場はコンブとエンが向かい合っている。
コンブは無表情に対し、エンは笑顔だ。

「何だか余裕あるね。ランちゃんのお兄さん」
「そうだな……ランもずっと余裕ある感じだったからな。まぁ、それが一概に良いともいえないけど」
「そうだね。あ、試合が始まるみたいだよ」

審判が手を挙げ試合の開始を宣言した。

試合開始の合図と同時にコンブは後ろに下がる。

「ん？　攻めて来ないのか？」

「今から攻める……」

クナイを数十本取り出し、上空に投げ、印を結ぶ。

「操襲刃の術」

「なるほど、接近戦は不利と見て遠距離から攻める気か。上手くいくかね？」

術が発動し、数十本のクナイがコンブの周りを浮遊する。

エンはそれにあわせてポーチからクナイを取り出し、構える。

「いけっ！」

（正確な狙いだな。逆に狙いやすい）

コンブの言葉と共にクナイが一斉にエンに殺到する。

しかし、エンはそれを全て見切るとクナイで全て弾き落とした。

「なら、今度はこれ……」

「風魔手裏剣か。確かに普通のクナイや手裏剣よりは殺傷能力は高いが、その分スピードは犠牲になってるな。俺に当たるかな？」

コンブは巻物を取り出し、そこから風魔手裏剣を取り出す。

エンの言葉を無視し風魔手裏剣を投げる。

（手裏剣の影に手裏剣――影手裏剣の術か。しかもそれだけじゃな

い。これはワイヤーか）

迫ってくる風魔手裏剣を冷静に見切り二つ共しっかり避ける。
コンブはワイヤーを引っ張り、壁に向かって飛んでいく風魔手裏剣を引き戻し、印を結ぶ。

「火遁・鳳仙火の術！」

口から火の玉を複数個吐き出す。
火遁・鳳仙火の術――火の玉をチャクラで操り飛ばす術である。

（背後からは風魔手裏剣。前方からは、火の玉。側方もカバーしてある。これなら避けることはできない）

「甘いな！　火遁・鳳仙火の術！」

（俺と同じ術！　しかも俺より大きい！）

素早く印を結び口からコンブと同じ数の火の玉を吹き出す。
数個の火の玉が衝突し、消滅する。
そして二つの風魔手裏剣に向き直り、真ん中の空いている取っ手部分を掴み、強引に風魔手裏剣を止める。

「ちょっと手が痺れたな」

「くっ……」

「さて、攻守交替と行くか！」

（は、速い！）

風魔手裏剣をその場に投げ捨て、猛烈な速さでコンブに近づく。
コンブは手裏剣でけん制するが、エンの速さに追いつけない。
そして、エンは拳が届く距離まで接近する。

「くそっ！」
「おお、速い速い！」
エンに向かって鋭い突きや蹴りを繰り出す。
しかし、全て紙一重で避けられる。
「そういえば、さっきムスビは木ノ葉旋風って技使ってたな。俺も見せてやるよ、砂隠れ流の体術ってやつを」
「何を……」
コンブに向かって強烈に踏み込み砂塵を巻き上げる。
砂塵でコンブはエンを見失う。
（砂塵の所為で視界が――）
砂塵を払おうとした瞬間コンブは側頭部に鈍い痛みを感じそのまま倒れ込んだ。
「今の一撃は重いな……」
観客席の二人からはエンが何をやったのか良く見えていた。
砂塵でコンブの視界が一瞬外れた瞬間背後に回りこんで上段蹴り。
「あれ？　もう終わっちゃったの？」
「ラン今までどこに……」
「女の子にそういうの聞いちゃだめだと思うよ」
ランが今までどこに行っていたのか尋ねるムスビだが、ランにそ

ういわれ押し黙る。

「コンブ君はどうしたの？」
「お前の兄貴の上段蹴りが側頭部に命中したんだよ」

動かないコンブに審判が確認を取ろうと駆け寄っている。

「あ～ならもう無理かな？　エンの蹴りは痛いから」
「そんな事ないよ！　コンブは大丈夫。そうだよね、ムスビ」
「あの一撃は重いな……」

ムスビの言葉にモミジは落胆の表情を浮かべる。

「だけど、アイツは無表情だけど負けん気は俺達の誰よりも強いからな。これで終わる事はないな」
「そんな気持ちだけでどうにか出来るなんて……」
「いや、分からないぞ？　病は気からって言葉もあるしな」

ムスビがそう言った時、試合は動いた。

第三十八話

「なっ！」

コンブは脚で、エンを引っ掛ける。
エンは完全に仕留めたと思っており、全くの無警戒だったのだ。
その隙に立ち上がり、お返しと言わんばかりに腹を蹴り飛ばした。
しかし、コンブも無防備に側頭部に蹴りを受けたため、状態は芳しくない。
立ってるだけでフラフラである。

「決めたと思ったんだけどな。なら、もう一発行くぜ！」

ぼろぼろのコンブを倒そうとエンは正面から突っ込む。
今の状態のコンブなら小細工無しで倒せると判断したのだ。
コンブの頭に上段の蹴りが飛ぶ。

（これで終わりだ！）

その時、コンブは前のめりに倒れ蹴りを避けると、エンの腹に肘を入れ、そのまま地面に手を突き、両足でエンの顔面を蹴りつけた。

「まだこんな動きが出来るのか――なっ！」

突然の攻撃に思わず後ずさる。
この時、エンは初めてコンブをしっかりと見る。

（意識が無いのか？　なら何であんな動きが……）

エンの考えは少し外れていた。
コンブは完全に意識を失っているわけではない。
まだ、辛うじて意識を保っていた。
だが、それは首の皮一枚でつながっていると言うギリギリの状態。
いつ崩れてもおかしくない。

「これならどうだ！」

エンは素早い動きで背後に回りこみ背中に拳打を打つ。
その速さは下忍の比ではなく、既に中忍レベルに達している。
本来のコンブの実力では避けることが出来ない攻撃である。
しかし、コンブはその攻撃をはたいて軌道を逸らし、逆に殴り飛ばした。
これには、流石にエンも驚いた。
エンもランと同様表面上はヘラヘラしているが、実際は頭の中で色々考えている。
そのため、現状を頭の中で分析していた。

（一体どういうことだ？　どうして俺の攻撃に反応できる。一回戦で見た動きが本気じゃなかったのか？
いや、それならクナイに反応できない何てことは無かったはずだ。
それとも、俺がアイツの攻撃に当たりに行ってるだけか？）

エンは一回戦を見たがあまりコンブを脅威と見てはいなかった。
何故なら、自分の能力を総合的に下げた状態――それがコンブに対する評価だった。
唯一負けているのは、忍具の扱いだけであるとエンは分析していたのだ。
それ以外なら、忍術でも体術でも速さでも、コンブに劣っているとは思っていなかったのだ。

そして、考え付いたのが自分の運の無さ。
予選でも水晶の色が全然合わなかったり、持ってない忍に当たったりしていた。
今回も同じように、相手の攻撃が偶然自分に当たっているのだろうか。

（いや、それはない。一回目ならそれでも済ませられるが、二回目も対応された）

一回目は完全に油断していた。
だが、二回目は本気で倒しにかかった。
その攻撃も返されたのだ、偶然で済ますことは出来ない。

（体術が駄目なら忍術だ。もし危なくても試験官が止めてくれるだろう）

バックステップで少し後ろに下がり、印を結ぶ。

「火遁・炎弾！」

チャクラを油に変え、火遁の術で着火し口から強力な炎を吹く。
コンブは右に避けようと足を踏み出すが、地面の亀裂に足をとられ倒れこむ。
その亀裂は、先ほどのムスビとランの対戦でムスビの土遁・裂土転掌によって出来たものだ。
それが功をそうしたのか、コンブの上を炎は通過した。

（頭が痛い……試合は！）

倒れた時の衝撃でようやく意識が戻ってくる。

頭の痛みを堪えて立ち上がり、周りを確認する。

（まだ試合会場。よかった……ん？）

まだ、自分が試合会場にいる事に安堵する。

そして、エンの姿を見つけ疑問を覚える。

（何であんな驚いたような顔を……）

コンブには先ほどの蹴りで倒されてから数十秒程度意識が飛んだものと思っている。

そのためエンが遠くにいる理由や、驚いたような表情をしている理由が分からなかった。

（今はそんな事考えているときじゃない）

コンブはそう考え印を結ぶ。

エンも遅れつつ印を結ぶ。

その印はどちらも同じであり、コンブが少し早く印を結び終える。

「火遁・豪火球の術！」

「っ、火遁・豪火球の術」

二人の口から巨大な火の玉が吹き出され、お互いに飛んでいく。

そして二つの火の玉が衝突し、小規模な爆発が起こる。

（しまった、咄嗟に術で対抗しちまった。爆発の所為で視界が悪すぎる）

エンの眼には透視眼としての力は無く、視力と洞察眼が異常に優

れているのだ。
その洞察眼は、相手の筋肉の動きでどのような攻撃をするのが分かってしまうというほどだ。
その眼があったからこそ、相手のカウンターを見切って逆にカウンターを叩き込むという事ができたのである。
しかし、その眼も相手が見えなければ意味が無い。
さらに、エンは今まで眼に頼った戦い方をしてきたため、気配で感じ取ることが苦手であった。

（仕掛けるなら、今しかない）

逆にコンブにとっては好機である。
コンブは最初のやり取りで自身の技が相手に見切られていることがわかっていた。
だからこそ、現在の視界が悪い状況は都合が良かった。

（勝負はまだまだここから）

第三十九話

「まさか、あそこから持ち直すなんてね」

ランは普段通りに見えるが、声には驚きが含まれていた。

俺も内心驚いている。

「俺もまさかこんな展開になるとは思わなかった。あの状態でよく、あの速い攻撃に対応できたな」

「カツオ先生と良く組み手してたからね。エンさんと同じぐらいの速さかな？」

目で動きは追えていたのはそういう理由か。

と言うことは、あの意識の無い状態は考える前に体が反応したってことなのか？

「だが、この煙はチャンスだな。これなら最初みたいに完璧に見切られることはなくなるはずだ……ただ」

「ただ？」

「逆に言えばこの煙が晴れたらエンの方が有利になるって事。それで、地力はエンの方が高いから長引くとコンブ君はかなり不利な状況になるね」

ランの言う通りこの煙が晴れれば、逆にエンが有利になる。

この煙もエンが動揺して判断を間違えたのが原因だ。

二度目も同じような愚は冒さないだろう。

「ここが勝負所だな。頑張れよ、コンブ」

（何でここまで攻められてるんだ）

エンは肉体的にはあまりダメージを負っていないが、精神的にはかなりダメージを受けていた。

中忍試験は一次試験を簡単に突破し、二次試験では多数の忍を返り討ちにて突破した事で、無意識のうちに油断していた。

そして、それだけの実力が彼にはあったのだ。

コンブの事もあまり警戒していなかった。

そのコンブにここまで追い詰められている事実が、エンのプライドを傷つけた。

（まずは、相手の位置を探る）

コンブは最初に先程のエンの位置にワイヤーを付けた手裏剣を二つ投擲する。

そして、その判断は正しかった。

不用意に動いて相手に自分の居場所を察知されたくなかったエンは、その場から動いていなかったのだ。

（手裏剣か！）

エンはポーチからクナイを取り出し、その二つを弾く。

（見つけた！）

コンブは弾かれた手裏剣の位置から、エンがまだ動いていないこ

とを確信する。
十個の糸のついた手裏剣を放り投げ、印を結ぶ。
（操襲刃で相手を捕まえる）
チャクラによって統制された手裏剣が一斉にエンに殺到する。
煙によって手裏剣が見えず、エンの反応は遅れた。
（これは避けるのは無理だ。迎撃するしかねぇ！）
エンは迫るクナイを一つ一つ弾いていく。
しかし、反応に遅れたことで全てを弾ききることは出来ず、一つの手裏剣が肩に突き刺さる。
（よし、一つ当たった。もうすぐ煙が晴れる。ここで決める！）
ワイヤーで位置を確認し印を結ぶ。
使用する術は先程使った火遁・豪火球の術。
しかし、先程よりもチャクラを練り上げ、巨大な火の玉をエンに向かって吐き出す。
それと同時に煙が晴れ、エンを自分に向かってくる巨大な火の玉を目視する。
（何で位置が……手裏剣か！　避けるか？　いや、ここで逃げるわけにはいくか！　とっておきだがここで使う！）
エンは後方に退きながら長い印を結ぶ。
「火遁・火龍炎弾！」
（なっ！　あれは上忍レベルの術！）

エンの口から巨大な炎の龍が吐き出され、火の玉を呑み込み、コンブに迫る。
コンブは壁際まで引き付け、ギリギリで避けるが、目の前にはエンが迫る。
両腕でガードをするが、そのまま吹き飛ばされ、壁に激突する。
そして、エンはコンブにクナイを突きつけた。

「ここまで！　勝者、エン！」
（負けか……）

そのまま仰向けに倒れる。

「悪かったな」

コンブが声に反応すると、エンが見下ろしていた。
直ぐに、コンブは立ち上がる。

「正直、お前の事舐めてた。その結果がこの様だ。お前は強いよ。だけど、次やるときは俺が完勝してみせる」
「それはない」

その言葉にエンはニヤッと笑うと手を出した。
コンブは無表情でその手を握った。

「結果は負けだけど良い試合だったな」

「うん、そうだね。コンブすごく頑張ってた」

コンブはチャクラをコントロールするのが苦手だったが、あそこまでチャクラを練りこめるようになっていたとは思わなかった。

「次は、ムスビの試合だね。頑張ってね！」
「ああ、二人の分も頑張るよ」
「あれ？　あたしの分は？」
「いや、お前は兄貴を応援しろよ……」

試合前にペースを乱されるのは堪らない。
逃げるように観客席から飛び降る。
飛び降りた所には、コンブがやってきていた。

「コンブ、お疲れ。惜しかったな」

コンブは頷いて返す。
少し、悔しそうな顔をしていた。

「強いよ、アイツ」
「ああ、分かってる」
「頑張れ」

それだけ言うと、観客席の方に歩いていった。
エンが待つフィールドの中央に歩いていく。

「最初から本気で行かせてもらうぜ」

さっきの余裕の表情とは裏腹に、かなり真剣な表情のエン。
これは、油断してくれそうに無いか。

「ああ、俺も本気でやらせてもらう」

だが、俺のやる事は変わらない。
この一戦全てを出し切るだけだ。

「それでは決勝戦を始める！」

フィールドのクナイや手裏剣を拾い終えた審判が宣言する。

「木の葉隠れの海苔巻ムスビ対砂隠れのエン――試合開始！」

そして、中人試験最後の戦いが始まった。

第四十話

「先手必勝！」

試合が始まりいきなりエンが突っ込む。

ムスビは連続で放たれる裏拳、正拳に反応し受け止める。

「やっぱ、侮れないな」

「そりゃ、どうも――っ！」

軽口を叩きながら放たれる頭への蹴りを、体を後ろに仰け反らせて回避する。

バク転で後方に退く。

「土遁・影分身の術」

（数で攻める気か？）

分身体を前に出し突進させ、分身体に隠れるようにしてエンに接近する。

（いや！　これは分身で本体の姿を俺に見せないようにしてるのか）

分身体は飛び掛ってくるが、腕を取って地面に引き倒すと、土に戻る。

そして、直ぐに足元に本体のムスビが足から滑り込んでくる。

エンは咄嗟にその場に飛び上がり、ムスビの方を向きつつ印を結ぶ。

その印を見て、滑りながらムスビも印を結んだ。

「火遁・鳳仙火の術！」
「土遁・土陸返し！」

火の玉を複数個吐き出し、それをムスビに飛ばす。
ムスビは反転しつつ地面を土壁状に切り、垂直に立てる。
火の玉は全て土壁に激突する。
土壁は崩れて倒れる。
そして、ムスビの直ぐ目の前にはエンが迫ってきていた。

「もらったぁ！」

エンの拳がムスビの頬を直撃すると同時にムスビの体は土に変わる。
そして、背後の地面からムスビが飛び出す。

「木ノ葉旋風！」
「その技はさっき見た！」

エンは体を反転させると、ムスビが放つ上段蹴りを受け止める。

「今のは、上段蹴りを囮に相手が回避した所に強烈な下段蹴りを叩き込む技だろ？　その所為で、上段蹴りは少し甘いな！」

エンは足を持ったまま片手で上空に放り投げ、自分も飛び上がる。
投げられたムスビは空中で印を結び、エンの方向を向く。

「土遁・泥胞子！」
「なっ！」

口から連続して泥を吐き出す。

泥はエンの顔に命中し、動きを止める。
その瞬間にムスビは体制を建て直し、エンに向かって踵を落とす。
エンはその攻撃を腕で受け止め、二人同時に着地し距離をとる。

（やっぱり、あの目は厄介だな。陽動かけてやっと攻撃が届く。その攻撃も今のところ全部受けられてる）
（ここまで、一撃も攻撃が当たらないなんてな。油断なんてしてたら直ぐにやられてたな）

ムスビは土遁・泥胞子で自分の周りに泥を吐き出した後、土遁・影分身の術で分身体を二体生み出す。
そして、その一体をエン目掛けて投げ飛ばす。

（何だ？　俺まで距離が足りてないぞ……泥か！）

エンはその洞察力でムスビの分身体が自分まで届かない事に気づく。
すぐに、後ろに飛び退く。
分身体は先程エンのいた場所の少し前に落ち、その場に泥を撒き散らした。

（あぶね～……まて、アイツは）

エンがムスビが居た所を見るが、ムスビの姿は消えていた。

（前にも後ろにも……上にもいないという事は――）

エンは地面が隆起して来るのに気付くと、上に飛び上がり印を結ぶ。

「火遁・豪火球の術！」

地面から出てきた二人のムスビに向かって大きな火の玉を吐き出す。

火の玉はムスビ二人を巻き込み、地面を少し削り、煙を巻き上げながら消える。

煙が晴れるとそこにはボロボロのムスビが倒れていた。

（……本当に当たったのか？）

ここで、エンが感じたのは違和感。

エンには、この程度の攻撃でムスビが倒せるとは思っていなかったのだ。

そして、一つの考えが浮かんでくる。

その考えを確かめるべく、倒れているムスビに向かって手裏剣を投擲する。

手裏剣が当たるとムスビは土に変わる。

その瞬間、エンの背後の土からムスビが飛び出してくる。

ムスビが拳を連続して放つが、その攻撃全てを受け止めた。

（まさか、ここまでやって届かないとはな）

ムスビはエンが火遁・豪火球の術を使ったとき、咄嗟に土遁・土中映魚の術で地面に逃れた。

その後、煙の中土遁・影分身の術でボロボロの自分を生み出し、倒れさせた後、再度土遁・土中映魚の術でエンの背後にまわったのだ。

「まさか、ここまで手を打って一発も攻撃が入らないとはな」

「それはこっちの台詞だ」

互いに腕を取って組み合う。

（だが、このままだとチャクラ切れで俺が不利になる。ここは勝負を賭けてみるか）

エンは強引に腕を払うとそのまま壁際ギリギリまで下がり印を結ぶ。

（あの印は……火遁・火龍炎弾の術！）

エンの口から巨大な炎の龍が吐き出され、ムスビに向かって直進する。

ムスビはギリギリまで引き付け避けるが、火の龍は壁際で反転し戻ってくる。

（なっ、チャクラで操られているのか！　何回も避けきれないぞ……ここは、防ぐしかない！）

ムスビは火の龍に向き直り印を結び、両手を地面につける。

「土遁・土流壁の術！」

すると地中から強固な土の壁が出現する。

そして、その土の壁と火の龍が激突する。

（すごい威圧感だが……耐えられる！）

火の龍が土の壁を侵食するが、土の壁を壊すのにいたらなかった。

しかし、ムスビはエンの動きを見落としてしまっていた。

エンはムスビの背中に強烈な肘鉄を浴びせる。
ムスビはその攻撃をまともにもらい、土の壁を突き破って地面を転がる。

（まさか……あの火遁・火龍炎弾の術の術は囮か……）

ムスビは火遁・火龍炎弾の術に意識が集中しすぎたため、エンの警戒が疎かになってしまった。
エンはその時を狙ったのだ。
ムスビはボロボロになりながらも立ち上がる。

（まだ立ち上がるのか……まずいな、チャクラが）

傍目から見ると、エンの方が優勢に見えるがそうでもない。
エンはこの試合の前にコンブの試合でチャクラを消費しており、休憩もなくこの試合に入ったためチャクラ切れが近いのだ。
本来は、今の一撃で決めるつもりだったのだが、ムスビが立ち上がってきたので内心焦っている。

「土遁・影分身の術！」

分身体を二人作り三人が縦隊になってエンに迫る。
一番前のムスビがエンの地面に向かって泥を吐き出し、そのまま殴りかかる。

（しまった、泥で足が！）

エンは泥で足をとられつつも、一番前のムスビを腕を取って投げ飛ばし、真ん中のムスビの上段蹴りを体をそらして交わし、顔面に拳を入れる。

そして、一番後ろのムスビが木ノ葉旋風を繰り出す。
エンはその攻撃を避けきれず、まともに喰らい後方に吹き飛んだ。

（やっぱり、アイツも疲れてるな。今の攻撃は避けられないレベルじゃなかったはずだ）

（泥で足をとり、二体の分身で俺の動きを制限、最後に本体が強烈な一撃を叩き込むか）

エンは口元を拭いながら立ち上がる。
エンは笑っていた。

「面白い戦いだが……そろそろ終わらせてもらうぞ」
「ああ、俺もそうさせてもらう」

その言葉と同時に互いに印を結ぶ。
お互い、相手が何をするのか分かるように。

「火遁・火龍炎弾の術！」
「土遁・土流壁の術！」

エンの口からは先程よりも巨大な炎の龍が吐き出され、ムスビは地面から先程よりも強固な土の壁を出現させる。
炎の龍は真っ直ぐ土の壁に向かって飛び、激突する。
先程とは違い、どんどん土の壁を侵食していく。

（どうだっ！　俺のチャクラの全てを注ぎ込んだ術は！）

炎の龍は土の壁を破り、ムスビを巻き込みながら飛び、壁に激突し消滅した。
ムスビはその場に倒れ、ピクリとも動かない。

最後まで立っていたのはエンだった。

「勝者、エン！」

（あ～疲れた……もう何も残ってねぇ）

エンも審判の言葉を聴いた瞬間その場に倒れた。

第四十一話

「……イテテ……ここは医務室か」

目が覚めると、試合会場の中ではなくベッドの中。
ここは、医務室か？
体は……包帯だらけだな。
どうやら簡単な手当てはされているらしい。

「よう、起きたか」

隣のベッドにはエンが居た。

「何でお前がここに？　確か俺はお前の火遁を喰らって負けたはずだけど」
「ああ、チャクラ切れで俺も倒れたんだよ。お前が意識を失った後でな。それで、ここに二人仲良く運ばれたってわけ」

なるほど、あの術に全てを込めたのか。
俺の敗因はあの時、後の事を考えてチャクラを温存したことか。
もし、チャクラを温存していなければあの術も防げて展開は変わっていたかもしれない。

「負けか……コンブと戦った直後だったから、行けると思ったんだけどな」
「逆だな。あの戦いの後だったから俺が勝ったんだよ。アイツ――コンブとの戦いで俺の油断や慢心は全部吹き飛んだからな」

だから、試合前にあんなに真剣な顔をしていたのか。

コンブとの対戦前にあった油断も俺の時には全くなかったし。

「所で、他の皆はどうしたんだ？　誰も来なかったのか？」
「ああ、今閉会式の途中だ。皆そっちに行ってる」
「おいおい、お前は優勝者何だから行かないと駄目じゃないのか？」
「いいんだよ。面倒臭い」

閉会式か……上位二名がいなくてもいいのか？
時間がおしてるから仕方ないのかもしれないけど。
少しして、部屋のドアがノックされる。

「あ、二人とも起きましたか」

現れたのは看護婦の格好をした女性だった。

「砂隠れのあなたは身体疲労とチャクラ切れですね。今日はしっかり休んでくださいね」
「りょうかい～」
「そして、貴方は低度の打撲と、全身火傷ですね。治療が早かったので大事には至りません。数日は痛いかも知れませんが、我慢してくださいね」
「分かりました。ありがとうございます」

どうやら、そこまで酷い怪我ではないらしい。
看護婦に頭を下げると、看護婦は微笑んだ。

「それじゃあ、お大事に」

そう言って、部屋から出て行く。
看護婦が出て行って直ぐに、部屋がノックされる。

「やっほ～二人とも元気～」
「怪我大丈夫？」
「……大丈夫？」

入ってきたのはラン、コンブ、モミジだった。

「安静にしとけば大丈夫だってさ」
「俺も大丈夫だ。閉会式はもう終わったのか？」
「うん。火影様と風影様が少し話ししただけだったからね」

風影か……今はまだ生きてるんだよな。
だが、半年後には大蛇丸の手にかかってしまう。
しかし、俺に出来る事は何も無い。

「だけど、これで中忍試験もおしまいかぁ」

そうか、これで中忍試験も終わりなのか。
何だか、寂しい気もするな。

「そうだ、パーティしようぜ！　パーティ！」

そう考えていると、唐突にエンが言い出した。

「パーティ？」
「えっと……何のパーティなの？」
「そうだな……中忍試験終了のお祝いとか？」
「ただ、騒ぎたいだけじゃないの？」
「そうとも言うな！」

パーティか……。
理由はともあれ良いかもしれないな。

「別に良いんじゃないか？　二人のお別れ会的なものも兼ねて」
「あ！　そっか、ランちゃんとエン君は砂に帰っちゃうんだね」

モミジの言うとおり、中忍試験が終わった今、エンとランは砂に帰らないといけない。
最後くらいはこういう事をしてもばちは当たらないだろう。

「へぇ～ムスビがそんな事考えてるなんてねぇ～」
「うるさいな。二人はどうする？」
「勿論行くよ」
「行く……」

どうやら全員参加するようだ。
さて、後は日時とか場所とか決めないとな。

「あ！　あたし、一楽が良い！」
「一楽ってお前が話してた店か……一度行って見たいな」

一楽はパーティとするのには不向きな気もするが……。

「まぁ、無理かもしれないけど一楽で。日時はどうする？」
「そうだな――今から！」

え？　今から？

「へぇ～これがラーメンか」
「まずはスープからよ、エン」

あの後、一楽に直行した。
誰も居らず、貸切状態であった。

「まさか、本当に一楽でやるとは……」
「予想外……」
「そうかな？　私は別に良いと思うけど」

俺は普通に焼肉とかそのあたりだと思っていたんだが……。
まぁ、別に良いか。
一楽のラーメンは美味しいし。

「所で、この中の何人が中忍になれるんだろうね」
「全部勝った俺は確定だな！」
「誰もならなかった時もある……」

中忍になる条件には色々ある。
ただ、力を示さば良いって訳じゃないからな。

「確かに、誰もならないって可能性もあるな」
「あれ？　ムスビは自信ないの？」
「ん～……不安か？　もし、中忍になったら下忍を一年もやってない事になるし」

もう少し下積みしてからなりたいというのはある。
Bランクの任務とかも入ってくるようになるらしいし。
しかし、もし今回を逃せば次の試験も参加しなくてはならないだ

ろう。
今のコンブとモミジの実力なら俺が何もしなくても二次試験を突破するだろう。
それは、原作に大幅に介入する事になってしまう。
さらに、もしこの二人が中忍にならず、次の中忍試験を受けるとする。
もう一人の実力は分からないが、この二人の実力なら十分三次予選まで進んでくるだろう。
そうなるのはとても困る。

「そういうもんか？　俺は早くなりたいけどなぁ～」

エンの言葉にムスビがコクコクと頷く。
二人は早く中忍になりたいらしい。

「私も少し不安かな？」
「ん～、あたしはどっちでもいいかな～」

モミジは少し不安、ランはどっちでも良いらしい。
未来はどうなるか分からないが、今を大切にしていかないとな。

第四十二話

中忍試験が終わり、その数日が過ぎた。
ランとエンは、砂に帰っていった。
三人が見送りに行った時、担当上忍ともう一人の班員に嫌な目で見られた。
同盟を結んでいるとは言え、木の葉と砂の関係は決して良好とは言えない。
嘗ては、互いに戦争をしていた中である、その溝を簡単に埋まるものではない。

「またね」
「おいおい、また木の葉に来る気か？」
「あ、そっか。そういう理由になるね」

これは帰り際のランとのやりとりである。
この言葉を聞いたとき、ムスビは悩んだ。
普通に考えれば別れの挨拶だが、ランの言った事である。
ムスビは色々な事を考えた。
原作知識を持っている事が災いしてしまったのだ。

（もしかして、木の葉崩しの事を知っているのか？）

などと、色々と勘繰ってしまったのだ。
しかし、最終的には気にしない事にした。

そして、さらに数日後。

ムスビ達は担当上忍であるカツオに何時もの演習場に呼び出された。

「みんな、中忍試験お疲れ様。今日呼び出されたのはどうしてかわかっているよね？」
「結果発表ですよね」
「その通りだよ」

呼び出された理由は、中忍試験の結果発表。
三人は期待を込めてカツオを見る。

「さて、皆も気になってる結果だけど――残念ながら三人とも不合格だ」

その言葉を聞き、三人とも少なからず落胆する。

「誰が合格したんですか？」
「砂隠れのエンとランの二人が合格した」
「あの二人が……」

二人の合格を聞き、モミジは嬉しそうな表情になり、コンブは複雑そうな表情になり、ムスビは色々と思案していた。

「ムスビに負けたランが受かってムスビが落ちる……」
「選考基準は色々あるからね。ムスビが今回見送られたのは経験不足という理由かな」
「経験不足ですか？」
「中忍になるという事は小隊を率いる事を求められる訳だけど、ムスビはまだ早いと判断されたんだよ。あの二人は君達より一年早く下忍になって経験も豊富だからね」

本来、中忍試験は狭い門である。
原作でルーキーながらシカマルが受かったのは、本人のリーダーとしての資質もあるだろうが、木の葉の内部事情による所もある。
木の葉崩しにより、木の葉は優秀な忍を多く失ってしまったからだ。
その為、早急な建て直しが必要とされた。
実際、ナルトが旅に出ていた二年半の間に、ナルト以外全員が中忍以上に昇格している。
現在は里の力もまだ衰えていないため、判定が厳しいものであった。

「でも、三人ともルーキーながら三次試験出場は凄いよ。次はきっと合格出来る」
「次こそは合格……」
（次の試験も参加しないといけないのか……）

今回の合格を逃したという事は、次の試験を受けなければいけないという事である。
それは、原作に関わる事であり、ムスビの本意ではない。
別に受けたくなければ受けなくても良い。
中忍試験は志願制であるからだ。
しかし、そうなるとコンブとモミジは受ける事が出来なくなる。
これまで共に頑張ってきた二人に、自分の勝手な都合で二人を犠牲にする事はムスビには出来ない。
ムスビは二人を見る。

（二人に次の試験をあきらめろなんて言えないよな……ん？）

モミジを見たときムスビは少し違和感を感じた。

表情が少し沈んでいたのだ。
何時も元気なモミジには珍しいとおもった。

「今日はこれで解散にするよ。明日からまた任務や演習をやって行こう」

そう言うと、カツオは木の葉を撒き散らしながら消えた。

「それじゃあ、俺はガイ上忍の所に行ってくるよ。お世話になってるし」
「帰る……」
「あ、私はちょっと残るね」
「鍛錬か？　あんまり無茶するなよ」

ムスビはガイ上忍の所に行き、コンブは家に帰り、モミジはその場に残った。
モミジは二人が帰ったのを見てから、一人で鍛錬を始めた。

（ムスビとコンブは中忍試験でも恥じない戦いをした。だけど私は……）

モミジは木に向かって蹴りを放ちながら自分の試合を思い出す。
ランに簡単にやられてしまった試合を。

（ムスビはそのランちゃんに勝った。コンブも勝てると思う）

モミジは劣等感を感じていたのだ。
班員である二人と比べて劣っていると。

（ムスビは下忍になった頃から私達の中で頭一つ抜けてた）

ムスビ本人は知らないが、周りの評価は高い。

下忍の最初から土遁を使いこなし、父親は他里にも名前を知られている海苔巻網である。

また、本人は周りから努力家だと思われている――実際は、流されやすい性格でリーの鍛錬に何時も付き合っていたら、半ば習慣化してしまっただけである。

（コンブはこの頃どんどん実力をつけていってる）

コンブはかなりの負けず嫌いであり、ムスビをライバル視している節がある。

原作のナルトがサスケをライバル視いた時のように、どんどん実力をつけていた。

（それに比べて私は……）

モミジも確実に成長しているのだが、二人を見ていたため、その成長を感じられなかったのだ。

「精が出る……」

「え？　コンブ、帰ったんじゃなかったの？」

声をかけられ後ろを振り向くと、袋を持ったコンブが立っていた。

コンブは袋の中から水の入ったペットボトルを取り出し、モミジに投げる。

モミジはそれを受け取る。

「何で戻ってきたの？」
「何か悩んでる……」
「ムスビは分からなかったのになぁ」

モミジの言葉にコンブは首を横に振った。

「気付いてた」
「え、そうなの？」
「あの後、二人で話した。モミジの様子が少しおかしいって」
「良く分かったね」

その言葉にモミジは驚く。
まさか、見破られているとは。

「分かりやすい……」
「あははは……」

モミジは苦笑いをした。

第四十三話

ムスビはガイ上忍達の所にやって来ていた。
中忍試験に落ちたことを話した。

「協力してくれたのに申し訳ありません」
「いや、構わないさ。次の中忍試験もうけるんだろ？　その時にまたがんばってくれ」
「はい……そうですね」
「よし！　頑張った君に良い物をあげよう！」

ガイ上忍が取り出したのは新しいレッグウォーマーとパワーリストだった。

「君に合わせて重さも調整してあるぞ！」
「あははは……」
「ガイ先生僕もほしいです！」
「そうか！　よし！　ならばリーお前にもプレゼントだ！」
「ありがとうございます！　ガイ先生！」

二人はいつものように抱き合っている。
一ヶ月の間にこのノリにも慣れたな。
ネジとテンテンは疲れたような顔をしている。

「しかし、そうなるとリー達と争う事になるわけか……」
「おおーっ！　燃えて来ましたよ！　勝負です、ムスビ！」
「今燃えてどうする……」

ムスビはリーをいなしつつ、レッグウォーマーとパワーリストを

取り替える。

「それにしても中忍試験って難しいのね。最後まで進んだムスビが通らないなんて」

「そうでないと、遣り甲斐は無いがな」

「俺としては皆とはあまり戦いたくないな」

「ほう、どうしてだ？」

「いや、俺はお前やリーみたいに強いやつと戦うのがそんなに好きじゃないから」

ネジやリーは強敵と戦うのを楽しんでいる所がある。

リーは喜んで我愛羅と戦っていた。

もし、ムスビが同じ場面に遭遇すれば、棄権するかもしれない。

「それでは、ガイ上忍。俺はこれで失礼します」

「そうか、またいつでも演習に参加してくれ」

「ありがとうございます。それでは」

ガイ上忍に頭を下げる。

（それじゃあ、コンブが行ってるだろうけど、一応モミジの様子を見に行こうかな）

ムスビは先程いた演習場に向かった。

あの後モミジは、コンブに悩んでいた事を打ち明けた。

コンブの無言の圧力に耐えかねたのもあるが、モミジがコンブの事をを信頼していたからである。

「俺やコンブと比べて成長してないって事？」
「うん……」
コンブは良く分からないと言った表情をうかべた。
「モミジは強い……」
コンブはそういうがモミジの表情は複雑だ。
「チャクラコントロールでは適わない……」
「それは……でも」
コンブがいうようにモミジはチャクラコントロールは上手い。
木登り業でも比較的あっさりクリアした。
チャクラコントロールだけならムスビよりも上手い。
しかし、まだモミジは納得していない。
「組み手をする。忍術ありの本気で」
「え！　どうしてそうなるの？」
「手っ取り早いから」
モミジが戸惑っているのも無視して、コンブはモミジから離れ構える。
「早く構えて……」
「あーもう！　分かった！」
モミジも渋々構える。

「行くぞ……」

そういった瞬間にコンブはバックステップをしながらクナイを投擲する。

「水遁・水乱波」

モミジは口から多量の水を吹き出し、クナイを押し流すとさらに印を結ぶ。

「水分身の術！」

吹き出した水を使い水分身を二体生み出す。

そして、三人が並列してコンブに迫る。

コンブは操襲刃でクナイを操り、モミジに向かって飛ばすものの、先程と同じように水で推し戻されてしまう。

「水遁・水飴拿原！」

口から水飴をコンブに向かって吐き出す。

コンブは、地面に撒くものだと重い反応が遅れ、まともに浴びてしまう。

（ねばねばして動きが……）

水遁・水飴拿原は、本来地面に撒いて相手の動きを制限する術である。

しかし、コンブのように忍具を主体にする相手にかけることで、忍具を使いにくくしたのだ。

実際コンブは手裏剣を投擲しようとしたが、指から手裏剣が離れ

ない。

「もらい！」

そして、三人のモミジが同時にコンブに殴りかかる。
コンブは為す術なく殴られ吹っ飛ばされた。
受身を取り、立ち上がり印を結ぶ。
その印を見て、モミジも印を結ぶ。

「火遁・豪火球の術！」
「水遁・水乱波！」

コンブが吹き出すた火の玉をモミジが吐き出した多量の水が掻き消し、押し戻す。
コンブはその水をまともに浴び、木まで押し流される。

「えっと……大丈夫」
「少し寒い……」

季節は春になりかけている時期である。
コンブはくしゃみをしつつつ、周りの木の枝を拾い、火遁で火をつけ温まる。

「分かった？　モミジは強い」

この言葉でモミジはコンブの意図を悟った。

（ああ、私を元気付けようとしてくれたのね）

口下手な彼なりに励まそうとしてくれていたのだ。

「ありがとう、コンブ。私は大丈夫」
「そうか……」
（これなら大丈夫そうだな）

ムスビは近くの木の陰から見ていた。
ムスビがやってきたのは組み手の最中であり、邪魔をしないように隠れて見守っていたのだ。
しかし、ムスビは出るタイミングを見失ってしまっていた。

「よっし！　次の中忍試験は合格するよ！　その為にも、しっかり修行しないとね！」
「うん……」
（やっぱり、あの二人を犠牲には出来ないよなぁ）

ムスビは二人を見てため息をつく。
モミジが元気になったのは喜ぶべき事だが、ムスビは次の中忍試験の事を考え気を揉んでいた

プロローグ

中忍試験から少し月日が流れた。
俺は次の中忍試験に燃える、コンブとモミジと共に鍛錬に励んだり、ガイ班の訓練に参加したりと忙しい毎日を送っていた。
そして、今日はコンブとモミジと自主鍛錬を行っていた。

「そういえば、今日だよね」
「何が……？」

そうか……もうそんな時期になるのか。

「忍者学校の卒業試験の日だな」
「ああ……」

コンブは今気付いたという表情をしている。
あまり興味が無いみたいだな。

「やっと、私達にも後輩ができるんだね～」

対照的にモミジはとても興味があるらしい。

「そうは言っても、関わるとは限らないけどな。俺達が合同演習したのはガイ班だけだし」
「そうだったね……」

ガイ班以外と合同演習は行っていない。
大抵の忍は、術は隠蔽するものと考えているのかもしれない。

「それに、全員がなれる訳じゃないしな。その前の演習で全員下忍になれないってこともある」
「そういえば、サバイバル演習があったね。私達は結構あっさりクリアしたけど」

二人はあの時の演習を思い返しているようだ。
あの時は、皆協調性があった為、クリアできた。
もし、班員にサスケとかナルトとかがいたらあんなに上手くいかなかっただろう。

「考えていても仕方ない……」
「そうだね。次の中忍試験に向けて頑張ろう！」

前の中忍試験のお陰で二人は、メキメキと実力を伸ばしていっている。
組み手ではまだまだ勝ち越しているが、このままだと追いつかれるかもしれない。
皆が強くなるのは嬉しいが、負けるのは悔しいな……俺もしっかり修行しないとな。

その日の夜、ムスビは父親である網に起こされた。

「父さん？」
「火影様からの呼び出しだ。直ぐに、準備しなさい」
（巻物の事か？　だけど、何で下忍の俺が……）

ムスビは今日巻物が盗まれる事を知っていたが、呼び出されるとは微塵も思っていなかった。
何故なら、ムスビは下忍となった時、木の葉の機密事項について何も教えられなかったからだ。
普通の下忍は禁術の巻物が火影邸にあるとは知らない。
機密の情報は中忍によって初めて教えられ、位が上がる事で開示される情報が多くなる――と、ムスビは推理していた。
ムスビは直ぐに着替え、網と共に外に出る。

「本当は中忍以上が召集される筈だったんだが……火影様が息子を連れてこいと言ってね」
「火影様が？　一体どういう理由で……」
「それは僕にも分からない」
（火影様が？　一体どういうことだ？）

一体どういう意図で自分を呼んだのか、ムスビには分からなかった。
火影邸に近づくと、火影邸から怒声が聞こえてくる。

「今度ばかりはいたずらではすみません！　火影様！」

火影邸の前には多くの忍が集まっていた。
そして、ナルトの処遇について話している。
そのどれもが、好意的なものではない。

（しかし、火影様はこうなる事を考えなかったのか？　ナルトの中に九尾が入ってるなんて分かったら、こうなるのは目に見えていただろうに。いや、それが狙いか？　あの時、里の住民の不満や憎しみをナルトに向ける事で、上層部への不満を抑えたのか？）
「火影様、ムスビを連れて来ました」

「うむ……ムスビ君、君にはナルトの居場所の心当たりはあるかね？」

ムスビは火影に聞かれ、一瞬ドキッとする。
原作の知識で森に居ることは知っている。
しかし、それはムスビが知りえない情報だ。
ムスビは自分が知りえる情報を三代目火影に伝える。

「……いや、無いですね。私がナルトと出会ったのは確か一年前ほどの忍者学校での合同訓練。それ以降は会ってないですから」
「そうか……書が盗まれてから既に半日が立っておる。急いでナルトを探すのじゃ！」

ムスビが内心ビクビクしながら答えると、火影は一瞬何かを考えるような顔をした後、直ぐに指示を出す。
火影の指示に従い、忍達は散開し、ナルトを探し始める。

（イルカ先生は……よし、森の方に向かったな）
「ムスビ、僕達も行こう」

ムスビはイルカが森の方に行くのを確認し、自分は網と共に街の方へ移動する。
屋根から屋根へ渡り、くまなく街を探索する。
しばらくの間、ナルトを探すが、人影すら見つける事が出来ない。

「この辺りには居ないようだね。ムスビは何処に隠れたと思う？」
「街には居ないでしょうね。子供一人がうろついているのは不審すぎます」
「だとしたら森かな。よし、次はそこに――」
「やっぱり殺しておけばよかったんだ！」

網の言葉は近くからの怒声に遮られる。
二人が下を見ると、数十人の忍が集まっていた。

「やるなら妖狐の力が出る前だぞ！」
「どのみち碌な奴じゃねーんだ！　見つけ次第やるぞ！」

その言葉を聞いて網は顔を顰めた。
確かに、彼らの気持ちも分からなくはない。
家族、恋人、友人をあの九尾の襲来で失ったものも多く、ナルトに対して邪な感情が芽生えるのも仕方が無いのかもしれない。

（しかし……これではあの子があまりにも報われない……）
「貴方達は一体何を言っているんですか！」

網がそう考えていると、ムスビが忍達の所に下りていた。

第一話

「何だ？　お前は！」

しまった……余りにも酷い言い草だったから飛び出してしまった。
どうやら、俺は自分で思っているよりも冷静ではないみたいだ。
場違いな怒りをナルトにぶつけているこいつ等をどうしても無視できなかった。

「それは私の台詞ですよ。殺すだの殺るだの……私達に与えられた任務は、ナルト君の捜索と保護でしょう？」
「う……それは」

俺の言葉に忍達は言葉を詰まらせる。
やっぱ正論って言うのは強いな……。

「それに、よく考えて見てくださいよ。下忍の私ですら封印の巻物なんて聞いた事なかったんですよ？　それをどうしてナルト君が知っているんですか？」
「ムスビ！」

父さんが降りて来て、手で制する。

「あ、網さま……」
「話は僕が聞く。ムスビはあっちの森を探してきて」
「だ、だけど……」
「いいから行きなさい！」
「は、はい！」

父さんに凄い剣幕で怒られ、父さんの指し示した森の方へ駆ける。
あんなに大きな声出すのを見たのは初めてだな……。
とりあえず、父さんに言われた森を調べるか。

「これは……」

ムスビが森野中に入りナルトを探していると、小さな家屋を発見する。
その近くには大きな手裏剣と、小さな手裏剣が無造作に捨てられており、手裏剣には血が付着していた。

（イルカ先生がくらった手裏剣か……まだ、新しいな。どうする？ここで、立ち止まっていて、火影様の術に発見されて色々疑われるのも……）

そう考え、ムスビは印を結ぶ。

「口寄せの術！」

口寄せの術でミズラを呼び出し、血の付着した手裏剣をかがせる。

「これで分かるか？」
「大丈夫だ……あっちにこの血と同じ匂いが一つ、後二つ匂いがするな」
「そうか……」
「ムスビ、気をつけろよ。一つの匂いは何か嫌な感じがする」
「分かった」

（嫌な感じか……ナルトの九尾の匂いを本能的に分かっているのか？）

ムスビはミズラを頭の上に乗せ、指示に従い、木から木へと飛び移りながら進む。

少し進むと、ミズラが驚きの声をあげた。

「一つの匂いが一気に増えたぞ！」

「どういうことだ？」

「同じ匂いがするのが全部で――大体千ぐらい出現した」

「分身系統の術か？　だけど、千って……」

ムスビは火影に見られている事を考えながら言葉を紡ぐ。

（影分身の術か。しかし、改めてナルトのチャクラ量はとんでもないな）

千人に分身するという事は、チャクラを千等分するという事である。

普通の忍なら術が発動すらせず、意識を失ってしまうだろう。

「お、匂いが一つに戻ったぞ」

「そうか……」

ムスビがふと空を見上げると、雲の隙間から陽が昇っていた。

「ムスビ、この辺りだ」

「ああ……見つけた。ありがとう、ミズラ」

ムスビは、ナルトとボロボロのイルカ、顔が腫れ上がって気絶し

ているミズキを発見すると、近くに着地する。
それと同時に、ミズラは煙と共に消える。

「君は、ムスビ君だったね」
「これは……どういう状況ですか？　事情の説明をお願いします」
「ん？　お前は……ああ～っ！　あの時の兄ちゃん！」

ムスビは直ぐに事情の説明を求めるが、それをナルトが遮る。

「久しぶりだね。えっと、事情を説明してもらっていいかな？　君がどうして巻物を持ち出したとか、ミズキ先生とイルカ先生がボロボロになってるとか」
「分かったってばよ！」

ムスビは二人から、事の経緯を聞く。
ミズキがナルトを誑かし、火影邸から巻物を盗ませ、その巻物を悪用しようとしていた事。
それをナルトが巻物の術を用いて、ミズキを倒し阻止した事などが語られた。

「なるほど……分かりました。一旦、火影様の所へ戻りましょう。立てますか？」
「ああ、大丈夫だ。簡単な手当てはしているからね」
「ねぇねぇ、コイツはどうすんの？」

ナルトがミズキを指差しながら二人に尋ねる。

「ああ、連れている最中に起きられても面倒だし、拘束させてもらうよ」

ムスビはミズキに猿轡を噛ませ、ロープで手足を拘束する。

（縄抜けの術は時間がかかる。不用意な動きをすれば、直ぐに気絶させるか）

土遁・影分身の術で分身体を二体生み出し、その二体の分身体がミズキを運び、本体のムスビはイルカに肩を貸した。

その後、特に何事もなく火影邸の前に到着する。

そこには、多くの忍達が待機していた。

殆どの忍がナルトを冷たい目で見ていた。

イルカが火影に巻物を手渡す。

「何があったか説明してくれるか？　イルカよ」

「はっ！」

イルカが経緯を説明する。

その説明に多くの忍が戸惑った。

何故なら、ミズキは温和な人柄で知られており、そのような事をするとは微塵も思われていなかったからである。

「うむ、まさかミズキがのう……ミズキは拷問・尋問部隊に回してくれ。背後に何かあるかもしれんからな」

火影がそういうと、何名かの忍がミズキを連れその場を去った。

「皆の者ご苦労じゃった。この件はこれで終了じゃ」

「ま、待ってください！　火影様！　コイツは封印の巻物を勝手に持ち出したんですよ！　重罪ではないですか。何か罰を与えなければ示しがつきません！」

「なっ！　待ってください！　ナルトは騙されてやってしまっただ

けです！」
（こいつ等……謝罪もないのか。さっきまで、あんなに自分勝手な事言っておいて）
その火影の言葉に一人の忍が意義を申し立てる。
その忍の言葉に回りも同調する。
その言葉にムスビは憤りを感じていた。
「こうして、巻物も無事戻ってきた。何も言う事は無い」
「ですか……」
「火影様もそう言ってるんだ。無理に罰を与えなくても良いでしょ」
そう言った網の後ろには、カカシ、ガイ、アスマ、紅などナルトを差別しない人物が立っていた。
そして、その忍の多くが里の中でも指折りの実力者であり、他の忍は何もいえなくなった。
「ふむ……分かってくれたようじゃな。皆解散してくれ」
火影の言葉に一斉に解散する。
何名かはまだ渋っていたが。
「イルカ先生！　合格祝いに一楽のラーメンおごってくれるんだよな？」
「ああ、行くか！　ムスビ君もどうだい？」
「ええと……流石に朝からラーメンは……今から演習なので」
「そうか……」
ムスビはイルカに一楽に誘われるが断った。
流石に、朝からラーメンという脂っこいものを食べる気にはなれ

ない。

「ナルト、下忍になったら色々大変だけど頑張れよ」

「おう！」

「それでは、イルカ先生失礼します」

（さて、寝不足だけど演習場にいかないとな）

ムスビは欠伸をしつつも演習場に向かって走っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5999p/

とある忍者の奮闘記

2011年12月28日02時48分発行